

新しい家庭科

ut

“病む”ということ



1984 11

国立婦人教育会館図書

和 104185

# 野の花をたずねて さるとりいばら



花の時期に人の目を引くほど美しいではない植物でも、実を付けるころになると、ほっておかれないものがあり、人間の勝手さに彼女(?)たちはあきれていることでしょうが、そんな草の仲間に、このサルトリイバラがあり、ツルリンドウ、ヤマホロシ、ヒヨドリジョウゴ、液果は白くても小さな丸みがあり何ともいえずかわいいスズメウリがありで、思わず手に取っていとおしみたくなります。

この絵の実は、ある植物仲間の機関誌の表紙にするため、若い会員の人たちが描いてほしいと置いていったものですが、夫が入院中で、花瓶にさしたものの、描く気になれずになりました。一週間ほどたつと葉が枯れしほみ、その姿が夫の間近に迫る死を予言しているようで、はっと胸をつかれ、せめて真赤な実がつやを失う前にと、看護の合間に心をこめて仕上げました。

読みさしの本を置いては、描く所をながめたり、仕上がった絵をじつと見てくれた夫も、そして病室から見えた夕映えの美しい富士の姿も、今は遠く懐しい思い出になりました。

(大室君子)

## 〈巻頭言〉

# 病むということ

沖藤 典子

病いは、人間から生への希望を奪い、存在への自信を失わせる。

病いにも、一時的な炎症、あるいは回復が確実なものと、一生背負わなければならない病い、あるいは近い未来に生の中絶が予想される病いなどいろいろある。だがいずれにせよ、不慮の死を迎えない限り、人は何らかの形で死に至る病いを歩むことになる。

その意味で病いは、人間の命の平等性を、もたらしてくれるものではないだろうか。

私はこれまで、非常に健康な人間であると信じて生きてきた。それがある日突然、「あなたには、死ぬまでつきあっていかねばならない心臓病がありますよ」と言われた時の驚き、失墜感のようなもの、それらは、そのまま私の“生”を見る目を変えていったように思う。

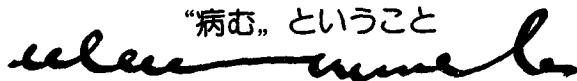
病いは、その対極にある生の謳歌を追い求める。それ故に人としての尊厳や、自らの力で生きる熱望、奪い失われた希望や自信をとり戻そうとする情熱をかき立たせるものでもある。ホスピス運動も、基本的には命が理不尽に中断されるが故の生のありようを求めるものであり、死への準備を築こうとする一人一人の心の中にあるものだろう。

病いは肉体のみならず、精神にも、社会にも家庭にもあるだろう。自らを“病む者”と認識した時、人は他人に優しくなれ、謙虚になり、幸せへの感性を研ぐ。詩人の魂にも似た自然・宇宙への畏怖を抱くことが出来るのではないだろうか。

(作家)



“病む”ということ



<p>〃病む〃ということ</p> <p>病む現代の病根とその癒しの方途</p> <p>病むということ</p> <p>心を病むということ</p> <p>〃身体〃をいとおしんで生き合える世の中に</p>	<p>〃病む〃ということ</p> <p>新しい家庭科を創るために</p> <p>小学校では 食糧の問題を考える</p> <p>中学校では 理論と実践の間</p> <p>高等学校では 「料理」「裁縫」を越えることは</p> <p>高等学校では 〃投稿〃家族の授業に取り組んで</p> <p>大学では 今、家政系短大における教員養成</p> <p>〃発言〃</p> <p>学習の主人公たち</p> <p>あなたはこう思う？</p> <p>川柳を作ってみたら</p> <p>病むことへの挑戦</p> <p>病む中で見つけたもの</p> <p>病む中で見つけたもの</p> <p>職業と病気</p>	<p>沖藤 典子</p> <p>丸橋 賢</p> <p>新島 淳良</p> <p>井原美代子</p> <p>中里 清志</p> <p>檜田 真澄</p> <p>福島 澄香</p> <p>東京都立農林高等学校家政科</p> <p>中島 明子</p> <p>今の家庭科</p> <p>兵庫県立西宮今津高等学校生徒</p> <p>横浜市立公田小学校四年一組の子供たち</p> <p>山田 富也</p> <p>塚本しづ子</p> <p>鈴木 晶子</p> <p>皆川河奈江</p>	<p>1</p> <p>4</p> <p>9</p> <p>14</p> <p>19</p> <p>24</p> <p>28</p> <p>34</p> <p>38</p> <p>45</p> <p>56</p> <p>58</p> <p>60</p> <p>62</p> <p>64</p>
---	---	--	--



❀ 連 載 ❀

町医者の願い.....中野 明 66  
 教師のつづやき.....鈴木 正美 68  
 米の流通のしくみ.....むらき数子 69

野の花をたずねて.....さるとりいばり.....大室 君子 50

視点.....「教える」副作用.....長谷川 孝 50

現場から——「影を認める」その1.....児玉すみ子 52

露通信.....満月とブラハ.....武田 秀夫 54

ふじたけんじ.....夜.....藤田 健次 49

女の人生・男の人生.....母子家庭と父子家庭.....増本 敏子 74

萬葉の男たち・女たち.....姉と弟.....井田 邦弘 75

風に向かって.....仲間と一緒に.....松村 寿美 76

男女平等教育.....フットルース「ストリート」.....中嶋 里美 77

すすめてみますか.....オフ・ファイアー.....遠藤 由紀 78

シネマ.....『野性の女よ、さようなら』.....小田亜佐子 79

ほん.....「こころはな」男女で学ぶ家庭科.....石川 由紀 80

We report

「長野県須坂高校」.....〇波.....病む、ということ.....半田たつ子 84

〇ひと.....中里清志さん 71

表紙デザイン 加藤由美子  
 目次イラスト 馬場洋子  
 本文イラスト 井田裕子／中野敬子／野中浩一／半田たつ子

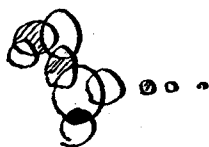
〇“We.. EDITOR'S NOTE 96    〇あんでな 94    〇十字路 92  
 〇この号を読むために 82    〇情報 90

☆「病む」ということ☆

## 病む現代の病根と

### その癒しの方途

丸 橋 賢



病む現代——あるお弁当のスライドから

「良い歯の会」の定例学習会が毎月第二土曜日に開かれているが、その時使われているスライドの中に次のような一枚がある。ある日私がお弁当屋さんから買ってきた、今流行のホカホカ弁当である。いつもは家内が作ってくれるお弁当を食

べているのであるが、何かの都合で作ってもらえなかった時、買ってきたものである。このようなお弁当を食べる機会はありません。で良いチャンスだと思い、スライドに撮っておいたものが良い教材として役立っている。

このお弁当は白米にエビの天ぷら二匹がのせられ、タレをかけ、ピンクの大根漬けが添えられた天重と、ワカメ入り生野菜、豆腐とワカメ入りの味噌汁の三点である。お弁当屋のショーウィンドウを眺めながら、取り合わずに気を配りつつ選んだものである。三点とも発泡スチロールの容器に入れられ、この材質からはモノコークが溶け出してくるであろう。白米は古米で、白米にただけでもビタミンBは九五%取り除かれてしまうのに、こう古くではもうビタミンはほとんどゼロのはずである。ミネラルも無い。防虫防腐剤もたっぷり使用してあるだろう。エビも油も同様なものである。サラダの野菜は合成洗剤で洗われ、よくすすぎもされていないらしい。小袋に入れられたドレッシングなどかけて食べると、一時間も舌の表面がヒリヒリしている。味噌汁の豆腐は輸入大豆で防腐剤入り、だしは化学調味料である。これだけ徹底的に手抜き

をするためによくここまで工夫したものだと思つてため息が同時に出てしまう。おまけに真赤なチェリーや黄色の毒々しいミカンの缶詰めが付け合せてある。

最近、この一枚のスライドを見るたびに現代というものの姿を見る思いがしてならない。考えてみるとこのお弁当のみではなく、ありとあらゆるものが現代を表しており、その像は深く病んでいるのである。キウリもトマトも果物も、本質的にはこのお弁当と同様に、コスト低減、能率向上、利益追求の法則に従って生産される。良いもの、正しいものを追求して生産されるものは発見するのが難しい。物のみではなく、政治や行政、そして私の現場である医療のような「行い」までも、利益追求を旨とするようになってしまった現代である。社会が構造的に病んでいるわけである。もちろんそのようなにして生産される食品を食べ、そのような社会を生きる人間が肉体も心も深く病んでいるのは当然である。周知の通り、現代では死亡率の一位はガンとなり、約四人に一人がガンで死んでいる。脳卒中や心臓病をもたらす動脈硬化はほとんどの成人にひろがり、小学生にまで増加してきている。小学生の七％に尿糖が検出される事象である。多くの子供が近視であり、精神もまともではない。そして成人の九十％以上が歯周病に罹り、顎の骨が溶けている。何ゆえに現代はこのような病んでいるのであろうか。

## 病根は人間の無知と欲望

病む現代の病根を明確に理解するために、現代人の病いの性格を分析してみるとは極めて有益である。現代の死亡率の上位は全て成人病と呼ばれる疾患で占められており、一昔前のようにバクテリアの侵襲に敗れて発病し、死亡するといふケレスは珍しくなっている。昔の病いを外因性疾患とすると現代病は内因性疾患、生活由来性疾患と言えるのである。

ガン、動脈硬化症、糖尿病、肝硬変、歯周病、虫歯、心身症、これ等は全てバクテリアによって起こされるものではなく、人間の生活の在り方によって作り出された病いである。

現代人の生活が、人間のいのちが求める生活からそれ、いのちをゆがませているのである。私たちの生活がこのような状態になってしまった原因は、第一に私たちがいのちの求めているところを感じし得なくなっていることと、第二に、欲望や怠惰のおもむくままに走り、いつしか人間のあるべき姿、いのちの道を踏みはずしたことにある。無知と欲望、つまり無明こそ現代病の病根であると言えるのである。

そのような人間の生き様により、私たちの心身も深く病んでいるがそればかりでなく、社会は構造的にその中枢から末端まで病み、自然も深く病み、地球はガンの末期の如き姿を呈している。飛行機から見おろすと、人間に喰い尽された地

球は既に瀕死である。

病むいのち、病む社会、病む自然、この病根が私たちの無明にあるとすると、この原因の解決には大きな試練が待っていることになる。バクテリアが原因ではないから薬が根本解決をもたらすことはあり得ない。対症療法となるのみである。無明に効く薬も手術も医療機器もない。現代の病いと闘うこと、それは私たちの内なる無知、欲望との闘いと言えるのである。

## 荒唐する現代人の口腔

歯科医である私は朝から晩まで患者さんの口の中を見ているが、いささか気が重くなっている。すっかり荒唐し、人間のものとも思われない口の中を見ていると人間の終末像が目につく。浮かんできてしまう思いである。虫歯が多いことも問題であるが、成人のほとんどが歯を支える顎の骨(歯槽骨)が溶けている現実には深刻に受け止めるべきである。ある時私の診療所を訪れる新患のうち成人一〇〇人について調べてみたところ、九八人に多かれ少なかれ歯槽骨吸収が認められた。しかも最近はこの骨の溶ける病気である歯周病が低年齢化しつつある。小学生にも認められるのである。

二千年前にさかのぼり、古代人の人骨を調べてみると、外国でも日本でも顎の骨の溶けている例は認められないので

写真 1

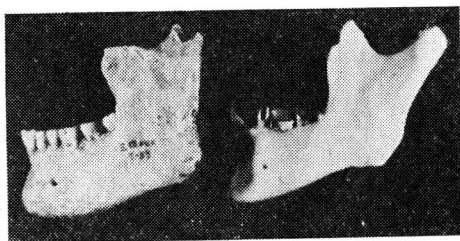
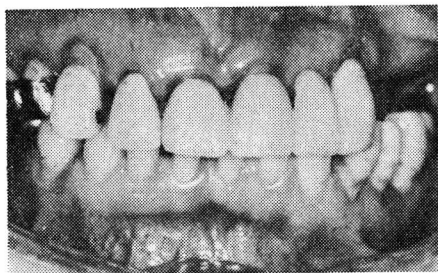


写真 2



ある。写真1は、左が古墳から発掘された日本人の顎骨であるが、その全体は逞ましく、歯槽骨の吸収は認められず、虫歯はなく、歯並びもよい。これが一般的な日本人の祖先の姿であり、外国人も同様である。それに比べ右の骨が現代人の下顎骨であるが、貧弱で骨も溶け、あちこちの歯が抜けてしまっている。骨質もスポンジのように多孔質で軽く、弱々しい。そして実際に現代人の口の中を見ると写真2のような状態となっているものが多い。あちこちの歯は既に抜け落ち、残っている歯も骨が溶けて歯根が露出し、グラグラしているのがわかる。これをX線写真で見ると、本来は歯根全体を包んでいたはずの骨が溶けて消えて



しまっている。骨が溶けるような身体であるから全身的にも体力がなく、風邪を引きやすく肩こりもする。この患者の御主人の口腔内を見ると、奥さんと同様すっかり骨を失っているのがわかる。同じ家族では同じ食生活が営まれている。その影響が現れているわけだが、おそらくこの御夫妻の子供たちも同じ結果になってしまうであろう。

私の調査では食事が現代化し、主食に精白穀物を食べ、動物性食品、砂糖、加工食品が多く、野菜、海藻、小魚、繊維が不足する食生活の人に、このような症例が多発する結果が出ている。小学生では、現代化した食生活の傾向が強く、オーバーカロリーの肥満児に歯周症が出現している。何しろ小学生の十%が高コレステロール血症、七%に尿糖の検出される現状である。

骨が溶けるような人の生活力が低下しているのは当然のこととて、このような人びとは精神力、集中力、忍耐力も低下し、労働意欲がなく、イライラ傾向が大となっている。

### 歯の輝きの差は知性の差

歯の悪いお母さんが連れてくる子供は全て歯が悪い。人間のものとは思われない壊滅的な口腔をしているお母さんが連れて来る子供の口腔はやはり目を覆いたくなる状態である。表情も共通して暗く、弱々しく、落着きがない。全体の雰囲気

気に輝くものの片鱗を感じられない。

反対に、表情が輝き美しいお母さんの肌は、健康的で、歯は白く輝き歯肉もピンクに輝いているが、このようなお母さんが連れてくる子供もまた、表情は輝き、口腔内も輝いている。この差は遺伝的な体質の差であると決めつけると誤りである。確かに体質的に歯や顎骨の強さに差はある。しかしたとえ弱い体質の人でも、いのちの求める原則に従って生きていく人の歯や骨は美しく輝き、表情も美しい。初診時にとてもひどい口腔をしていた母がいた。幸いこのお母さんは自分が口腔内をメチャクチャにしまったことに懲りて反省してくれた。そして眠っていた知性を蘇らせてくれたのである。このお母さんは、私たちの「良い歯の会」でも熱心に勉強してくれたし、食生活も歯みがきも健全にしてくれた。なってしまった虫歯は仕方ないから治療し、歯肉も治療した。この後、このお母さんの口腔は健康でピカピカである。歯肉はピンクに輝き、歯も虫歯の再発が見られない。そしてその後育った子供は一本も虫歯も出来ず歯肉もピンクに引き締り表情も明るい。これに見られるごとく、子供の身心の健康を左右するのは母親の知性に裏づけられた本物の愛情であることがわかる。このお母さんは、歯を治したから効果が出たのではなく、頭の中身を治したから効果が出たのである。

もう一つ貴重な体験がある。小学校で歯の良い子供に聞い

てみると、みんなこう答えるのである。

「うちのお母さんは、毎朝野菜を沢山食べさせるんだよ」  
「ボクのお母さんは厳しいから甘いものを買ってくれないんだよ」

このように子供たちがきまり文句のように最初に発する言葉はお母さんであった。このような子供たちの表情はハツラツとしている。今私は、小学校で歯科検診を行う時、子供たちの口の中を見なくとも、教室に入ってくる子供の顔や姿勢を見るだけでその子の歯が良いか悪いか判定できる。そしてその子のお母さんの表情も知性もわかるのである。いのちを守るもの、それは知性の復権なのであろう。

知性を眠らせ、食をはじめとする生活習慣が混乱し、多くの人びとの歯槽骨が既に溶けてしまっている。しかしその人びとが知性を蘇らせ、食生活や生活全体を健全にすると、溶けて失われた歯槽骨は見事に回復してくるのである。いのちが求めている条件が回復されると、いのちも回復するのである。

## 癒しの方途

病むいのちの背後には食の混乱があり、その背後にはその食生活の営まれる家庭の崩壊、そしてその家庭が組み込まれている社会の崩壊がある。例えば私の調査したある農村の小学校では生徒の全てが虫歯にかかり、口の中は無惨な状態と

なっていたが、ここの子供たちの三九%が視力一・〇未満、そして無気力児童が多かった。その食生活を調査してみると、驚いたことに加工食品、甘い菓子を多食し、家庭で料理されたものをあまり食べていない状態であった。農村であるのに、野菜も嫌いで食べていない。そしてそのような食生活の混乱の背後にはその子供たちの家庭の無惨な崩壊が見られた。お父さんは出稼ぎに行き、お母さんもパートに出かけ、おじいさん、おばあさんが子供たちの世話をしているのである。畑仕事の間に食事の世話をするので手のかかるものも作れず、加工食品に頼った安易な食生活となっているのである。そしてその更に背後には、戦後の農業政策の影響で、存立基盤を失った農村社会の崩壊がある。この子供たちの荒廃した身心を救う道は、病む社会そのものを癒すしかなく、それは既に医療に携わる者のみが行う仕事ではない。

病んだいのちを癒す道、それは病む社会、病む自然ごとそっくり癒すことである。そのためには全ての人が立場や持場を越え、人間が健やかに生存できる明日への願いにおいて一致し、共同のテーブルについて、健全な社会、文化、生き方を築いてゆくしか方法はない。その仕事がいかに遠大なものであったとしても、歴史に小手先の方法は通用せず、私たちは一滴の雨として地道な正攻法に殉じ、大河を形成してゆくべきであらう。

(まるはし まさる・歯科医師)

☆『病む』ということ☆

# 病むということ

新島 淳良



病気になる（病む）という言葉も、病氣、という言葉も、広い意味、広い状況、大きな文脈で使われることもあれば、ごく狭い意味で使われることもある。だから、これから書くのが、どういう病み方、どういう病氣についてであるのか、はじめにことわっておくほうがいいと思う。

私の妻が昨年（一九八三年七月）発病し、約一か月後に、

膠原病の一種である「皮膚筋炎」と診断され、九月二一日に東京都杉並区のK総合病院に入院し、以後退院と入院をくりかえし、今年の六月二〇日に四度目の入院をし、八日目の二七日に息をひきとった。最初の入院のときに胸膜から大量の液体を抜きとったが、そのさい右胸からも左胸からもガン細胞が発見され、すでに手術は不可能であると告げられた。死後解剖の結果、卵巣、肝臓、肺のガンと皮膚筋炎が合併した病氣におかされていることがわかった。この「病氣」について書くのである。つまり、特別重い病氣について、

次に、病人の略歴を記す。新島比和子は、一九三八年三月二二日、横浜市に生まれた。姉が四人、弟が一人。父は外国航路の船員を経てレストランを経営していた。横浜の家を戦火で焼かれ、長野県飯田市に移り、小・中・高校を卒業後、上京して一九五七年YWCA専門学校（秘書養成科、修業年限一年）を卒業して三菱商事（水産部）に入社。小学校在学中からピアノを習っていたが、上京後リード・オルガンを長倉茂子さんに学び、三菱商事在勤中からオルガン教師をした。この間、阿

部行藏氏（当時東京都立大学教授）の指導する現代史研究会に参加、労働運動史を学んだ。研究会で識り合ったT氏と一九六四年一月結婚、二女の母となる。この間、生協運動をはじめとする市民運動に参加、一九七五年、当時山岸会（一種のコミュニケーションで農産物およびその加工品を生産供給する）にいた私と識り合い、一九七九年一月から二人の娘を連れて家を出、私と杉並区Y町に同居した。一九八一年三月T氏と協議離婚、同年同月、私も協議離婚が成立し、この年の暮に結婚届を出した。七九年四月以降、私と「新島私塾」をひらき、リード・オルガン教室を担当した。また、月刊誌『彷徨』を私と共同編集し、ほとんど毎号短い文章か詩を載せた。発病以来約二百首の詩を書き、それらは「かげろう抄」と題して『彷徨』に載っている。昨年四月、同じ杉並区内のE町に転居、転居後三か月で発病。四六歳と三か月の生涯であった。重要なのは離婚し、二人の子を連れての再婚である。

次に私のことを必要なかぎりで自己紹介する。一九二八年東京市渋谷区に生まれた。比和子とは十歳の開きがある。長男で、二人の弟と三人の妹がいる。父は出版業で晩年は脳軟化症のため数年間意識がなかったので私が社長代行したことがある。結核のため旧制高校を中退、中国語・中国研究を独学でやって一九五七年早稲田大学の教員となる。一九七三年大学教授をやめて山岸会に入り、五年間を過ごす。一九五六

年に結婚したS子との間に一男一女があり、娘はいまも山岸会にいて一男の母となっており、息子は母親とともに住み、会社員である。新島私塾では中国文学（魯迅）と哲学（中国古典）を講じている。

このほか、お世話になった病院のことも書いておかなくてはならない。K病院は、私の姻戚にあたる主治医の親友が院長で、主治医の紹介で入院した。普通なら退院許可にならないところを三回も退院・自宅療養を認めてくれた。訪問看護婦という制度があつて、自宅で検査を受けられた。深夜でも電話をかけるとすぐ入院を許可してくれた。総合病院で検査設備が完備し、各科の医師の共働がうまく機能していた。

以上をまとめると、このケースの特殊事情は次のようになる。医師・病院にめぐまれて、発病以来約半分の日時を自宅で療養できたこと、子育て中の主婦であり、また生活費の半分をかせぐ勤労者の病氣であつたこと。夫である私が二六時中家にいられたこと（入院中は自転車で一日二往復して付添うことができた）。病人と私とがともに以前の配偶者とその間に産んだ子のことで、互いに非常に氣を使っていたこと。そして、経済的にはあまり氣を使わずにすんだことをも特殊事情として挙げておかなくてはなるまい。簡単に言えば私たちは自分の家に住んでおり、借金が一円もなかったということである。病氣の「皮膚筋炎」が厚生省の難病指定に入って

おり、医療費（差額ベッド代をのぞく）の負担がかからなかったということもある。私たちには貯金がなかったが、隣りに住んでいる妹夫婦が、困ったらいくらでも金を貸してくれると言ってくれていた（結局借りずにすんだが）ということも、家族の三人が心おきなく看病に専念できた重要な条件であった。

なぜこういう特殊事情をのべたかといえば、これからの彼の彼女の闘病、私の看病の話を「美談」としてうけとめてほしくないからである。

病人は四五歳になるまで、文字通り身を粉にして働いていた。T氏と結婚していた間は未熟児の二人の娘の学費をかせぐため、何十人という幼児にオルガンを教えていた。私といっしょになってからも、生活費の半分を彼女が負担していたから、片道二時間近くかかるM市に、もとのお弟子さんを教えるために通っていた。

生まれてはじめて、彼女は三度の食事を人につくってもらい、ねがえりまで人にやってもらい、風呂も大小便の世話も、三〇センチ離れたものを取ることもさえも人手をかりなければならぬ状態になったのである。一番はじめに書いた詩（入院前）の一節――

ある朝突然立てなくなった／ある朝突然ざくろのような全

身の湿疹に驚いた／ある朝突然すいかのようなお腹に息もつまった／三木清は獄中でこんな風にかゆかったのかしら／ピカのケロイドはこんな風に痛かったのかしら／妊娠八カ月のお腹だつてこんなに苦しくはなかった／階段を日に三十回も上下していた昨日が、自転車の前後左右に荷物をつけての買物姿の昨日がうそのよう／花の四五歳なのに、これからは女の本番だと張り切っていたのに、夏休みは野外音楽会という名目のビールパーティを約束していたのに／ほろ酔い気分で弾いたり歌ったり食べたり、パツと騒ぐうと楽しみにしていたのに／娘が朝、せんたくしている、朝早く掃除している、食器を洗っている／淳良先生は買物上手、料理はプロ級、台所で娘二人と仲良くゴチャゴチャやっている／毎日ごちそうを作つて私を太らせる／隣からも日本料理のおいしいのが運ばれてくる／娘が顔をふき、髪をとかしてくる。服を着かえさせてくれる／淳良先生が、食事を手伝い、薬を飲ませてくれる、薬を取りに病院へ行ってくれる、／生れて初めて、私には女王様のような生活が訪れた。弱虫の泣虫の女王様／口はかわき水ばかり欲するのに涙の泉が身体の中にはあるのかしら／オルガンを弾きにきてくれる人がいる／淳良先生の話す魯迅も孟子もきこえる／そして／淳良先生のとめどなく続くおしゃべりをききながら、私はいつか眠っている。

次に第一回の入院中の詩から一つ。「オカルト」という題。

離婚したから　ばちが当たった／そんなのオカルト／お寺の  
いうまま先祖を祀らなかつた／そんなのオカルト／いろん  
な人をおとしめて／罪の意識にさいなまれた／それもオカ  
ルト／働きすぎて休養するため／全く動けなくされた／そ  
れこそオカルト／精神的な恐怖に耐えられなかつた／それ  
もオカルト／心の奥がすきだらけ／それもオカルト／すべ  
てオカルトでいいけれど／納得したい！／天まで二人をし  
つとした／これだけが真実かナー／そう思いたいナー

病人は入院中、また第一回の退院期（一九八三年一月～  
八四年一月）、第二回の入院期をつうじて、オルガンのレッ  
スンを再開することを切望しつづけた。一つには少しでも家  
計を助けようと思つて。四月一四日、最初のレッスンをベッ  
ドの上でやつた。その喜びを次のようにうたう。

オルガン・レッスンができた／ベッドのジャッキ上げ　成  
功／三〇分　坐れた／一時間　坐れた／まず坐る練習／オ  
ルガン・レッスンができた／ベッドのさくに／電子ピアノ  
をのせてもらい／楽譜をとつてもらい／手のかかる先生／  
オルガン・レッスンできた／歩けないけれど／手はしびれ

ているけど／皆の助けで／何かができる／オルガン・レ  
スンができた／ちよつとつかれたけれど／嬉しいナー

リード・オルガンとは昔どこにもあつた足ぶみオルガンで  
ある。だが、彼女のベッドの上に置かれたのは電子ピアノだ  
つた。足が動けないのだからオルガンは弾けない。すでにオ  
クターブに開けない指では生徒にお手本を弾いてみせること  
もできないのである。「嬉しいナー」は本当の気持であつた  
ろう。けれども、それは彼女のしたかつたオルガン・レッシ  
ンではなかつた。四月の段階で彼女はまだ坐れた。六月に入  
ると目が見えなくなつた。昼となく夜となく身体じゅうが痛  
む。最後のレッスンは死の十日前である。こういうレッス  
ンとき、まだ耳がきこえること、レッスンができたこと、弟  
子が来てくれたこと等が失われたことの補償には全然ならな  
いこと、それがまつたく別のことであることを病人は感じて  
いた。お金を百万円もらつたつて、病人には、何の慰めにも  
ならない。それと同じように、家族のみんなが、二人の娘と  
私が二十四時間つきつきりで仕事をし、勉強しながら、交代  
で休みながら彼女の話をきき、彼女をばげましていることは  
彼女の失われたものの代りにはならなかつたと思う。彼女は  
私や娘たちに最大級の感謝をしつつ、心も身体もどんなに苦し  
かつたことだろう。いや、身体の苦しみの千万倍も心が苦し

かつたろう、と思うのである。彼女の書き残した詩の多くが私への感謝、讃辭である。人は彼女を幸せだという。「智恵子抄」をもじって「比和子抄」だという。たしかに二人の愛をうたいあげた詩は多い。私は幸せだ、天までが私たちをし、つとして、という言葉が何度か出てくる。けれども私はそれらの詩をここに引用しようとは思わない。レッスンができた、と喜んだ日の二日後に彼女は「歩けない」という題で次のように書いている。

歩けない／どんなことか／生きていられないこと

歩けない／人間は別の生き方ができる／でもそれは　　なぐさめ

歩けない／どんなことか／それは私のしたいことが／何もできないこと

歩けない／それは絶望的なこと

つまり、レッスンのできた幸せ、愛に包まれて家の中で「女王様のように」くらしていることは、決して「生きていられない」「絶望的なこと」を打消すことではないのである。

私は十一か月間、こういう病人とつきあってきた。チヨ・ヨンピルは「愛が、美しいなどと、誰が言ったのか」とうたうが（この「窓の外の女」という歌を病人は朝から晩までテープできいてあきなかったが）、まったくそのとおりで思った。喜怒哀楽などという感情のレベルではない、その奥に

はやはり「苦しい」という意識があるのだと思いつづけた。日蓮は「いろいろのお経に病氣のある人は仏になるだろうと説かれているが、病氣によって真実の道を求める心がおこるからであろうか」と言った（妙心尼御前御返事）が、この苦しいという意識は真実を求める心なのか。

病人にとつて、病氣とは、かけがえのないものを、ひとつひとつ失う苦しみであつた。あるいは、ひとつひとつかけがえのないものを失いながら、自分と他人（家族）のなかの自分のかけがえのなさを深く深く感じることだつた。お見舞いに来てくれた人の口から、あるいは手紙から、彼女は「幸せ」だと言われ、自分でも「幸せ」だといっていたが、私のことばをもふくめて、どんなことばを聞いても、ほんとうは慰めにも励ましにもならなかつた。かけがえのあることならなぐさめのことばが事実の代りになる。私の看病は、ただこの苦しみを苦しんだだけである。

（にいじま あつよし・「新島私塾」主宰）

☆「病む」ということ☆

## “心を病む”ということ

井原美代子



このところ、私は「ウディ・アレン病」にかかっている。そこでこの病気についての症状を説明しよう。

六月末、シルク・ロードの一大文化遺産、中国敦煌の旅から帰ってきて間もなくであった。現実の生活感覚をとりもどせない時期に、監督・脚本・主演、全て彼の手による映画、「カメレオンマン」をみたため、突如重態に陥ってしまった

のである。原題は「Zeig」という個人名になっている。

私は、これまでウディ・アレンの映画をみたことがなかった。今回、彼の映画に接して、これまで経験したことのない、パンチのきいた知的な刺激を受けた。それは、相談の仕事を通して、長い間考えつづけてきた「私とは何か」というテーマに、ごまかしのない光りをあててくれたからである。

× ×

映画は、一九二〇年代、アメリカに、小心で傷つきやすい「ゼリグ」という奇人が実在していたという想定ではじまる。彼の奇人ぶりというのは、身に危険が迫ると、忽ちカメレオンのように、環境に順応し、人種・国籍・職業を越えて、心も体も相手になりきってしまうところにある。

つまり、自分の考えや、主張をもって相手と対立することを避け、全面的に対象を受け入れてしまう、あるいは、対象に同一化することで、敵の攻撃を避けてしまう男なのである。現代的な忍法、「しのびの術」とでもいったらいいだろうか。このように書くと、ひどく固い映画にきこえるかもしれ



れないが、実は徹底した喜劇なのである。

自分を適当にごまかして、摩擦を避けるというようなことは、普段、私たちの生活の中によくあることで驚くに当たらないが、彼が奇人であるところの所以は、人をあざむく自分、即ち、「私」というものを全く持ち合わせていないところにある。

言葉をかえれば、帰属する対象をもたず、世界をさまざま滑稽で孤独でドジな男の物語なのである。といって、これは、あくまで私の勝手な解釈であって、ウディ・アレンの意図するものかどうか知らない。帰属する対象をもてない「ゼリグ」のカメレオンの生き方は、いづこより来りて、いづこへか去る「私」という、とらえ難い存在にふりまわされて、ウロウロしている私自身そのものであったからだ。

×

×

実は、この映画を、私にすすめてくれたのは、大学を二年で中退したA君だった。彼は母親のすすめで、ここ数カ月、何回か相談にみえている。A君は、入学して間もなく、急に周囲の人々の視線が気になりはじめ、朝家を出ると学校に行かないで、映画・演劇・図書館めぐりをして過ごしていた。

大学からの知らせで、この事実を知った両親は驚いて、学内にあるカウンセリングや精神医の治療を受けさせたが、症状は一向に好転せず、医師のすすめで、精神病院に三ヶ月入

院した。

入院中、A君は、心理学や、精神医学の本を片っぱしから読んで、医者以上に医者の知識をもち、自分に「対人恐怖症」という診断名をつけた。映画の中のゼリグ氏も、精神科の医者に囲まれると、忽ち、フロイト理論を堂々と口にする立派な精神科医に変貌してしまふ。知識人や専門家がもっともらしい理論をふりまわしてみせても、その中身は、この程度のものだよと皮肉っているようにもみえるし、からかっているようでもある。

A君は、専門的な知識をもつことで病気にうちかつことができると思っていたらしい。しかし結果は不首尾に終わり、折角難関を突破して入った有名校を二年で退学してしまったのである。それ以降というものの、回復への希望をもつことを一層おそれるようになってしまった。再び挫折することがこわかったからである。

×

×

A君は、病氣の原因について、強い情緒性に結ばれている母子関係にあると自己分析をしている。母のそばに限り、自己のアイデンティティーを確立できないといつて、A君は家を出た。一人でのアパート住いである。生活費はパートで稼ぎ、貯えができると仕事をやめ、映画や演劇を見てあるくのが日課になっていた。何か新しいヒントをみつけない

と思つてゐるのだからと考へて、私はとめなかつた。

医者の治療に絶望した彼が、はじめて自らの力で回復への道を歩みはじめたようにみえたからである。私に、みてきた映画や演劇の話をしている時の彼は、実に生き生きとしていた。だから、A君を病人だと思つたことは一度もない。それどころか、現代社会のもつ矛盾や不安をするどく感じとるナীবプさは、病んでゐるどころか、健全でまっとうな精神の持主であることを証明するようにみえた。むしろ弊害は、新しい社会現象に、もっともらしい病名を次々とつけて、いい氣になつてゐる専門家の方ではないかと思つた。病名が増えるだけ、病人が増えつづけるであらうと。

まっとうな心をもつた青年であれば、彼らをとりまく状況が、いかにゆがんだものであるか敏感に感じとるに違いない。高校時代、A君は登校拒否を起こしたが、父親に一喝されてのり切つた。受験一本槍の暗い高校時代だつたと重い口調で語つてゐる。

入試を目的とする画一的・固定的な教育体制は、人間の成長にとつて欠くことのできない情緒性を無駄なものとして切り捨ててしまふ。受験から解放されたとたん、まるで飢えていたけものが、乾いた心をうるおそうとするように無意識の衝動がA君をのみこんでしまつたのである。この当然すぎる飢えをあえて満たそうとすれば、今日の社会では、主流か

らの離脱を意味するし、その疎外感が他人の目を一層意識させることになるのではないか。

×

×

「学校に行かない僕を、父は怠け者といつて非難するけれど、僕はやりたい事が沢山あるのです」とA君はいう。A君の父親が生きてきた時代は、食べるために働くという事でせいで一杯だつたと思う。地方の貧しい農家に生まれた男が、上京して都内に店舗をかまえるまでに至るには、想像できない困難さと努力があつたに違いない。

大学に行きかつたが、経済が許さなかつた。学歴のないハンデは、人より多く働くことで補う以外ない。自分が味わつた苦勞をさせたくない、多額の月謝をはらい、将来の夢を息子に託してきた父の嘆きや怒りも又当然のことといえよう。

親の愛も庇護もなく、自分一人の力に頼つて激しい競争社会をくぐりぬけてきた、まじめな父親は、外からみえない家庭の中で、妻や子に暴力をふるうこともあつた。両親を早く失つたA君の母親は、夫に殴られても泣いて帰る家がなかつた。彼女も又、ひたすら子供の成長を生甲斐として耐えてきた。

父の暴力におびえ、母の哀しみをみて、深く傷ついてきた、心優しい彼が、何の疑いもなく、人をけ落す、力の論理

に加担できるはずがない。A君は加藤周一を敬愛し、固定した価値にとらわれない柔軟な生き方を理想としていることを知った。

同質的な日本の社会では、一つの価値に固定して疑いをもたない生き方の方が、たやすいが、彼はあえて困難な途を選んで走りはじめたのである。彼が本当に自信をもって生きるに至るには、これからも多くの紆余曲折を経ていかねばならぬだろうと私の心は傷んだ。

×

×

A君が、病院で治療を受けたように、自己を確立できないゼリグも又、奇人として、精神医の治療を受けることになる。幸いフレッチャーという女医が、彼を奇人としてでなく、心に深い傷をもつ、一人の人間として治療に当たろうとする。

しかし、すでに医者になり切っているゼリグは、彼女から治療を受けることを拒否する。一計を案じたフレッチャーは、医師であることをやめ、患者になって、ゼリグと同じ悩みをうちあける。自分がいだいていた悩みを、そのままそっくり訴えられたゼリグは、虚をつかれてひどい混乱に陥ってしまう。他人のことは理解できても、自分についてわからなくなってしまう人間のおかしさであろう。

その混乱に乗じて、催眠をかけられたゼリグは、自分をこ

まかしてきた深層心理を女医に語りはじめる。小さいころ、父や兄に殴られたのだという。その父や兄も、又他人から殴られ、その他人も又別の他人から殴られ、その他人も……と彼の訴えは限りなく続いていくのである。

ゼリグとフレッチャーのやりとりは、個人が負える責任の範囲を単純に決めつけがちな心理学や精神分析への痛烈な批判になっていて、そのとりあげ方の功妙さは、啞然とする程みごとなものである。

ウディ・アレンのほこ先は、人間の内的価値に直接かわる専門職、たとえば、宗教家や、道徳家にも向けられる。彼らをもつ、独断性や偽善を、笑いのつぶてであばいていく。もちろん、私の仕事もその延長線上にあるわけだが、こうした本質的な問題を、喜劇仕立にしてしまう、ウディ・アレンの、人間に対する客観的なまなざしの鋭さはすごい。

A君の視線は、当然自分の主義主張をもてないカメレオンマンの孤独と不安にむけられるが、かつて軍国少女として一つの価値を疑いもなく信奉してきた私の関心は、カメレオンマンをとりまく、一般大衆に向いてしまうのである。彼らが、自分の思想や主張と思いこんでいるものは、所詮、他者の理論や思想のコピーであり、その時代の流れや常識であり、社会的肩書や経済力、地位といった権力との同一化にすぎないともいえるのではないか。

結局、主義主張をもたない、カメレオンマンも、又、主義主張をふりかざす専門家や大衆も、どっこいどっこいではないかという事になる。とすれば「私」とは何者であろうか。

いづれにせよ病んでいるもの同士が、他人を病んでいると断定する滑稽さ。両者の決定的差異は、カメレオンマンが、病んでいることに、人間的羞恥をいだいているのに対し、彼をとりまく人々は、病んではいけないと思って生きているということだろうか。

×

×

今日の社会で、正常だとか健全といわれるものは、自分について羞恥しないこと、疑いをもたないこと、つまり、病んでいることについての自覚をもたないことにあるといつてよいだろう。裏返せば、現代の病いを敏感に病まないもの、又、病んでいることの認識をもたないものも病人といえるのではないか。

本当のところ、有限としての人間は、病みつつ生きているのではないかと思う。それは生きながら死に向かい合っている自覚である。死は生によって、生は死によって、光は影によって、影は光によって支え合い照し合っている。この相矛盾する相対的な価値関係の、認識のありようが、今もつとも重要なのではないか。病むことの認識も又、同じである。

さて、映画の結末はというと、女医の治療が成功して正常

に復した彼は、はつきりと自分の意志や考えをもつ事によって、今度は他人と衝突や喧嘩をくり返す。再び窮地に立ったゼリグは、カメレオンマンに逆もどりして、最終的に、ヒットラーの親衛隊員におさまってしまう。今や医師としてではなく、一人の平凡な女性として彼を愛する心に感じたゼリグは、ヒットラーの後から手を振って彼女にこたえる。どうやら人間は、愛によってはじめて安心の場を確保し、あるがままの自分であることをおそれなくなるのではないかと思う。

映画は、一九二〇年から三〇年代にかけて実際に撮影された、モノクロのニュースフィルムを使って、巧みに合成したものである。本物のヒットラーの後に、チョコンと坐っているゼリグの姿に、私はかつての少女時代をそつと重ねてみる。

その軍国少女は、敗戦の日を契機にして、カメレオンマンに変貌し、今尚、帰属する対象を見出しえず、オロオロと迷いつづけている。これが、私の病いの一部である。

(いはら みよこ・家族問題相談員)



☆病む〃ということ☆

## 〈身心〉をいとおしんで

### 生き合える世の中に

つるまき さちこ



#### 身心二分のものの見かたの現代

この半年、ひざの捻挫が治らず、正座しにくいし、長くは歩けなくなりました。疲れると痛んできて足をひきずり気味です。つまり、片足を病んでいるわけです。幼いころから病氣ばかりしてきて、こんどはまた未経験のけがを長びかせて

しまっています。

ですから、からだをいとおしむことについて、いっそう切実なものが言えるようでもあります。逆に、こうした我が身の痛めかたをしていては、発言権などまるでないのかもしれない。

それでも「病んだことのない人を友だちに持つな」というコトバは、多くの人の実感から生まれたのでしようし、病んでみてこそ「自分やひとの〈身心〉をいとおしむことが真実できるようになる」のではないかと、ひざの捻挫の不自由さ痛さの中で、また、ひとしお思い知っています。

○

自分自身の例でみても、〃身心一元のいのちの在りようを活かして生きよう〃などと長年言ってきましたのに「少しくらいのことは我慢しよう耐えていこう」と、休まずに無理をします。けがをした三月末から四月と休めなかったし、力しごともしました。「からだは自分たちで守って育てていくしかない」と思い出すものの、勤めていると「歩ける程度のけがなら休まずに」と考えて、無理をする。こういう形で、他の多くの人たちも、か

らだを痛めつけてしまうことになるのでしよう。

人間の身体はモノとしての肉体の器官として成り立っているだけでなくて、心の作用をもるに受けて動いていますから、ときに、氣力でカバーできることもあります。下手にいたわれると氣力が弱って身体的にへたばりかねないから、「病いは氣から」と昔の人も言い合ってきたのでしよう。がまんしてがんばることも場合によっては必要かもしれないせん。しかし「いつでも、どんな具合でも」と耐えることが第一義になっては、お互いにきつく辛いことになる。程度の問題です。その程度を感じ分け判断するのは、子どもならばまわりにいるおとなの役ですし、少しおとなになっていけば、本人自身です。ところが、お互いどうも、程度が判断しにくくなっています。〈身心〉の感受性が鈍って、生きものとしてのいのちの判断能力は低下してきたようなのです。

食品も不自然な加工品で添加物まみれが大半になりましたし、かたいコンクリートに新建材の家や保育園・学校・職場です。

子どもとそろって食卓について食べる家庭が減っていき、生活はみよように余裕がなくなりました。社会全体の流れがそうさせているし、お互いが流れにのろうとして、その波をいっそう激しく波立たせているのでもありましよう。

健康保険制度で早期治療も可能になったはずなのに、病

人と医療費は年毎に増加するとか。健康法とからだ論のブームは、人民の自立への努力のひとつになってほしいことでしたが、やはり、買われ食われるかたちのままに終わりそうです。

身心二分のものの見かたで、この現代社会の現在がしくまれば成り立ってきました。資本の論理は、生身の〈身心〉の息づかいは無視して、能率よく働くロボットのような労働力的存在として、また、宣伝しだいでどのようにも買いこもうとするスナオな購買力的存在として、私たちを扱い続けてきました。

その結果、いまどうなっているか。私たちは、からだを道具扱いすることに馴らされかけてきたようです。殺し合いも平気なようにと。

### からだと〈身心〉

からだをいとおしむ、と言った場合、誰のからだを？と確かめたくります。これが、〈身心〉をいとおしむ、となれば、当然、自他をだいに活かして生きることの意味になる。と、私は考えているのです……。

からだと言うと、四肢五体のモノ的実体を示すだけです。が、実際には、ヒフも筋肉も内臓も「心の働き」につながっていて、私はどうしても、〈身心〉としての「からだ」の實在

情況を示すことが欲しいと思いました。なかなかないので、すね。「うつし身」ということがありますが、これは、「なきがら」と「かくり身」という一連のつながりの中でのとらえかたです。身と心がひとつに息づいて在ることを示す語が、日本にはないようなのです。むかしは「からだ」と言うとき、それは、こころの動きよう在りようも共に含めていたのかもしれませんが、現在では、手で触れ得る物としての肉体を呼ぶならわしになっています。身心一元のいのちとしての實在を言うときは、どう呼べばいいのか。〈身心〉と書くことで、その意をこめるほかはなさそうです。

ある人が、かつて、愛妻から「あなたは私のからだに関心があるだけなのだろう」と、なじられて、愛していることを他にどう表現すればいいのかわからないで、戸惑ったそうでした。恵まれたふたりと誰の目にも見えていた別の例では、妻のA子さんが、夫は私を愛しているわけではないようだからただだけにつき合っているのだろう。と、辛い想いで居る話をしたので、仲間たちはびっくりしましたが、誰よりもおどろくのは夫さんだったでしょう。以前、皆の前で、ぼくはこの人と共に暮らして本当に幸せだ、と、本気で話したことがあるのですから……。

妻にとって、からだは、「身」ではないのか。多くの夫にとって妻の「身」は〈身心〉としての存在なのか。これ

は、個々に、そのときに質問しても、はっきりとはつかまえられることかもしれません。家ではしごく無口になつてしまふ夫の立居振舞が、妻たちを淋しがらせることは多いようです。

そう言えば、女たちは、幼い子を抱いたり撫でたりあやしたりしてつきあうとき、けつして無口ではなく、返事も何もできない乳飲み子相手にあれやこれやと語りかけ、返事までかわりにして、身も心も傾けます。男たちは「身」なら「身」だけ、「コトバ」なら「口さき」だけ、と二分させやすい無器用さで生きかねない、ようでもあります。現代社会にたやすく埋没させられる傾向は、男のほうに濃いかもしれません。一点集中の「部分品」的労働力発揮は、ひとつのことさえしてあれば済む生活パターンを幼いころから持たされてきた結果でもあるようです。多様な気配りや包括的な集中の必要な場を生きることが少ないから、よけい「二分」させられやすいことになるのでしょうか。

とはいえ、女たちも「部分品」的労働にのめりこませられるうちに、衣食住は、すべて人の手に任せ道具任せのくらしかたになって、子どもとのつきあいかたも、なんとなく冷たいモノ扱いふうの人がふえてきた感じがしてなりません。ひとなかで赤ちゃんとおしゃべりしている若い母親はめつたにみかけられなくなりました。電車でこしかけているときも、向

こう向きにひざにのせて自分はつんとしている。写真をとるときとまちがえているみたいです。ベビーサークルとかベビーカーとか、便利安全手軽かもしれませんが、添いねやおんぶはしない・できない仕掛けが、はたして親と子にとって本当にプラスなのか、両方を活用していくことはできなかったのか、と、肌身でのふれあいの効用を考えますにつけ、惜しいことと思われてなりません。

「守りに似る」というコトバも、昔の人の数多い経験の積み重ねから生まれたもののようです。たしかに声まで似ます。手をかけ目を配り抱いてあやして声かけていく子守り役の力は大きくて重いようです。ヒフ接触ヒフ刺激が、幼い子の〈身心〉の成長発達には大きくひびくことや、脳細胞の連絡網の形成に環境の質が影響しているということは誰しも知っているわけですが、その環境の最大ものは、育て手さんでありました。

手をかけ声かけして養育する人の気だてがその子にうつる、と、昔の人は気づいていたのに、今の人はどうでしょう。か。〈身心〉をいとおしんで育てていくことをする育て手自体が、自分の〈身心〉をいとおしんで生活できる仕組みでしょうか。保育の現場の困難さは、みなさんよく御存じのとおりです。子どもたちの数が減ってきてても、クラスの定員は減らさずに保育者を減らしていく政策がとられてきているのです。

家で幼い子を育てる母親は、孤立の中に追いこまれかねないし、一対一の子育ては、子どもにとっても決してプラスにはなりません。ぎゅう詰めとバラバラ。どれも困る。

からだを〈身心〉として受けとめ活かし合っていこうとすると、日本はなんと貧しくいくなのでしょうか。

### 『ひざまくらは買ってもない』

貧しさは、生活文化の貧寒さぐるみです。「イコイコ体操」というリンパの流れを促進させてつかれやしこりをほぐし安らかに心もなごむように撫でてもらうリラックスの方法があります。この「イコイコ」のひとつに、「ひざまくらでのほぐれ」があるのですが、各地でこの「ひざまくら」を伝えてみますと、「こんなことしてもらったのはじめてだ」という人が大半です。「幼い子やひとをいとおしんでいたわる文化伝統が、もう途切れかけている」のですね。

「ひざまくら」してもらって首から肩・背中そして顔と、ぬくとい手でじんわりほぐしてもらうとき、つくづくと身も心もなごんで幸せで、九州地方では『ひざまくらは買ってもない』と言うのだそうです。ほんとにお金出して得られることではないのですものね。

ところが、こういう「ときほぐれ」のかたを、ドキッとするようなつきあいごとにしか感じられない人もいました。特



定の深い関係↓親子・夫婦・恋人か、もしくは、芸者のような職業でのすることと偏見を持たされてしまっているようです。これは「対人関係面での生きる幅の貧しさだ」と言えるでしょう。医療担当の専門者にお金払って治療してもらうだけではなしに、私たちはお互いに「自分たちの〈身心〉は自分たちで守り育てる」ことができるようになりたいものです。ほんの五分ほど、首から背中をイコイコと撫でてほぐしてもらうだけで、全く別の元氣さになれるのでもありますから……。

私たちは、この世を共に生きるいのちの仲間同士として、「相互にひびき合い伝染し合って似通い合い反発しながらどこかでマネして創り合っている存在」であるようです。ゴワゴワのしこりや疲れや緊張は、うつるのです。しなやかにほんわりとほぐれて必要な集中を保てるような〈身心〉で居ることは、教養の最たることかもしれません。

『ひざまくら』は、いとおしみ合い互いの個性を活かし合って生きる上での教養方法のひとつとして、盛大に活用したい生活文化でありましょう。

## 病むことも、ひとつの生のかたち

じつは、三月にコンクリートの床にひざついて四十分ほども力を入れて働いたことで、あしが冷え、その痛みが続いて

二回ほど強くころんでよけい右ひざをこわしたのです。どうして、ひざをついて力入れたのかというのと、ひどくしこって具合がわるそうにしていた背中さんをほぐそうとしてです。

“こうしてほぐしてもらおうといいから”と伝えるつもりでしたが、本当にほぐれて楽にならないと効用が伝わりませんから、もう少しもう少しといふ夢中になって、その背中さんの疲れをひざにもらってしまったのでもあるようです。こういうことは、ハリ灸のしごとの場合にも多いそうですが、私は、考えてみますと、幼いころから、伝染されたり、他の人とかかわりの中で病むことをくり返してきたようです。そして「病・老・苦・死」と呼ぶように、それは確かに楽しいことではないのですが、病むことが全くマイナスだけだったとは言えませんのです。人生をより深く広く生きる条件に活かせば活かせるようでした。痛むあしのおかげで、自分やひとのことが別して確かにわかってきて、また、ひとつのバネが持てそうです。

人間生活は、目に見えること以上に見えないでいることのほうが大きく在って、その広がりには浅い知恵の及ばないほどでしょう。だから「病むこともただ毛ぎらいしないで生き合える」ような世の中にしていかれたら、と願います。できることをしていきながらです。

( つるまき さちこ・へからだ ) とことばの会

## 食糧の問題を考える

中 里 清 志

### 〈「食糧問題」の授業〉

夏休み中に、NHKテレビの「二一世紀は警告する・飢餓か戦争か」食糧編」をビデオにとっておいた。

小学校六年生には、内容が少し難し過ぎるかとも思ったが、二一世紀にはちやうど働き盛りになる今の子供たちに、是非見せたいと思った。

子供たちの現状を見ると、学校でも、給食の時など食べ物を、嫌いだからといって、残したり、時にはパンに全く手をつけないこともある。学校でも、家庭でも、食べ物、いつでも手に入るものと思っているように見える。

こうした子供たちに、このビデオの内容が、どれだけ自分たちの問題として受け止められるであらうか。

家庭科の時間にビデオを見せることにした。世界一豊かな国アメリカで、栄養過剰で治療を受ける

人の姿から始まる。中には、食欲を抑えるため、胃や腸を手術によって小さくする人もいるという。

続いて、大かんばんで、飢えるアフリカの子供たちの姿。骨と皮だけの手足、あばら骨のうき出た胸、立っても歩行がやっとの子。顔に群らがるハエをはらおうとせず、食べ物もうけつけないなくなり、衰弱しきってしまった子。今や飢餓人口は五億人。二一世紀には、十三億人に達すると言われている。

こうした悲劇は、二〇世紀に入り、先進国が肉食中心の生活を送ってきたからであろうと提起される。穀物を一たん、家畜に食べさせてから消費するようになったために、四人分の穀物を一人で食べることになった。

今、世界の人口は四八億、西暦二〇〇〇年には、六〇億になろうとしている。太陽エネルギーによる食物の生産は、品種改良などの努力があったとしても、限度がある。ある程度、地球上に生きられる「人間の定員」が決まっていると解説されている。

ビデオの後、「おもな国の食料の自給率」一覧を模造紙に書いて、子供たちに提示してみた。日本の自給率が、穀物・野菜・肉など類別でどのくらい考えさせる。野菜類、いも類は九〇パーセント以上であるが、豆類は極端に低いのに驚く。さらに、主食である穀物が三四パーセントと、半分以下であることにびっくりしたようである。

これは、国別に比較してみると、なお明らかに。アメリカを初め、ヨーロッパのイギリス・フランス・西ドイツ・イタリアなど、いずれも、穀物の自給率は、日本と比べはるかに高い(表1)。

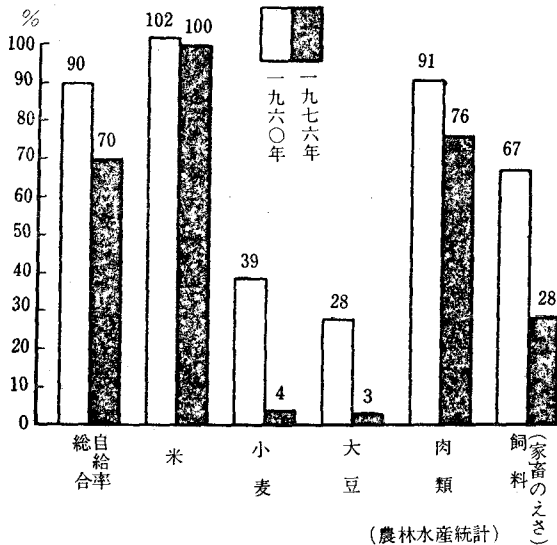
表 1 おもな国の食糧自給率

国 名	こく類	いも類	豆 類	野 菜	肉 類	牛乳製品
合 衆 国	162	109	143	99	97	100
イギリス	77	96	81	79	71	97
フランス	170	105	69	93	92	102
西ドイツ	90	89	17	33	86	103
イタリア	73	99	99	118	76	90
日 本	34	95	9	97	80	89

(1978年)

1982年版「日本国勢図会」

図 1 日本のおもな食料の自給率 (1978年)



○今日は、とてもためになった。私たちは、パンを食べたかったらマーケットへ買いに行けばいい。なのに、アフリカの人たちは、食べられなくて、かわいそうに思った。  
(嶋田亜寿香)

○アメリカの人や、その外食べ物のある所は、一部の人は太り過ぎに困っている。しかし、アフリカの人は飢えて困ってい

次に、「日本のおもな食料の自給率」の変化をグラフで提示してみた。一九六〇年と一九七六年を比べてみる。総合自給率も九〇パーセントから七〇パーセントへ落ちていて、小麦は三九パーセントから、四パーセントへ、大豆も二八パーセントから三パーセントへ、いずれも激減している(図1)。

本当に、このままで、外国からの輸入がストップでもしたら、日本はどうなってしまうのだろうか。

### 〈子供たちの感想〉

○日本は、先進国の中でも、自給率が低いので、もしも食料がなくな

なったりして、食料を食べられない人が、でたら困ると思います。これからも、なるべく残さず食べるようにします。

(深谷 直子)

○もし、日本や外国の食べ物を食べつくしてしまったら、どうしようと考えた。食べ物がなくなると、学校の給食もない。魚もみんなとりつくしたら、米一粒で大げんかをするかもしれない。スーパーマーケットや店もなくなってしまうから、人工の食べ物を食べなければならぬと思う。なるべく、食べ物をふやした方がいいと思う。

(石崎 慶洋)

○世界の食べ物が少なくなるというのは、本当に困ると思った。

(農林水産統計)

ることから、食べ物を粗末に扱ったり、好き嫌いがあつては困ると思う。又、残したりすることもしないようにしたいなと思つた。

こういうビデオをとつて見せてくれたおかげで、こういうことが分かつてよかつたと思つた。

(斎藤 指揮)

○ぼくは、このビデオを見て、アメリカとアフリカの違いが、ものすごくあると思つた。アメリカは、食料も何もかも進んでいて、アフリカは、かんばつで作物が何もできず、飢えて死んでいく子が出て、かわいそうだと思つた。この前、二四時間テレビで見たが、十三歳で体重が十五キロの子がいた。

(柴田 浩之)

○今、地球上に飢えに苦しんでいる人がいるというのに、一方では、栄養を取り過ぎて太つてしまふ人もいる。それは、どうしてこのような差がつくのでしょうか。私はこのことが不思議です。

日本は豊かな国、日本の人たち、世界の人たち……が協力すれば、飢えに苦しんでいる人々をすこしは救ふことができると思ひます。

(高橋美紀子)

○食料が不足して、やせて困っている人たちのことを見て、私は今まで好き嫌いが多かつた。アフリカの人たちはそんな好き嫌いなんてしていたら死んでしまふ。だから、私はこれかなるべく嫌いなものも食べるようにしたい。

(高田美奈子)

○食べ物は大切にしなければいけないと思つた。日本は平和に暮しているけれど、同じ地球上に飢えている人がたくさんいることを知つた。二四時間テレビで募金をやっているけれど、あんなに多くのお金を寄付しても、まだまだ救われる人は、ほんの一部だといふことを知つた。

(中柴 礼子)

○アフリカの子は、栄養失調でやせ細つたり食べ物もろくにのどを通らないほどです。日本も食べ物が少なくなつてきてしまつたのです。米はともかく、小麦・大豆などは、とても少ない。ビデオでは、二一世紀には食べ物なくなると言つていた。

アメリカは、こく類やいも類などが多いんだから、食べ物に困っている人に分けたらよいと思ひます。

(粕谷 恵子)

○穀類は、今私たちの食料ではなく、家畜の飼料になつていて聞いてびっくりした。トウモロコシや大豆はつい数年前までは大事な主食だつたという。でも今は、ほとんど家畜の飼料になつている。人間は、肉を食べるため、ブタを飼ひ、四・五人分がまかなえるほどの穀物を与える。私は、もつたいたいと思つた。家畜に与える分の穀物をなぜ飢えた人たちにあげないのかなど。

ビデオでは、親が子供たちの食料を食いつくしてると言つていたが、本当になつてぜいたくなんだろう。肉を食べたいために、ブタを飼ひ、品種改良していくのを見て、ブタがかわいそうにみえた。二一世紀はどうなるかは、まだわからないけれど、私たちはがんばらなくちゃいけないと思つた。

(渋谷 愛)

○今、アフリカの方では食物が足りない。アメリカや日本は、スーパーマーケットに行けば手に入る物ばかり。これでいいのかなーと私は思う。世界の人みんなが物を食べられなければいけないと思う。アフリカに今いろいろの物を送っているけれども足りないし。でも、これからは地球の食物はどうなるのか？ きつと今のアフリカみたいになるかもしれない。とても、こわいことだ。今、日本は輸入している物が多い。ブタを食べる人も多い。そのブタだつて問題がある。これから、こういう事を考えなければな

らない日がくるかもしれないと思った。

(小川菜つみ)

○私たちは、毎日くいのない食生活を豊かに暮らしています。それなのに、他の国の人たちは、ろくにご飯も食べられないで、やせて死んでしまうのが、とてもかわいそうに思います。

家庭で食べる食事も、学校その他で食べるものも、残したり捨てたりすることを、食べることもできない人たちが、どのように思うかを考えると、私たちは、自分だけが食べられれば、満足をしたいのでしょうか。私は、世界中の人々が食べられるようにならないかなと思います。

(川口抄子)

○世界の食品がもしなくなったら、たいへんだと思う。日本は米とか肉・野菜類・牛乳類は日本でまかなえるが、あとのものは、みんな外国から輸入している。だから、世界の食品がもしなくなったら、日本人は一人もいなくなる。だから、たいへんだ。だから、物を粗末にするのはやめたいと思う。

おもな肉類は、ブタからとっている。だからブタは大切だ。けれど、ブタに病気がはやってきたら、ブタ肉を食べた人間は病気を起こしてしまう。だから、ブタは食べられなくなる。食品がなくなったらたいへんだ。ぼくも、今度から、残さないようにしようと思っている。とてもためになった。

(桜本 宏)

○同じ地球に住んでいても、片方の人とはぶくぶくふとり、もう一方では、飢えて何人もの人々が死んでいるということがわかりました。飢えて苦しんでいる人に比べて、私たちは何十倍もぜいたくをしているように思えます。

このままでいくと、私たちの子孫は、全部死んでしまうかもしれません。私たちの子孫のためにも、やはり話し合って世界の人

々がしあわせに暮らせるようにしてもらいたいです。私たちも見ているだけでなく、身近なことから、いいことをしたいと思っています。

(野上真樹子)

#### 〈授業を終えて〉

子供たちは、それぞれ何かを感じたようであった。身近にある食べ物の大切さを感じたり、自分の生活を反省したり、飢えに苦しむ人たちのことを考えたり、富める国は何をしたらよいのかと思ってみたり。すぐには、解決できない問題が多いが、真剣に考えようとしている姿が感想にも現れていた。

学校全体でも、職員間で、児童が給食時に残したパンの持ち帰りが議論となっていた。残ったパンは、手つかずのものも含めて、ほかの残飯といっしょに、引き取り業者に出され、家畜のエサにされている。今までも、何度か、職員会議で取り上げられてきたが、衛生的にパンを持ち帰ることが疑問視されて、禁止となっていた。

今年も、委員会、学年会、全体での職員会議と、何度か話し合った。禁止の意見は、給食は本来残さず食べるべきであり、教師は残さないように指導に力を入れるべきこと。さらに、残ったパンを持ち帰らずに、机の中にいつまでもあったり、カビてしまったりなどの保健・衛生面のことが気になる、などである。意見はすぐにはまとまらなかったが、結局、「食べ物は少しでも大切にしよう」と言う意見が強く、持ち帰りを実施することになった。

今回の学習を通じて、不十分ではあるが、子供たちに生活と結びつけて、明日の食糧問題、南北の格差の問題をも考えさせるきっかけにはなったように思う。

(埼玉県上尾市立西小学校)

## 理論と実践の間 そのⅡ

### 櫛田 真澄

#### 一、カーテンの洗濯

前任校での話である。建て物は旧式の校舎であったが、学校全体が整美に力を入れていた。生徒たちの手あかで真黒になった教室のカーテンを自分たちの手で洗濯することに決定し、男子四人がその役割を受け持った。大騒ぎをしながら水とたわむれたり、石けん泡のいたずらをしたり、半分遊びのような作業の上で大きなカーテン二枚を洗い終えた。二人で両手でカーテンをかかえながら教室にやってきて、「先生、きれいに洗えたよ。だけどこれ、どこに干したらいいの？」学校内には適当な干し場も、ロープも見当らなかった。私も一瞬とまどったが、とっさに、「そのカーテンぬれたままでいいから、フックをつけてカーテンレールにつるしたらどお？」「ああそうか。先生、さすがー」男の子たちは大喜びをして拍手をしてくれた。そして楽しそうにフックをつけてカーテンを干したのであ

る。翌朝までには、しわも伸びてきれいに乾燥していた。

共働きをしながら、子どもを育てる中で、洗濯乾燥の理論をどのように活用することが自然に身についていたのだ。洗濯物を干すのは、空気中の湿度が低い午前十時頃から二時頃までが適当であると理論としては知りながらも、実生活では休日しか天日では干せない。仕事を終えて洗濯をして、夜風でオムツを乾燥させる。翌朝アロインで殺菌という生活が随分続いたことをなつかしく思い出す。理論と実践の間では、場面に応じて総合的に状況判断を迫られることが多いものである。

#### 二、自立への援助

中学校の二年生位になると個人差はあるけれど、彼らの内面に自立への願いが、漠然とだが生じてくる。

二年 吉沢 裕

四中の技術・家庭科の授業は、全国でもめずらしい男女共通で、週二時間の授業があります。作るものは一年生の時、木材加工とエプロン作りで、二年では伝言板作りとハンバーグ、スパゲッティ・ミートソース、果じゅうかんの調理実習です。

楽しいことは、自分たちで色々なものが作れることです。いやなことは、作っているものがうまくいかなくて、作るのがかたくなってしまう時です。でもいろいろな物を自分で作る楽しさというものがわかりました。特に、調理実習で自分たちが作ったものを食べるのはとても楽しい。ハンバーグとスパゲッティを覚えておけば、もう一人でくらせるような気分になつてしまします。

教育の目的が自立への援助であるといわれることがあるが、精神的な自立、経済的自立、生活的な自立の三本立てがそろったときに、無理なく自立ができるのだと思う。成熟に伴う精神的な発達とは、個人差は大きいながら自然に内から湧き上がるようなかたちでなされてゆく。また、経済的自立は、学校教育や各種学校などの教育によって、一人前の社会人として働くことのできる能力が備わるよう訓練されて社会に送り出されてゆく。しかし、最後の生活的に自立するという視点は、つい最近になって少しづつ認められはじめたのである。以前においては、経済面での自立は男性に、生活面での自立は女性にと男女異なった役割が期待され続けたのであるが、現在では、男女の区別なく経済的な自立も生活的な自立も共に必要であると考えられるようになった。この生活的に自立できる人間を育てることが、男女共学家庭科の中心的ねらいであると言ってよい。

### 三、「バーゲンセールで良い品を選ぶう」

調理実習の場合は、「家族のためのハンバークづくりを成功させよう」(前号掲載参照)という具体的目標を設定し、学校での調理実習の失敗をタネにして、「お母さんやお父さんに絶対にほめてもらえるようにしよう。コツを覚えてやれば、大成功のはずです」と励ます。生徒たちは失敗の体験が具体的であるため、「今度は頑張るぞ」と意欲を燃やす。ほとんどの場合、教師の説明、調理上の諸注意をよく守って、「家族のためのハンバークづくり」を実践してみるので、成功感和満足感を味わい自信がついて、その後の実践へ意欲が盛り上がる。更にレパートリーを増すことにさえ興味を持ち、

意欲的となる。調理関係はこの点が割合スムーズに進行する。

しかし、被服の場合はどうであろうか。長時間をかけてしかも未熟な技術を駆使しての作業着づくりは、「やった」「出来た」という喜びを味わえても、家族に直接喜んでもらえるところまではいかない。技術面で特に優れた生徒がお母さんのために同じパターンでも一枚作ってプレゼントするぐらいのことだろう。生徒たちの全員がもう一枚作ってみるとか、応用発展した作品に熱意を燃やしてくれることはほとんど期待できない。特に、自分で製作するよりもきれいな品物が街々に満ち、安易に手に入る時代には無理な要求である。被服製作の過程とその苦勞を知り、作りながら体験的に学び、出来上がった喜びを味わわせることなのである。本校でも義務教育中に自分の着るものを一枚位製作してみる経験は貴重である点に価値を認めて、作業着の製作をとり上げている。しかし、被服関係の理論と実践の結びつきに関しては、男女共学の家庭科の授業を続ける中で長年苦勞をしてきたことである。そこで、被服製作をする前の段階で、被服に関する理論を、「バーゲンセールで良い品(価値ある品)」を選ぶにはどうしたらよいだろうか」を最終的テーマとしつつ、次にあげる内容を学習している。

#### 〈古ワイシャツの研究〉

- (1) ワイシャツのたたみ方
- (2) 着なくなった理由
- (3) 衣服の古くなった状態
- (4) 品質表示について
- (5) 取り扱い表示について

#### ○(6) 洗剤と洗濯の実習(表1参照)

表1 ワイシャツの洗濯実習  
レポートの形式

ワイシャツの洗濯	
1年組 番氏名	
1. 洗濯実施日	月 日 曜、時間、所要時間、天候、 気温、湿度、水温
2. 準備するもの	ワイシャツ、石けん(洗剤)、ブラシ、アイロン、湯(水)、洗面器、古タオル、ハンガー
3. ワイシャツの品質表示、取り扱い表示	
4. 石けん(洗剤)の表示	名称、種類、成分、使用法、使用上の注意事項など
5. 洗濯の方法と結果	洗濯 乾燥 仕上げ
6. 私の感想	

(7) 織り方、糸、繊維について (拡大鏡による観察)

(8) 燃焼実験

○(9) わたしの衣類調査(表2、3参照)

○(10) 古ワイシャツの分解実習(七月号掲載)

(11) 被服費と日本の衣料事情

(12) 廃棄と再利用のルート

○(13) ワイシャツのリフォーム(七月号掲載)

体育着入れの製作

(14) 既製品の流通ルート

◎(15) パーゲンセールで良い品を選ぶ

(○)印は理論を実践に結びつけるための学習である。◎は更に全体的な総合としての実践のための学習である。

(1) (15)の内容を通して見ると、観察や実験を主とした科学的認識

のための学習と、社会的認識のための学習があることに気付く。科学的な認識や社会的な認識を実践とどのように結びつけるかが家庭科では最も大切なことであろう。実験は理論の裏付けとして、実証としての価値を持っているが、実践に結びつかなければ価値は低い。実験のための実験であったり、理論のための理論では家庭科として意味がないと考える。

衣服に関しては、個人的な好みが大きな比重を占めているので、中学校の家庭科では自分のことが自分で出来るという衣生活面での自立を第一に考えるべきであろう。

・良い商品を選ぶ

・正しく着用し、有効に利用する

・日常的な手入れと管理ができる

この三つが出来れば今日の衣生活では支障がないと考えられる。故に被服学習を二つに分ける必要があるのなら、被服1に当たる内容はこの三点から考えてゆくべきであろう。被服製作はその後で、被服1として純粹に製作だけに集中させる方が、中学生には有効と思うのだがどうであろうか。製作しながら様々な衣生活上の理論をも学習してゆくという方法は一見合理的のようにも思われるが、長時間にわたって同じ作品を扱うことになり、飽きが来る。短時間ずつ、変化に富んだ材料や題材、また視点を変化させた扱い方、即ち観察、実験、調査、実習を折り混ぜながら立体的に学習の目的に迫る方が中学生向けの方法だと思っている。

また衣生活の自立は、生徒の心理面での発達に歩調を合わせなければならないようにある。中学一年生では大体母親の購入してきたものでも満足しているが、早い生徒では二年生頃から、自分の好



表2 <レポート> 私 の 衣 服 調 査 1 年 和 田 学

類 別	品 名	型	枚数	織 維 名 (混合率)	織物・ネットの区別
下 着 類 ワイシャツ類 ブラウス	ラ ン ニ ン グ		4枚	綿 100%	ニ ッ ト
	バ ン シ ャ ツ		7枚	綿 100%	ニ ッ ト
	ワ イ シ ャ ツ	長 袖	3枚	綿 35%, ポリエステル 65%	
		半 袖	3枚	"	
	ポ ロ シ ャ ツ	長 袖	1枚	綿 100%	ニ ッ ト
		"	1枚	綿 50%, ポリエステル 50%	
		半 袖	2枚	"	
	T シ ャ ツ	薄 手	4枚	綿 100%	ニ ッ ト
		厚 手	3枚	"	
		"	1枚	綿 50%, ポリエステル 50%	
ズ ボ ン 類	ス ポ ー ツ シ ャ ツ		1枚	綿 100%	
	学 生 ズ ボ ン		1枚	毛 50%, ポリエステル 50%	ニ ッ ト
	ジ ー パ ン	長ズボン	3枚	綿 100%	
		半ズボン	3枚	"	
上 着 類	学 生 服		2枚	毛 50%, ポリエステル 50%	
	ブ レ ザ ー		1枚	?	
中 着 類	セ ー タ ー		3枚	毛 80%, ナイロン 20%	
夜 着 類	パ ジ ャ マ	夏 向 き	1枚	綿 100%	
	(上 下)	冬 向 き	1枚	"	
スポーツ着類	体 育 着		3枚	綿 70%, アクリル 30%	ニ ッ ト
	短 パ ン		1枚	綿 65%, レーヨン 35%	
			1枚	ポリエステル 65%, レーヨン 35%	
			2枚	?	
	ト レ シ ャ ツ		2枚	ポリエステル 100%	ニ ッ ト
	ト レ パ ン		3枚	"	
	ウインド・ブレーカー		1枚	?	
	付 属 品		5足	?	ニ ッ ト

1. この調査でわかったこと

- ・衣服の種類によって使われている繊維やその混合率がずいぶん違う。
- ・繊維名を調べてみると、下着類は汗をよく吸い取るように綿 100%のものが多く繊維が衣服の役目によく合っている。

2. 感 想

- ・思ったよりたくさんの衣服があった。
- ・せっかく買ったのに忘れて着ていないものがいくつかあった。自分に任されているものは活用しようと思った。

みの主張が見られるようになる。  
最初は母親同伴で選ぶ練習のよう  
なことをしながら、次第に自分で  
選ぶことを主張し、高校生では大  
部分が自分で選ぶようである。故  
に、被服学習を一年から二年にか  
けて学習することは、時期的に適  
当と考える。パーゲンセールで価  
値ある品を選ぶとき考える条件を  
生徒たちは次のようにまとめたの  
で記してみた。

- ① 布の織り方が複雑かどうか
- ② 糸の細さや艶も値段に関係がある
- ③ 糸の使い方(ざっくり使ってあるか密度はどうか)
- ④ 繊維の種類によっても値段がちがう
- ⑤ 縫い方のていねいさをみる  
(縫い目ははずれていないか、糸が切れていないか)
- ⑥ ロックミシンで縫ってあるか  
折り伏せ縫いかでも値段がちがう

表3 &lt;レポート&gt; 私の衣服調査 1年 瀧本 順子

類 別	品 名	型	枚 数	織 維 名 (混合率)	ニット○印
下 着 類	ス リ ッ プ		7枚	(上)綿 100% (下)アセテート	○
	パ ン ツ		8枚	綿 100%	○
ワイシャツ ブラウス類	ワ イ シ ャ ツ	長袖(学校用)	3枚	綿 35%, ポリエステル 65%	
		半袖(学校用)	2枚	"	
	T シ ャ ツ	"	2枚	綿 100%	○
	タオル地みたいの	"	1枚	綿 40%, ポリエステル 60%	
	ポ ロ シ ャ ツ	"	1枚	綿 100%	
	ラ ン ニ ン グ	袖 無 し	1枚	"	○
	ボディーシャツ	長 袖	4枚	綿 50%, ポリエステル 50%	○
スカート ズボン類	スカート (学生服)		冬用 3枚 夏用 2枚		
	ス カ ー ト	セミタイト	1枚	綿 100%	
		まきスカート	1枚	ポリエステル 65%, ナイロン 35%	
		ジ ー ン ズ	2枚	綿 100%	
	ズ ボ ン	ジ ー ン ズ	1枚	"	
	キュロットスカート	ジ ー ン ズ	2枚	"	
上 衣 類	学 生 服	長 袖	1~2枚	毛 50%, ポリエステル 50%	
	プ レ ザ ー	"	?	?	
	ウインドブレイカー	"	2枚	ナイロン 100%	
中 着 類	ト レ ー ナ ー	長 袖	5枚 (姉と共同)	綿 100%	
夜 着 類	ね ま き	長 袖	2枚	綿 100%	
		半 袖	1枚	"	
コ ー ト 類	レ イ ン コ ー ト	学 校 用	1枚	ナイロン 100%	
		他 の	1枚	"	
スポーツ着類	体 育 着	トレシャツ	1枚	ポリエステル 100%	○
		トレパン	1枚	"	○
		体育着(上)	2枚	綿 70%, アクリル 30%	○
		ブルマー	2枚	ナイロン 100%	
付 属 品	く つ 下	ソックス	5そく	?	○
		ハイソックス	4そく	?	○
	手 袋		2そく	毛 100%	○
他					

### 1. わかったこと

- ・ふだん着ているものが、こんなに数が多い。
- ・綿、ポリエステル、ナイロンなどで作られているものが多かった。
- ・下着や夏に着るものはだいたい綿100%であった。
- ・衣服の種類によって、繊維の混合率が違う。

## 2. 感想

私がふだん着ている衣服は、友達よりも数が少ないと思い込んでいたのに、調べてみると意外にたくさんあった。

- ⑦ 模様の出し方や色の使い方でも値段はちがう
- ⑧ デザインが凝っているとな値段がちがう
- ⑨ 品質表示や取り扱い表示がしっかりした布でしっかり付いているか（業者の製品に対する誠意が現れている）
- ⑩ ボタンがしっかりと付けられているか。良いボタンがついているか
- ⑪ 手入れの方法は着方に合っているか
- ⑫ 正規の値段を知っているかわかりやすい
- ⑬ 自分の衣類の数

表4 衣服調査でわかったこと  
(生徒のまとめ)

1. 下着には綿 100%が多い
2. 下着はほとんどがニットである(伸縮が必要)
3. 運動着にはニットが多い(伸縮が必要)
4. 夏物には綿や麻が多い
5. ポリエステルは他の繊維と混合して多く使われている
6. セーターにはウール(毛)が使われている
7. セーターにはアクリルやナイロンが毛に似せて使われている
8. ポリエステルと綿の組み合わせが多い
9. ポリエステル 100%のものはつるつとした手ざわりである(ナイロンも)
10. 水着はナイロン100%かポリエステル100%だった
11. 夏物は薄地で、冬物は厚地でできている
12. 化学繊維が多く使われていた
13. ナイトウェアにはニットが多い
14. 上衣類はしわにならないように化学繊維が混ぜられていた
15. 綿は汗をかきやすいところに使われている
16. 肌に直接ふれるところには綿が使われている
17. 袖口など、すり切れやすい部分や伸縮が必要などところにはポリエステルが使われていた
18. レインコートがナイロン 100%なのは水をはじくからである
19. 品質表示がないものや消えてしまったものが多くあった(取り扱い表示も同じ)

や種類から、本当に必要なものかを考える  
⑭シーズンの終わりには値段が大幅に下がる

以上、生徒の発言をまとめてみたが、一人ではなかなか気が付かない点も、多くの意見を出し合う中で「ああそうだ」という感じで学習が進む。学習の最終段階であるため、友人の良い視点やまとも方に拍手が出たり、「すごい」という声まで混りながらの楽しい学習時間であった。

#### 四、実践へのつなぎを確実に

「バーゲンセールで良い品を選ぼう」というように、テーマの設定を中学生向きにすることは、学習意欲を盛り上げるのに大切な要素

のようだ。直接的で具体的なテーマであること、またもしもその学習をしなかったならば、「安物買いの銭(ぜに)失い」になりかねない危険性があるという、多少の危機感や切実感を与えておくのも効果的である。自分の稼ぎで自由に買いたいものが出来るのはずっと後のことで、少ない小遣いの中で最大限のオシャレがしたい年齢であるため、このテーマは彼らに受けたのだと思われる。Tシャツを選ぶにもジーンズを選ぶにも、彼らの好みや自己主張が現れるのだという点を心に留めておきたい。

次に、家庭科の学習は、調査、観察、実験、実習とバラエティに富んだ学習形態をとりながら学習を進めることができる。そして、生徒たちの興味や関心が盛り上がった時に実践への意欲が湧き、くり返しの練習によってその学習は身につき、生きる力となる。しかし学校での学習時間には限度があるため、実践への意欲を高めたり、期待感を盛り上げることまで、その後のくり返しの練習は、個人の家庭生活に任されることになる。従って、学校での学習事項(知識や理解や技術)を実践活動にまで持ってゆけるような、移行を円滑にする学習が特に強調されなければならないと思う。即ち、実践への不安や恐れをとり除いて、勇気を与える学習、つなぎのための学習が丁寧になされる必要があると思う。家庭科の学習が生活的な自立をめざすのなら、この視点をもっと吟味され研究されなければならないであろう。

(武蔵野市立第四中学校)

## 「料理」「裁縫」を越えることは 難しくない

福島 澄香

「婦人差別撤廃条約」の批准に向け、教育の分野でも「男女の差別」「男女の役割分担の固定化」を排除するために「家庭科」を男女共修にするかどうかをめぐって、「臨時教育審議会(教育改革?)」の諸問題と共に「日本の生態系を変える」「21世紀に生きる子女の人間形成上ゆけるがせにできない問題」から「ボタンつけなんか学校で教えてもらわなくても家庭で教えるわよネエ」まで「騒然たる論議」が起こっている。文部省の「家庭科教育検討会議」はすでに「家庭一般」を男女必修にするか選択にするかについて「家庭科の男女共修をすすめる会」世話人の和田典子氏と全国高等学校校長協会家庭部会前理事・佐田彊氏を呼んで意見を聞き、論議を重ねていると聞く。

今、神奈川県では

すでに本誌で紹介された「かながわ女性プラン」によって県の具体的な施策をつくるために「学校における男女平等教育」、「家庭科

男女共修推進」の二つの研究会が設置されている。両研究会とも来春には報告書を出し、それによって神奈川県教育委員会は、89年春より施策を実施することになっている。

「かながわ女性プラン」作りに参加した各層の県民女性は、「女性プラン」の実施のために「女性会議」を作り、「婦人総合センター」に事務局を置いて、県下全域で活躍しているが、「女性プラン」の目玉の一つである中学校・高校の家庭科の男女共修がどんな履修形態で、どんな内容で実現するのか、熱い思いで注目している。

また、「かながわ女性プラン」とは別に、80年から「高等教育問題協議会」(高問協)では、高等学校教育問題について、入試、生徒指導とともに教育課程の中で、家庭科の位置づけについて三つのプランを提起している。

家庭科教師は(家庭科の教科部会の家庭科男女共修検討委員会が'83年度に行ったアンケートによると)、「家庭科の共修問題」について、実施推進すべき・やれるものならやりたいを合わせると神奈川県で実施することに七四％が賛成している。

同アンケートによれば他教科の教師も六〇％賛成している。また高教組の高等学校教育総合問題研究会、後期中等教育問題検討委員会、婦人部、定時制教育研究会などでも男女共修が支持されている。以上、まだ流動的な状況だが、大まかに問題点を紹介しながら、私の試行錯誤のささやかな「家庭一般」男女共修の実践から、失礼をかえりみず、大胆に私見をつけレポートしてみたいと思う。

まず、今年の三月、第一次報告書の出ている「神奈川県高等学校総合教育問題協議会」の「高等学校教育問題について」の中で、家庭科がどう位置づけられているか聞いてほしい。

この協議会は、県教育委員会教育長から具体的な行政施策に資するために設置されたもので、「入学者選択制度」などは、この第一次報告書の主張通り89年の春から変えられることになっている。「教育課程」については、「個性を伸ばすための教育課程の編成と単位制の積極的な運用」を主張し、選択履修幅を拡大した教育課程の編成例として、三つあげている。この三つの教育課程のうち、一つだけ二年次で家庭一般二単位を男女共修、三年次には女子のみ二単位家庭一般をやるようになっており、他の二例は、女子のみ四単位家庭一般をやることになっており、従来と変わらず、男子の体育と背中合わせになって、男子が家庭一般を選択する余地もない。一例でも男女共修例を作ったことは一応評価できるが、「家庭一般」の内容を男女共修と女子のみ必修にどう分けるのか、また分ける根拠は何なのか、男女共修にした理由と共に全く説明が書かれていない。

一方、「かながわ女性プラン」に関連して、同じ教育委員会に行政施策するために設置されている二つの研究会は、いずれも中間まとめをしている段階であるが、「男女平等教育研究会」の方は、「高校『家庭一般』は①女子のみ必修で男子の選択しやすい条件を整える。②家庭科は家族・育児などを中心とした理論的要素の強い一つの必修科目と技術的要素の強い多くの選択科目を設け、個性的な選択ができるようにする」という。また「家庭科男女共修推進研究会」は男女共修二単位、女子のみ二単位必修で、内容を検討しようとしている。

「女性プラン」の、「日本国憲法」と「婦人差別撤廃条約」を基本理念として「男女で家庭責任を負う」視点から、中学の「技術・家庭」、高校の「家庭一般」の男女共修（必修）を基本方策とする主

旨は、一体どこへ置きさられたのだろうか。これが折衷的な神奈川方式などとは思いたくない。

また、「かながわ女性プラン」の第五章福祉、健康、家庭の基本方策で、中学・高校の「技術・家庭」「家庭一般」の教科内容として性、結婚、保育など人間の問題や公害、自然保護、生活環境等の問題が十分取り上げられるよう要請している。

このような県民女性が熱い思いで作った「女性プラン」の理念と視点にたつて、家庭科男女共修の教育施策を是非しっかりと構築してほしいものである。

#### 男女共修は無理なのか

「家庭科の男女共修推進研究会」のメンバーから個人的に聞いたところによると、男女共修二単位、女子のみ二単位となったのは、①中学校で家庭科の男女共修が多くの場合、一年生で食物一領域しか実施されておらず、男女では二年間の学力差があるから、男女一緒に四単位もやるのは無理である。

②男女共修となれば、新しい内容を盛り込まなければならず、家庭科教師の「力量？」から急には実施できない、というのが主な理由だという。

#### 家庭科は男女がいて面白い

小中高一貫した家庭科の男女共修を実施するのは、「かながわ女性プラン」でも指摘しているように当然のこと。そうならば高校の男女共修が今よりスムーズに行くことは確かである。

しかし、一領域しか一緒にやっていない今の中学の現状でも、高校の男女共修をやらない理由にはならないと思う。われわれが家庭で子どもを同じように育てたつもりでも、個性豊かに兄弟姉妹は違

った能力を発揮する。それを能力差、学力差といえはいえないこと  
もない。

生徒たちの間で、小中の先生から学んだことがよく話題になる。  
先生方が色々苦勞して授業をされても、生徒たちの受けとり方、学  
び方は様々だから、女生徒間でも、個人的な能力差があるのが自然  
である。そしてなによりも男女生徒は、この複雑な現代を十数年間  
も、けなげに生活し、生き抜いて来た人たちである。多様な生活経  
験から彼ら自身が獲得した様々な生活力を持っている。

つい最近、私は授業で「現代人の野菜不足」の問題を取りあげ  
た。彼らのやった食事調査で、彼らの野菜不足は極めて顕著だっ  
た。「野菜サラダをよく食べるから安心してたけど……こんなに不  
足してるのか——」

「便秘するのも無理ないネ」「おれ、三日に一ペンだもんナ」「直腸  
ガンになるわよ」「おれ下痢するんだけどナーこれどういうことだ」  
「きたないナ」「おい緑黄色野菜ってどんな野菜だ」

成分表で調べて、「人參か、葉っぱかア。トマトやキュウリはだ  
め。うまくないナ」「まずくても身体にいいんだから食べなきゃ  
あ」「そんなことないわよ。食事は文化なんだから、おいしくなく  
てはネ」と私。

かくして各グループごとに、それぞれテーマを作って野菜料理に  
取り組むことになった。

あるグループは、メンバーの一人が、「人參は絶対嫌い」という  
ので、なんとか彼においしく人參を食べさせる方法をテーマにして  
いる。「無理しないでほかの野菜から取ればいいのに」「いいの。や

るんだから……」と口々に言う。

色々工夫して作っていたが、人參をたづぷりすって、玉ねぎや青  
味野菜を入れた「バターライス」が人參ゼライの彼に気に入って、  
「おれ、家でも作って食べるよ」に、他のメンバーは凱歌をあげた。  
なかなかおいしい人參入りのバターライスで、私も作り方を教え  
てもらった。

また他のグループのテーブルに行くと、おいしそうなクリームシ  
チューができている。あまりクリーミーに白く仕上がっているの  
で「インスタント使ったの？」と聞いたら、

「そんなことしませんよ」

「ヘー、誰が作ったの」

「彼ですよ」

そばで鼻をヒクヒクさせた背の高いA君がうれしそうに私を見お  
ろしていた。彼はアルバイト先の軽食を出す喫茶店のマスターから  
ホワイトソースの作り方を学んでいた。

女の子はこれで生野菜のサラダだけでなく、化学調味料やインス  
タントを使わない「おいしいクリームシチューで沢山野菜が食べら  
れます」と喜ぶ。家庭科は、すべて女の子がリードするとはかぎら  
ない。学習の機会の差があっても、個人的に獲得した能力の大きな  
差があっても家庭科の授業は、女だけの授業より男女の多様な生活  
力をもった子供たちがいた方がずうっと面白い。

家庭科は違った能力をもった男女が相互に協力し影響しあって能  
力を伸ばしあうことが出来る協業労働と体験学習の教科だと思ふ。

「料理」「裁縫」を越える「力量」とは

今年度の夏季フォーラムで市民から、新しい家庭科は「料理」「裁

縫」イメージを越えなければ、という指摘があった。しかし、「家庭一般」は普通教科で、専門・職業教科とは違い、料理学校や洋裁学校の入門編であってはならない。「料理」「裁縫」を越えるといつても、それを授業でやらないのではない。私の「現代人の野菜不足」の授業は、「一日に一人必要な淡色・緑黄色野菜、芋、海藻など六〇〇〜八〇〇gをどうおいしく食べるか」「生野菜サラダでどれだけの種類と量がとれるか」など、「料理」だけでなく、「どこでどうして取れた野菜類か」。近くの青物卸売市場に調べに行き、生産や流通の問題点を聞いて来るグループもある。どうやって野菜を作るのかまた農薬の使用状況を調べに近くの農家に行くグループもある。こうして「料理」を越え、彼らは自発的に家庭から社会への広がりをもって現代の生活問題を広く深く学んでいく。生徒と共に私も学ぶことが多い。

学習が広がり深まると共に、彼らの意欲もふくらみ、「相高生に野菜をおいしく食べる輪を広げよう」など、カッコいいことを言い出す。

家庭科教師の「力量？」は社会への広がりを持った新しい視点で学習を組織し、生徒と学びあう中で身につくものである。長谷川孝さんの口ぐせではないが、教師が生徒に「教えよう」と肩をはるから苦しく難くなるのだ。私たち教師は少なくとも年齢的には生徒より生活者としての経験は長いから、今使っている教材で、生徒の生活の状況に即して、現代社会でのくらしの問題という視点で父母や地域社会で働く大人たちの助けを得ながら、「学ぶ」授業を組織していくことは、生徒だけでなく教師自身も大変勉強になり、思いがけないくらしの矛盾や問題に気づかされる。私たちの周

りには消費者センターだけでなく、町の豆腐やさんもいれば、おそばやさんもある。農民もいれば、ほかほか弁当を作るおばさんもある。学者研究者もいれば産婦人科医もいる。

かくして「料理」や「裁縫」を越えることはそんなに難しいことではないように思う。

家庭科は理論と実践をトータルに学ぶもの

家庭科は、家庭（一人でも）で自らを解放して生きる日常的な暮らしや文化を対象領域に、経済最優先の現代社会で人間らしく生きることを大切にしている具体的な課題に答えていくとなれば、男女が学ぶのは当然である。

家族関係を通して共に生きる、共に支えあう人間関係を学ぶとなれば、男女の協業はこれまた当然である。

緑黄色野菜を食べる必要を、現代的視点から理論的に学んでも、テストはできるが、嫌いなものは食べないのではないか。

人参料理に挑戦した生徒のグループのように、自分にあった食べる手段を手にするところまでやらなければ、自らの生活、大げさな言えば生き方は変わらないのではないか。教えを乞えば、いつでも、だれでも協力してくれる。

したがって家庭科が手と体と頭を一緒に使って身近な生活にかかわって学ぶ教科だからこそ、理論と実践とが遊離している現代の高校教育の中にある普通教科、共通教科（必修）として男女にぜひ学ばせたい教科なのである。

（神奈川県立相原高等学校）

## 《投 稿》

# 家族の授業に取り組んで

## 東京都立農林高等学校家政科

農林高校における男女共修  
「家庭一般」

東京都立農林高校には園芸科・食品製造科・林業科・農業土木科・家政科（二クラス）の五つの専門学科がある。クラス編成は、この五学科を均等に配置したミックスで、これがHR活動の単位となる。普通教科はミックスHRで行い、専門の授業のときは、六クラスを解体し、学科ごとになる。男女共修「家庭一般」（二学年次、二単位履修）は、一年間にわたる研究討議の末、四八年度教育課程改訂の際、決定された。四九年度から実施し、すでに十一年目を迎えた、本校では、ごくあたりまえの普通教科である。新任の若い男子教員が、「男子も家庭科をやるんですね!」と驚いたように言うときなど、そういえば、男女で一緒に家庭科を勉強する高校生は、この日本全国でそう多くないのだと、改めて考えさせられる。

理想を実現するには多くの苦勞があった。それまで女子のみ必修とされてきた「家庭一般」が、男子にすなおに受け入れられるだろうか。また、二単位という限られた時間内で、何を優先し、何を割愛するかなど多くの不安と問題点があった。本校では、男女共修決定と同時に、「家庭一般検討委員会」が作られた。授業内容についても一年間研究討議し、職員会議で決定した。このように、全職員の責任において「家庭一般」の指導および授業内容が自主編成されていったのである。

### 家族の授業の困難性と重要性

今、生徒のおかれている家族状況はきわめて深刻である。今日の生徒をゆがめている最大の原因は家族にあるといっても過言ではない。生徒の非行、怠学、その他の問題行動の裏には、必ずといってよいほど家族の問題が隠されているのである。

民法が改正されてからわずかに三十数年、家族に関する価値観の多様化、そして高度成長による家庭生活の急激な変化、地域の破壊等によって現代の日本の家族は精神的混乱状況におとし入れられているのではないだろうか。昭和五七、五八、五九年と続けられた経済企画庁の調査でも、様々な社会指標の中で群をぬいて悪く、毎年悪化しているのが家族の分野である。

このような状況の中で家族の授業を行うことは、ある時は生徒の心の傷口をつつかねばならぬ辛さがある。又、家族問題への無関心に立ちすくむこともある。教師も自らの生き方、人生観をさらし、力をふりしぼって生徒をゆさぶる迫力をもたなければならない。し



かし又、このような状況だからこそ、未来に生きる高校生たちに家族というものの重要性を認識させたいと思う。高校生にとって幸福な家庭生活を築くための準備はもうすでに始まっているのである。

しかし、大多数の生徒は自分の家族について深く考えようとしてない。自分の家族はふつうだとし、幸福であれ、不幸であれ、じっとその中に浸っている。そして生徒の描く未来の家庭像（かわいなお嫁さんになって、外では働かず、夫や子どものために尽す）は、あまりにも画一的で現実離れしたものである。

現実の家族は共働きが年々増加しており、離婚率が上昇し、家庭崩壊があとをたない。生徒の中には、現実の家族によって、傷つきやめられた被害者でありながら、現実の家族問題から目をそらしている者も少なくない。それを客観的にとらえ克服してゆくすべを知らずにいるのである。家族についての作文を書かせても、自分の両親、兄弟について生き生きと述べるものがほとんどない。表現力の不足以前の問題として、家族とのかかわりの希薄さが背景にあるのではないかと思える。

一般に現代の生徒は、人とかかわり方を知らないし訓練されていない。作文を読むと、「うちはテレビの話かしらない」とか、「夕食がすんだら別々になってすぐ寝てしまおう」とか、「母親のつくったものは食べない」「一人の時間が多くさみしいけど、ただそれだけのこと」というように、会話やふれ合いの乏しい家族が多い。

今日の高校生のおかれている家族状況と、彼らの実態を見ると、今彼らに、家族とは何かを教えることは急務だと思う。実際、授業をすすめるうちに、「はじめはなぜ家族の勉強をするのかわからなかったが、授業をうけているうちにわかってきた」「こんなに大切

なことだとは気がつかなかった」「自分の家族はどこに問題があるのかな、と考えはじめた」「自分の将来の家族について想像してみた」というように、家族の問題に目をむけはじめる生徒もでてくる。

人間が生きてゆく上で、最も身近な存在である家族というものに、生き生きとかかわろうとする意欲と能力を彼らの中に積極的に育てたいと思う。と同時に、自己の家族について、社会的、歴史的視点から科学的にとらえ直すことにより、偏見や既成の概念から解放されて、真に自由に、正しい家族観を追求する能力を育てたい。これらの能力を身につけることによって、生徒は、今自分が生きている家族のもつ、様々な矛盾や問題点を克服しつつ、未来をきりひらいてゆくことができるようになるのではないだろうか。

#### 家族の授業実践例

はじめに  
なぜ家族の学習をするのか――

なぜ男女共修で家庭一般をするかについては特にふれなかった。共修をはじめた頃は、日本国憲法二四条を示すなどして、男女の平等、家庭生活への責任は両性にあることなど力を入れて説明していたが、共修をはじめて十一年目ともなると、生徒の間に、男女共修の家庭科への違和感はない。むしろ、なぜ家庭科を学習するのかという点を話すことが、すなわちなぜ男女で学ぶかの答えになると考えている。

はじめに一年間の学習内容と、一学期は家族の授業を行うが、なぜ家族について学ぶのかを話す。

「私たちの家庭には、各々固有の悩み、問題点がある。例えば家が狭いとか……。親子間がうまくいってないと

課題  
「私の家  
族」

か。しかしそれらをよく調べてみると、一九八〇年代の日本という社会の中の家族に共通してみられる現象である場合も多い。君たちは高校生なのだから、自分の家族を外側から客観的にみることができはらず。これから現代の日本という社会にある、家族に特有の現象、そして問題点は何かを統計や歴史の事実、現実の事例などから調べてみよう。そしてそれらを解決してゆく道を探ってみよう」。

ともすれば抽象的になりやすい家族の授業を、生徒にとって身近で具体的な興味あるものにするには、教師の豊富な体験、本や新聞、雑誌等の引用、適切な視聴覚教材などが必要である。とくに家族の授業では、教師が自らの家族観、生き方を生徒の前にさらすとき、生徒は深い共感あるいは強い反発をよびさまされ、興味を示してくるように思う。教師の価値観を一方的に押しつけることはつしむべきであるが、誠意をもって教師が自らについて語る時、生徒は心をひらき、自らの家族をすなおに見つめはじめのではないだろうか。ある生徒の言葉「先生って、自分の家のこと話っちゃうからプライバシーがないね。でもおもしろい」。

課題「私の家族」原稿用紙三枚以上（宿題）

授業をはじめてすぐに書かせたこともあって、内容は表面的に両親、兄弟を紹介するものが多く、本質的な親子の葛藤、家族問題にはふれていない。今年受けもった

1 家族の機能  
・経済生活の土台  
・休息・愛情  
・夫婦の愛情  
・老人・病弱者の保護  
・種族の保存  
・子どもの養育  
・人格形成  
・文化の継承

クラスには家族についての作文はとても書かせられないという教師もある。高校生の段階で、今、自分がそれによってゆがめられ苦しみを与えられている自分の家族についてどこまで客観的に見つめさせることができるのか……。家族については家族の授業の最後かあるいは一年間の授業のおわりに書かせた方がよいのかもしれない。

「人はなぜ結婚し、家族をつくるのだろうか？」班討議させた。（十分くらい）

子どもがかわいいから（生徒が発表したごく平凡な心の安らぎ 小さなことも黒板に書く）  
年とったとき困る

「それではこういうあたりまえのことが現代の日本の家族ではできているの？」と問い直す。「親が子をかわいがって育てるのはあたりまえ、皆誰にでもできることと知っているでしよう。ではなぜ若い夫婦が子どもを殺したり、子捨て、家庭内暴力などがおこってくるのだろう？ 私たちは、あたりまえのことができないかわさを知ろう。そしてなぜ今の日本の家族であたりまえのことができないのか考えてみよう」……ここでいくつか家族に関する新聞記事等を例として話す。生徒は家族の機能を果たすことはそうたやすくはできないんだな……という顔をする。

「では、現代の家族が果たすべき機能をまとめて板書するけど、一つ一つについてそれが本当にできているかど

うか考えながらノートに書きなさい」

ここでもういちど「一九八〇年代の日本という社会における家族に、共通して特徴的にみられる現象をみつめ、その上で、現代の家族のかかえる問題点をどうのりこえてゆくか考えてみよう」と念をおす。

資本主義経済に入る前の日本の家族は大多数（明治初期で人口の約八割）が農民であり、自給自足の生活を営んでいたこと。そのため、前の時間に学習したような家族の機能を果たすため、現代とは比較にならぬほど多様な家事、雑事が家庭生活を成立させるための重要な機能として存在したことを、衣、食、住、教育、その他について、具体的に明治時代、昭和初期くらいまでどうしていたのかを話す。

ほんの五十年、百年前の家庭生活が現代の家庭生活とはまるで異なるものであったことは、生徒には意外なことからしく「エーツ！」という顔をしている。自分の生きている時代は変化しつつあり、自分がその流れの中にあるという視点をもたせたいと思う。その上で現代の日本の社会における家族の機能の縮小化を、その中で生活する家族は、どう変化してきたのか、又今後どう変化してゆくのかについて考えさせようと思った。

「昔の人は家族を離れて生きることがほとんど不可能だった。とくに女子どもは。家族を捨てることは生活の基盤を失うことであった。家族は、多くの機能を果たすことによって、強固なつながりをもっていたといえる。し

(2) 家族構成の变化  
(ア) 核家族の増加とその原因  
(a) 産業構造の変化  
(b) 人口の都市集中

かし、現代では家族をつないでいるのは精神的な機能となり、家庭生活を支える家事という面は縮小する一方である。それはある面では、家族をもろく崩壊させやすいおとし穴にもなっているのかも知れない。

家族にとってその機能が縮小化してゆくことのもつ意味を、家族関係、子どもの教育、老人問題などからとらえ直す必要がある。今後ますます家族の機能は精神的なものへと変化してゆくであろうが、その中で家族の結びつきをどのように強めてゆくのか考える必要がある」と問題提起して終えた。

・反省 かつての家庭生活と現代の家庭生活の違いを話だけでなく、具体的な現物で見せる（写真、本、絵、道具など）か、小説など引用すれば、もっと授業に深みがでたと思う。又家族における家事労働のもつ意味をもっと深めたかった。

核家族・大家族という言葉の意味を説明。

次に、教科書の図表を読ませ、一九二〇年における核家族世帯は全世帯の54・0％であったのが、一九七五年には63・9％と約10％増加していることを示す。

「なぜ現代の日本の社会では、核家族がふえ、大家族が減少したのか、全員に発表してもらいます」

はじめは

「今の女の人はがまんがない」「夫婦二人きりでくらしたいから」「大家族だと気を使うから」「年寄りにきがねするから」というような答ばかりだった。それらに対

民法の改正

し「昔の人は年寄りにきがねしなかったのかな?」「昔の人は夫婦二人きりになりたくなかったのかな?」と問い直すと、生徒は困ったような顔をしている。

そのうち、「昔は今とちがって老人の社会保障なんてなかったんじゃない」となり、最後に、「昔は農業で家を継いだけど、今は都会へ出てきて商業や工業につくから」と答える生徒がでてきた。

全員に指すと、あの人は何と答えるかと興味をもち、又一つ一つに応えると、一生けんめい考えながら答えるようになった。結論がでるまで一時間かかったが、はじめから結論を言うより多くの生徒が理解したのではないが。

(4) 家族員の減少  
・婦人の社会進出、他  
3 家族関係  
(1) 夫婦関係  
(2) 親子関係  
(3) 近隣関係  
(4) 近隣関係

教科書の図から一九六〇年を境に急激に減少していることを知らせる。その上で生徒に理由を考えさせ発表させた後、教師がまとめた。

日本とアメリカの夫婦関係の違いを「結婚経過年数による幸福度の変化」(資料集)より指摘する。

日本の夫婦関係は、夫婦の横のつながりよりも母と子どものつながりが強くなる傾向がある。夫婦関係こそ、よい家族関係の基本であることを様々な事件を例にとつて話した。金属バット殺人事件、エリート高校生祖母殺し、その他の事件についてその家族関係はどうだったのかを、知り得た範囲で話す。

この延長として、どういう結婚をするかが、夫婦関係、親子関係の基本になることを強調し、結婚への準備

課題  
「新聞記事の事件について話し合う」

段階にある青年期の恋愛について話をした。  
青年期の恋愛には大きな危険もあることを知っておく必要がある。お説教にならぬよう自己の体験、具体的事例をひきながら生徒に問題提起。

最後にしめくくりとして、結婚の幸福度に高い関連性を示すのは、「両親の幸福な結婚生活、子ども時代の幸福な家庭生活」であること。しかし私たちが家族について学ぶのは、不幸な家庭に育ったり、または家族に問題があったとしても、その原因を客観的にみつめることによってそれを克服し、将来幸福な家庭を築く糧にするためであることをおぼえておく。

(2)、(3)、(4)は時間がなく省略。

(2)の親子関係を中心に話し、そこから夫婦の問題へとすすんだこともあるが、今回は夫婦関係に的を絞った。

家族問題に関係する事件を、新聞記事から一人三枚切りぬいて来る。それを班ごとにまとめ、それぞれについて、その事件をおこしたその家庭に特有の問題と、その事件の背景と考えられる社会状況について話し合いノートにまとめるよう指示。

しかし、この課題はほとんどできなかった。ぼんやりしている生徒もいるし、班内で話し合っているようにみえても事件の概略を書いているだけであったり、各班をまわって進行状況をみたり、助言したりしたが、生徒は何を話し合うのかよくわかっていなかった。一つの事例について、くわしく説明すると納得するのだが……すべ

てには手がまわらず。

たとえば「子どもを三日間看病した母親がミルクを飲まない赤ちゃんを発作的になぐり殺した」という記事について、家庭に特有な問題としては、「子どもの病気に ついてその父親はどんな態度をとったのだろうか？ 母親の相談にのつていたのだろうか？」とヒントを与えたり、社会的背景については、「この家には相談できるおばあちゃんとか、近所の友達とかいかなかったのだろうか？ 核家族化からきた悲劇ともいえないだろうか」とアドバイスしてまわるのだが、生徒はやる気がおこらないし、わからないといった様子で困った。

この授業がうまくいかなかった原因として考えられることは、

①適切な記事ばかりではなかったこと、又記事によっては簡単な事実の報道のみで原因などつかみにくいものもあったこと。これらについて教師側であらかじめチェックして除いておく必要があった。

②分析のしかたについて、具体的な説明をしなかったこと。すぐにはじめさせたのがまずかった。

③生徒が、このような家族問題に興味や関心をもちにくく、話し合うことが苦手であること。

現代の日本の社会を構成している家族の形（家族構成、家族関係を含む）をみると、共働き家庭あり・パートあり・専業主婦あり・核家族あり・拡大家族あり、夫婦平等あり・亭主関白あり、その中間ありで実に様々な

5 民法のうつりかわり  
(1) 民法は何を定める法律か

形態および価値観が入りまじっている。それは何故なのか。今の日本の社会における家族のあり方が過渡期のものであるということとで家族の歴史を勉強し、どう変化してきたのか、そして今後どう変化させてゆくのかを探ろうということになった。

原始社会における人間の生活はどのようなものであったのか。原始共同体における性はどのようなものであったのか。原始共同体における性は、現代人の性に関する常識ではとてもはかりきれないのではないかと前おきして、集団婚から、氏族の成立、氏族間での対偶婚までを簡単に話す。次に母系制氏族社会が、農耕の発達という生産力の飛躍的増大をみるに至って、父系制へと変化していったことを強調する。

封建社会における夫婦関係、家族関係について事例をひき説明。資料の女大学を説明する。明治以降もこの封建的家族制度はひきつがれ、昭和二年の民法改正まで続いた。新民法になってまだ三十七年である。封建的家族観や言葉（父兄、主人、奥様）が残っているのも無理はないが、新しい時代に生きる皆は古い家族観にとらわれず自由に考えてほしい、と話した。

小六法をみせて社会の秩序を保つため実に様々な法律のあることを紹介する。

「未成年者喫煙禁止法、道路交通法……」などいくつか挙げる。憲法二四条を示し、家庭生活に関する基本的考え方をおさえる。民法とは私たちの家庭生活に関する法

(2) 個人の自由と平等  
(3) 形式的自由から実質的自由へ  
(4) 民法と家庭生活

6 家事労働と家族

律である。旧民法下の家族と新民法下の家族の生活について具体的事例を紹介して、民法のちがいがいかに人々の生活を変えたかをしっかりと理解させる（小説などに題材を求め、ゆっくり時間をとりたいところであるが、実際のら列ですませてしまっている）。

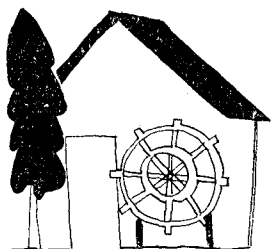
民法については、はっきりわかっていることをわかりやすく具体例をあげながら説明し、板書するという形の授業でも何とか成り立つので、教師もやりやすいし、生徒も身近な生活について役立つきまりを知識としてとり入れられるので一定の興味をもつ。しかし、民法についても討論させたり考えさせたりという形を、今後、是非考えてゆきたいと思う。

この項は、いつも時間切れでできないことが多いが家事労働が家族に果たす意義を、実生活を成立させるという面からだけでなく、家族関係とかかわらせて再検討する必要があるように思う。

家事の合理化が進められ、衣、食、住、保育、老人、病人の看護などに要するほとんどすべての家事労働が、金で解決できる今、家族にとって家事労働とは何なのか、人間にとって労働とは何かという視点も含めてとらえ直さなければならないのではないか。誰が家事労働を担うのかという観点から考えると、婦人労働の問題も考えることになるし、夫婦関係、親子関係をも問い直さなければならぬ。

家事労働はこのように様々な側面から検討すべき課題

であり、家事労働について考えることは、家庭生活全般について考えることなのかもしれない。きわめて重要な項目であるが、この項についての授業研究はまだ不十分である。



## 家政系短大における教員養成

中 島 明 子

「先生、合格しました！」と弾んだ声。東京都の中学家庭科の教員採用試験に合格した知らせです。

私は電話を受け取った時も、その後研究室に来て目を輝かせて喜びの報告をしてくれても、なお半信半疑ではありました。短大生が教員採用試験の一次試験に合格しただけでも大した事なのに、東京都のしかも二次試験をも合格したというのは正に快挙と言えるものなのです。

短大生―特に付属の私立女子校から推薦入学してきた学生は試験が大変苦手です。教育実習も立派にやり終えて資格をとるところまでは頑張っても、いざ教員になる窓口である採用試験のところではまづいてしまうのです。短大生の場合、卒業年次（二年次生）の十二月ごろまでに、大半は企業的一般事務等に就職が内定します。専門性を考慮しなければ、短大生の就職は大卒女子よりもはるかに良いため、年度末まで結果がはつき

りしない教員試験にかけるといのは、かなりの勇氣と決断を必要とします。最初から教師の道を志し他の道はないというなら別ですが、短大の場合には残された魅力的な道が一応あるだけに、私たちとしても何とか励まして合格して欲しいという気持と、難しいようであれば、早いうちに方向転換した方が良いという気持が交錯してしまします。それぞれの青春を燃やせばよいというには、決意するまでの時間が少し足りないように感じます。

さて合格した学生―仮にUとしておきます―バイタリティーはありますが、いわゆる試験に強い学生とは思えませんでした。ところが彼女は私には見えなかった力を発揮したのです。そのUさんに卒業までの間に何度か話を聞く機会がありましたが、いくつかの点で教訓的でした。

第一には、「自分はこれまでずっと優秀な学生だったとはいえないが、生徒の気持をつかめる先生になる自信はある」と言い、そうした教師像を自分なりに描いて将来を決めていたことです。この教師像はある意味で生徒に迎合しているかのようにありますが、「生徒の心をつかめる教師」というのは教育者として最も大切で基本的な力量だと思えます。当然心をつかむということは、教師として専門的知識の裏づけがあつて初めて生徒との信頼関係が成り立つことでもあります。専門的知識は豊富でも子どもの心をとらえることができな教師が目につく中で、Uさんは貴重な存在だといえましよう（もちろん専門的知識についてはまだまだ蓄えなければなりません）。

第二は、「試し」や「冷やかし」ではなく、真剣に教員試験に臨んだことです。先程述べた通り、万一不合格だった場合を考えて受

験するまでは随分悩んだようです。結果は駄目でもととなのかからと大した勉強もせず受け、当然不合格になるというケースがかなり見られます。が、Uさんは教師になろうという決意で必要な受験準備をしたのです。

第三は、小さい時から家庭の担い手の一人としてかなりな生活体験を積み、生活の技術と知識の基礎をしっかりとっていたことです。彼女は経済的には恵まれた「お嬢さん」ではありましたが、両親がそれぞれ仕事をもち、小さい時から家事の一部を受け持っていたようです。両親を手伝うとか助けるという表現よりは、両親と共に、というのが適切であるような形で、自然に家庭を支える大事な一員になっていたということです。

そのことは卒業式の後、研究室の片づけをしてから我が家に集まった時に実証されました。学生が五、六人と研究室の助手の方がいました。が、我が家の冷蔵庫には丸のままのサバが五、六尾あるだけです。竜田揚げにしようというところまではよかったです、サバをおろせる人がおりません。その時、手より口の方が賑やかだったUさんがスツと台所に入り、頭をおとし次々におろしていったのです。グリーンサラダやドレッシングはユニークなものが何種類か出来ていましたが、魚をおろせるのは彼女だけ。

最近はいままで引き継がれてきた生活の知恵が、生活の商品化の下で次第に消えてゆき、新しい商品は豊かにあっても、貧しい生活が展開されているのではないかといわれています。日本の伝統料理が作れない母親、繕い物ができない母親というように、母親の手のおかしさも指摘されていますが、母親ばかりではなく、専門職につく人々でさえおかしな手になっているといわれています。「湯さま

し」や「イナイイナイバー」を知らない保母さんがいるそうです。又最近の経験ですが、日本の子どもは子ども部屋を持っている比率は高いのに、その部屋を掃除しない子ども多いという調査結果をレポートした学生自身、掃除はもちろん、洗濯や食事の用意も一切したことがないと答えていました。

家庭科の教師は生活経験が豊かであればよいというつもりはありません。が、家庭生活の科学にかかわる者としては、その事は基礎的な力としてより豊富にもっていた方がよいということは確かです。特に短大では知識と技術を学ぶ時間が限られていますから、それをカバーする努力がどうしても必要になってきます。教師としての第一歩で直面する困難を見事に乗り切ることができたのは、生活の実践者としてやってきた重みでもあったのです。同時にそれは生徒の生活実感により肉迫する上でも大きな力になったようです。

そうしたUさんが三月もおし詰まったころ、涙声で「私には出来ない、辞めたい」と言ってきたことがありました。着任が決まった中学は非行問題で大変荒れている所でもあり、調理室で満足に料理できない状態にあって、その上に予想以上に沢山の時間をもつことになったというのが理由でした。まだしばらくは先輩の先生方の助けを借りて、「学びつつ頑張ろう」と若干の甘さを持ちながら、気を張っていたにもかかわらず、突然荒海に投げ出された心細さがあったようです。

しかし、思いつめて出来ないと思っていたことも、視点を少し変えてみればむしろやりがいのある魅力的な仕事であることがわかってきます。短い時間ではありましたが、ここ数年の見通しも立って年間の授業計画をたててみました。特に教科書以外の教材に工夫を



こらし、実習の内容も、生徒の要求、これまでの経過、Uさんの力量、施設設備の状況を頭に入れて決めてゆきました。私も住居に関しては、資料、スライド、絵本などを中心に編集してみました。そうしたプロセスを通して自信がついたのでしょうか。四月には笑顔がもどり、もとの快活なUさんとなって下町の中学校に赴任してゆきました。

教員養成の大学、あるいは他の四年制大学ではあまりにもあたり前のことかもしれません。しかし、家政系の短大では教員養成の体制と実績は四年制大学に比べると非常に貧しく、学生は四年制大学学生以上に自分自身の努力で乗り切っていかなければならないのが実情です。

全国には三百余の家政系学科をもつ短大がありますが、このうちの多くが家庭科教員（中学二級）の養成を行っています。家庭科教員の資格取得は家政系短大で取得しうる数少ない資格の一つです。が、これまで述べてきたことでおわかりいただけるように、家政系短大出身者で家庭科教員になる人はそれ程多くはありません。私も家政系短大に勤務して九年目となり、これまで送り出してきた学生は二千人近くにもなりました。この中でとにかく何らかの形で教職についた者は数える程しかおりません。

教育条件、教育体制の点でいえば、教職関連科目を二年間でとろうとすれば過密スケジュールになりますし、系統だてて学ぶなどとはとてもできません。いくらやる気があっても余裕をもって必要な科目を履習するのは困難です。家庭科教育の専任教員が持ち時間の関係でいない所が多いために、一貫して専門の立場から指導できないというのも大きく影響しています。

このような状況から、第一は教職につく学生が少ないこと、第二は在学期間（養成期間）が短いことを理由として、短大での教員養成は廃止又は在学期間を延長するといった意見が、政府関係者、自民党文教部会などにより繰り返し出されてきました。

しかし教職につく学生が少ないという点については、確かに個々の短大では当たっていますし、その割合は学部と比べても大変少ないのです。ところが家政系学部には在籍する学生が六千人に対して短大生は全国で十三万人います。短大全体としてみるならば教職につく学生の数は決して無視できるものではありません。在学期間の問題も長ければそれだけ優れた人材を送りこめるかといえども疑問です。教員の資質の向上のためにはもっと本質的な改革を目指さなければならぬと思います。むしろ、私は、専門教育を行う家政系大学とは異なり、短大が（家庭）生活全体を総合的に見渡した教育を行なうものであり、これをさらに充実した方向にもってゆくならば、家庭科教員養成の上では有利な面をもっていると考えています。

ただこのような方向を短大自身が切り拓いていく前に、教員養成を一部の大学に集中して統制を強めようとする動きが臨教審路線と合わせて強力に推進された場合には、短大での教員養成は難しくなることが予想されます。これまでは短大組織である短大協会などがこれらの動きに反対してきましたが、現場からの改革が必要になってきています。

ところで短大での教員養成について長々と書いてきましたが、この原稿の依頼の意図はそんなところにあるのではなく、今日の家庭科のおかれた状況に対して家政学関係者の一人としてどう考えてい

るか率直な意見を聞きたいというものでした。かなり手厳しい質問です。そこで最後にこの点に触れておきたいと思います。

家庭科と同じような議論として、家政学についても、独自の学問として確立する必要はなく、関連諸科学で十分対応できるという考え方があります。確かにかつてのように生活問題が広汎で深刻ではなかった時代には生活問題に対応する科学はそれ程重要視されなかったかもしれませんが。が生活様式の破壊が本格的に進んだ高度経済成長以降においては、人間の全面発達にふさわしい生活をとるもどし確立し発展させるための武器としての科学が、本当の意味で必要となつてきています。様々な批判はあるものの、これらの社会的な期待を背にうけて、家政学は近年着実に変化してきました。家政学内部の改革の努力と外からの要請とが結びつきつつあるのを感じます。

こうした動きの中で家庭科の男女共修をめぐる動きと関連して常に声が上がっていたことは、家政学に優秀な人材を送りこんでほしいという切実な願いです。偏差値による受験体制の結果、家政学は相対的に低い位置にランクされています。そのことは社会的レベルで家政学の意義が浸透していないのであり、それは大学の問題でもありますが、小、中、高校における家庭科の位置づけの問題でもあるのです。生活にかかわる科学の重要性が中等教育までにしっかりと根づいていること、それを元に進学指導が行なわれることが必要なのです。ところが高校家庭科が男女「平等」の名の下に選択科目になるならば、科学として男女共に必要であるという視点からは大幅な後退です。家庭科、さらには家政学はこれまで以上に消極的な位置づけしか得られなくなるでしょう。今私たちが考えていること

は、現在の高等教育において家庭科の男女共修ならぬ家政学の男女共修です。既にそうした科目を男女共に履習しているところも出てきています。そのためにも高校までに系統的で科学的な家政学・生活科学の教育を男女共により充実させる方向で実施し、社会の新しい手であると同時に生活のない手を育てたいと思っているのです。

さらに言及するならば、高校を手始めとする家庭科教育の後退は、家政学関係者にとつては生活の科学の社会的位置づけの後退ばかりではなく、一つには優れた学生を受け入れるという点において、二つにはその出身者が就職の場を失うという点において直接影響を受けることになります。

家政学は研究創造は熱心に行っていました。それに対して研究成果の社会への還元については大変消極的だったと思います。アメリカの家政学における「普及活動」機能が、良くも悪くも見直されてきていますが、我が国においても教育、企業、行政、社会、家庭などあらゆる分野において、生活者、消費者の立場に立った家政学の普及に力を注ぐことを検討する時期にあると思います。そうすることにより、家政学と家庭科との接点は深まり、家庭科の問題を家政学の問題として敏感に感じとれる条件ができるはずです。

(目白学園女子短期大学)



夜

コーヒーの  
香り充ちたり  
非番日の  
妻と二人の  
秋の夜長く

# 視 点

## 〈「教える」副作用〉

長谷川 孝



《教えよう、教えてやろう、という気持が強ければ強いほど、「副作用」が起こるものです。つまり、ほんとうの子どものところが、見えなくなるのです》

ある取材の会話のなかで出あった  
元校長さんのことば

ふいっと、こんなことばに出あえると  
そのときだけ 取材がすきになる。

私がいいつづけていることを

教育現場の長い体験のなかから  
さりげなく、いつてくれている  
きつとそうなのだ 道草やよそ見

そう、教師たちも道草やよそ見をすれば

「教育する」ことにとりつかれ

「教育される」ことに子らを囲いこむ

自分のすがたが見えてくるのだ。

《考え方としては「教える↓教えられる」と  
いう固定的な関係の解体ということはわかる

のですが、授業のなかで具体的にどうすれば  
いいのでしょうか？

あなた、ね！ 学校の教師でしょ

むしろ、さ！ わたしがそれを聞きたいのよ

わたしは、たかが「評論家」だから

具体的にこたえられるわけがない。

教育実践家の教師が実践のなかから

子どもたちとちからを合わせて

具体的方法を紡ぎ出し

実践的理念を創り出してほしいのです。

だけど、取材が好きになるような出あい

けつして多くはないのも、たしか

評論家のいうことは……と

評論家の目で批判する実践家も多くてね。

実践者の、道草やよそ見する視線は

評論家的な目なんかじゃないのに。

教師たちが陥っている病いこそ

「教えてやろう」の発想にひたりきった

教師のからだとあたまを硬く固めた

「教えよう」の副作用にちがいない  
教師のからだを「教育」から解放そう

「教える」拘束からあたまを解きほどこう。

そうでないと、教師であるあなたが

かわいそう

あなた自身が「制度」になってしまって

あなたがあなたでなくなっているもの

そのことに少しも不安を感じない

あなたが、かわいそうだもの

からだが「教師」になりきってしまった。

おじさん、おばさん、お姉さん、お兄さん

そんな自分で

子どもたちの前に立ってみればいい

教師が自分らしくあったとき

子どもたちも自分らしく、

あなたの前にあるんじゃないかなあ。

《教育は、基礎的科学的で体系的な知識を教  
えること。それを民主的に専門家集団が研究

することがかんじん》

日教組講師団のある学者が力説して歩いているという

教え・わからせてやる教育論

教育の主人公は、教える人たち

教育は専門家たちが与えるもの

オカミにかわって民主的な専門家が与えよう

やさしく楽しく、わからせてやろう。

《その伸びやかな成長を図り、未来に対し柔軟かつ主体的に対応し得る人間の育成を目指して》《既存知識のいたずらな詰め込みと化した知識偏重の教育の弊を改め、知識の基礎、基本を学ぶとともに、問題を発見し、問題を解決し、創造力を培う深く考える知育を》思

わずうなずいてしまいませんか  
なにか引用した文章だと思いませんか。  
教育を見る視点、だけをとりますと  
日教組系の学者たちは保守反動!? だね  
自らの教育支配者性に気づく眼がなく  
《まなび》の主体性は教育の条件にすぎず  
「教えてやる」ことは神聖で正義。  
教師の「教育権」つまり教えてやる権限が  
どれほど手厚く保障され保護され  
教育支配者たるものが  
どれほど強く期待されているかを

教師諸君は、知っているのか。

子どもたちはまさに「学校ドレイ」

教師の「教育権」というムチの前で

心のなかに不安をいだいている。

どんなに民主的で子どもの味方ぶつても

いま、どこでもいつでも自由

「教育権」をふるって君臨し

教育支配者になることができる立場

そこに教師はいるんだよ。

《けつこうむずかしかったけどすこしわかつたよ》《ちよつびりむずかしかったけれど後で分かりました》《むずかしい言葉は、わかんないんだけど、ゆったことがいいとよくわかりました》

《始めは、分かんなくて、ただ、むずかしいことを言っているだけだと思っていたけれども、家に帰ってよく考えてみると、長谷川さんの、言いたいことや、意味が、だんだんわかってきました》《わたしは、わからなかったけれど、勉強になるかもしれないと思つて、わたしは、お話をきいているうちに、なにか、わかつてきました》

長くてむずかしい、わたしの話を聞いた小学校三年生たちの感想文のなかのことは

なんと、やわらかくて奥ふかくて

すごいなあ、とおどろかされるばかり。

こんなにすてきな聴き手たちを迎えて

毎日毎日、対話の機会に恵まれている

教師の仕事って、やっぱりすてきです。

すてきな聴き手たちにどれほど

わたしのほうが教えられたことが

《まなぶ》べきものがキラキラと

関心をひめたヒトミから

射返されてくる

あの子たちが発した信号を

わたしはどれほど読み解きたらうか。

「教育する」発想にとりつかれ

「教育される」立場に子らを囲いこむ

それは「教育ドレイ」のすがた。

「教えるー教えられる」関係の解体とは

あなたにとって、さて、なんですか。

\*\*\*文教懇報告の一節。

\*\*\*教育によって学ぶ者を支配する、という意味で使っている。教育を支配する者という意味ではない。

\*\*\*横浜・日吉南小学校、植垣一彦学級の子らの感想文から。長谷川が五十分ほど、「むずかしいくてわからない」話をした。

(教育評論家)

―現場から―

# 「影を認める」その一

児玉 すみ子

カウンセリング研修の一環として、私が最初に担当したのが、高一のMのケースであった。目鼻立ちの整った、利発そうで、礼儀正しい物腰の、育ちの良い坊っちゃんタイプの子で、研修生の私にも取り組めそうなケースだと、多分、思われて割り当てられたのである。

しかし、実際に、彼と関わった一年は、重く、意味の深いものになった。

「学校へ行けない」

「僕の身体は、ガタガタなんです。なぜ僕だけが、こんな運命なのか、次から次へと故障が起きます。それも、何かしようと思いつくと、必ず、身体が言うことになってくれないんです。」

複視に、下痢に、膝の痛み、アレルギー鼻炎に、頭痛に……」

「欠席超過で、留年を考えなくちゃならない破目になりました。でも、避けたいんですね留年だけは……」

早口で、時々、どもりながらも、とうとうと、まくし立てる。

自分の言いたいことを、次から次へと、休みなくしゃべり続け、私には、一言も口をはさませない。

「お父さんは言います」

「身体が弱いなら、精神だけは強くもて、とお父さんは言います。若い内に鍛える、今の世の中、軟弱な若者が多すぎると。僕は、ずっと、お父さんの定めた標準に合わせて、中学二年の頃までは、トップでした。先生や、周りの人たちからも認められてきました。それが狂い始めたのが、高校受験が迫ってきた頃でした。例によって、身体具合が悪くなり始めまして。やむなく、志望校のランクを、二つも下げたんです。」

感情表現に乏しく、自分を語るといふより、自分を論じるといふ調子である。「お父さんによれば……」が繰り返される。頭の中に採り入れられた父の考えが、バラバラと、吐き出されている感じである。

「君も男だろ」

「担任の先生に、こう言われてましてねえ。迷っていた留年を、即座に決めました。男は、僕のようになっちゃ、困るんです。弟にも、そう言っちゃいました。友達にしても、学校へ行ける身体をもっていないが、さぼったり適当にやったりするんですから、許せませんよ。身体も心も強くなければ、男じゃありません。」

話は、とどまるところを知らず、やがてお説教にも、演説にもなる。

「弱い」ということに、異常に、こだわる。男は強いという固定観念にしばられ、他人の弱さも、自分の弱さも、認めたがらず、嫌悪する。

「僕は意識して行動します。友だちが、自然に振舞っているのが、耐えられません」

「入学直後にあったHR合宿で、委員を引き受けた僕は、皆に、ちやらんぼらんを許しませんでした。合宿は、鍛練の場であるべきで定められたことに従うべきです。僕は、皆から、変わり者と思われるているのかもしれませんが……ええ、そんなことは、どうでもよいですが……」。

「……すべきである」の観念にしっかりとえられていて、目の前の現実に対応できず、友達から浮き上がってしまったことが、学校へ行けない原因の大きな一つなのだが、自分ではその事実には直面できない。

「お父さんの言っていることじゃ、僕は、生きていけないんだ！」

「僕のみたものは、父から日ごろ、教えられてきたことと、大きくかけ離れていた。父は、自分の教育方針に自信をもち、僕も、絶対に正しいと思ってきた。でも、今はもう、すべて、崩れてしまった。放つというほしい。」

この段階に至ると、激しい感情表現がなされる。私にも、「僕の苦しみがわからないなら、放つ」と迫る。感情の起伏、激しく、「父のことは、いじられたくない」と言いながら、憎悪の念をあからさまにして、父への抵抗を表明する。

と同時に、親に相談なく、自分で決めたアルバイトに精出した。自分で選び、探して、ヨガの道場に通ったりする。カ

ウンセリングの回数も、自分で減らしたいと申し出る。

◇ ◇ ◇ ◇

「僕が、体験して知ったこと以外は、言えないんだって、思えてきました」

「断食したんです。最初は、……だったんですが、やがて、……なつて、一番つらいのは……の時期なんです。断食が解けて、まず、柔かい重湯のようなものを一口、食べるんです。ほんとに、おいしいんですよ。身体の細胞が、それを吸収して、生き返るような気分なんです。」

僕の、心と身体で味わった、この事実ほど確かなものはない、と思っうんです。

復学が近づいてきた時期、カウンセリングは、彼の希望で、再び、週一回になった。早口や、どもりが消え、ゆっくりと言葉を選びながら、彼は、彼自身の気持や経験を、私に伝えようとする。私の反応も受けとめてから、言葉を返してくる。

「僕は、トップもベケも、経験した。これからは、その中間で、どこまでやるか試してみようという気持です」

「やるだけやるしかない。話すより、やってみることで、助けてほしい時だけ、僕の方からお電話します」。

「平行四辺形の底辺を一年かかって作ったという気持、あとは、その上に積み上げていけば……」と、言葉少なになったとはいえ、こんなうまい言い草を残して、彼は去って行った。

つづく

## 満月とプラハ



十五年前の九月二十六日、仲秋の十五夜に私のはじめの子、上の娘は生まれました。

病院から私は、秋の気配にみちた野原の中を三十分ほど歩いてひとり自宅に帰りましたが、その道々、大きな満月をみながら私は酔ったような気持になり、いよいよ女の子ときまつたわが子、いままできたばかりのわが子の名前を何にしようかとしきりに考えつづけました。はじめての子に名前を与えるということが酔い心地をいつそう深め、やがてアヤというひびきと綾という文字が結びついたとき、私はもうこれしかないとすぐに心に決めて、あくる日、妻に、「綾子にするよ」と告げました。あれほど得意な気持になったことは、それまでもそれ以後も、そうはありません。

私はまえまえから「綾」という字が好きでした。こんなに美しい漢字はないと思っていました。が、わが子を名づけるにあたって私は、文字からはいったのではありません。名前のひびきから考えていきました。

生まれてきた子と私とのこれからのつきあいは、文字によるつきあいではほとんどないだろう。まずなによりもわが膝に抱いて名をよぶそのとき、やがてよろちと歩きはじめた子どもに声をかけるそのとき、長じては少し改まった物言いをする必要があつてわが子に語りかけるそのとき、どのひびきをもつ名前がいつまでも使用に耐えるか。派手でなく、落着いた美しさを時間の浸蝕にさらされても失わない、そうしたひびきをもつ名前を求めてあれこれ口中にころがしているうちに、アヤというひびきが浮かびあがり、次の瞬間、綾という、かねてから好ましいと感じていた文字がそれに添ったのでした。

綾子が生まれた日は運動会が間近のよく晴れた日で、まだ若かった私は、生徒といっしょに運動場をかけていました。すると、職員室から私を呼ぶ大きな声がし、窓にかけ寄ると、同僚のKさんが、「奥さんがいま入院したって。電話があつたよ」と知らせてくれました。すぐ病院にかけつけましたがなかなか産まれません。はらはらしながらかなりの時間を分娩室の外で待つうちにようやく産声がきこえ、しばらくのち招き入れられてはじめてのわが子と対面し、外に出てみると、先に書きましたように、大きな月がはなやかに空にのぼっていたのでした。

ところで下の娘の玲子の場合はどうだったかというと、予定日をはるかに超えたのになかなか産まれず、このままでは天皇誕生日までのびるかもしれないとはらはらしていたところ、四月二十六日にようやく陣痛となりほつたのですが、これがまた上の娘以上の難産で、その夜のうちに産まれそうもないからと一度自宅に帰り、翌朝病院に寄つてみてもまだ産まれていません。結局そのまま



勤めに出たその勤め先にその日の午前電話がはいり、玲子の誕生を知ったのでした。

妻はいまでも時々、「お父さんはね、私が苦しくて、もう死んでもいいなんて思っているのに、玲子のときは二人目なものだからなれちゃって、病院にいてくれなかったんだよ」と、私を横目にみながら娘をからかいます。と、玲子は、「どうせね、私はね」とすねてみせますが、それからあぬか、下の娘の名前は、ずいぶん苦心したわりにもうひとつインスピレーションに欠けているようで、私は少々やましい気持がしています。ユウコというひびきがすきでいろいろと漢字をあててみたものの、こんどは綾のようなこれという字がなかなか浮かびあがらず、それに、考えてみれば、アヤコにユウコでは少しひびきがつきすぎているような気もする。アヤコというひびきに応えるには、もう少し強いひびきのものの方がいいかと考えて、これがかねて候補としておいたレイコをとりあげ漢字をあてていくうちに、「玲瓏」ということはに対する好尚からようやく玲子に決めたのですが、なお、はじめの子のときのような唯一無二、これしかないという感じにはついに及ばなかったのです。そういえば、下の娘が生まれなずんでいた夜、空にどんな月がかかっていたのか全く記憶がありません。玲子がすねるわけです。

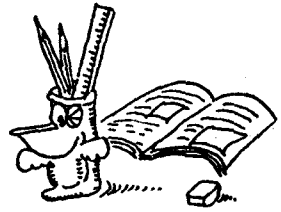
それにしても、文字やことばに対する好尚というものは、ひとりひとりのなかでどのように形成されるものなのでしょう。綾という字のどこが美しいかときかれても私は答えることができません。こんなにはつきりと美しい字なのに、その美しさを私は説明できません。また「玲瓏たる」ということばはいつ私のうちに住みつき、

どのような事情から私だけのことばとなったのか、それを説明しようとする、なんだか気が遠くなるような気持になります。

こうしたことは音楽においても同様のようで、これを書いている今、私はなぜまたしてもモーツアルトの交響曲三十八番「プラハ」をかけてしまっているのか。ほかにいくつもモーツアルトの交響曲はあるというのに、どうして私は、ある心身の状態に在るときに（それはいかなる状態かと問われても私は答えることができない）、むしろに「プラハ」をききたくなるのか――。

私は今日は実は、この二年のあいだに、私の教室の中で、突如、それこそ「せきあぐるがごとく」心のうちをさらした忘れ難い二人の子どものことを書くこうと思っていたのです。その二人の男の子（一人は小学生、一人は中学生ですが）に対する感動を、私は「せきあぐるがごとく」ということばがなぜか好きだということから書きおこそうとして、その枕に、綾という字に対する私の好尚、「玲瓏たる」ということばに対する私の好尚をふろうと欲ばっているうちに、文章が勝手にひとり歩きをしてこまできてしまったのです。どうやら私は、十五年前の秋、霞台地の野原にかかっていたはなやかな満月、綾という文字の妖しい美しさ、「玲瓏たる」ということばのふしぎなひびき、そして、モーツアルトの「プラハ」、それらに崇られたようです。

なんだか男の子を産んで、名前をつけてみたくなったなあ。



## ＊ 学習の主人公たち ＊

あなたはと思う？

### 今の家庭科

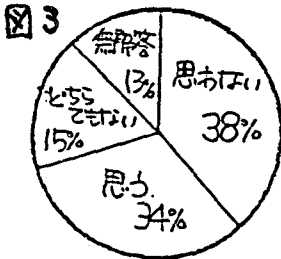
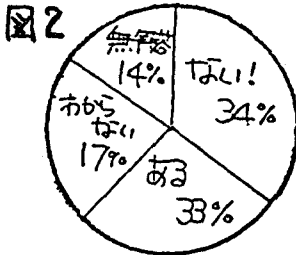
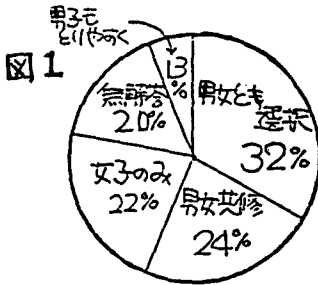
(一年生男女約一九〇名にアンケート)

兵庫県立西宮今津高等学校 家庭科通信  
「うむうむ」 7号より

1、あなたは今後の家庭科についてどう考えますか？

(図1)

この質問では女子が「男女とも選択」に多く入れているのが目立った。男子は無解答もしくは女子のみに集中していて、男女とも家庭科から離れるきざしがある。  
2、男子のみに質問 (九七名)



★家庭科に興味はありますか？

(図2)

★家庭科をやってみたいと思いますか？

(図3)

家庭科をうけてみたいと思う人も、そうでない人もほぼ同数。田中やはり「どうしてもいい」というのが本心かも……ね！

★今の女子のみ必修についてはどう思う？

## 男子の意見

- ・ どうでもいい ・ 何とも思わない
- ・ 差別だと思ふ ・ 男子もうけるべきだ
- ・ 男女差別だが仕方ない
- ・ 女子だけ分かっている役にも立たない
- ★男子がうけたい家庭科は！
- 1 位 食物！(とうぜんの結果だと思ひます)
- 2 位 保育 (結婚すれば必要になってくるからだそうです)
- 3 位 被服 (自分の服を作ってみたいということです)

3、女子への質問

★男子にうけてもらいたいのは？

圧倒的に1位保育関係

2 位 食物

3 位 さいほう

★男子に家庭科は必要か？

- ・ 多少は必要
- ・ どうせやる気がないと思うからどうでもいい
- ・ 生活的自立になるから必要
- ・ 一人暮らしのために食物などやっておけば？
- ・ 絶対必要 自炊できないと困る！
- ・ これからは女性も社会に出る時代！

・女が家にいたらごはんが食べられると思  
ったら大まちがい！ 男子も家庭科や  
てごはんを作らないといけないと思う！  
―意見の中から―

#### 〈一年生女子〉

・独身の時、必要なものは、食物とか洗た  
くだと思ふ。困らないためにもぜひうけ  
てもらいたい

・保育のことを少しでも男子にやってほし  
いと思ふ。避妊・中絶・出産、こんなこ  
とを女子だけやってもだめだと思ふ

・どうせ男子は、育児は女の仕事だなんて  
思ってるにちがいないからどうでもいい

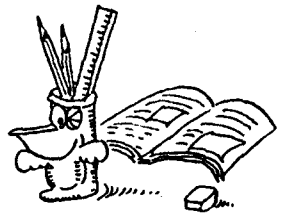
#### 〈二年生女子〉

・「家庭科なんて！」という男性には、私  
と同じ苦しみを味わわせ「家庭科ができ  
る」という男性には、極楽の世界を楽し  
ませてあげたらいかがでしょう

・やっぱり男子もやるべきだと思ふ。女子  
だけやるなんて……差別だと思ふから！

・保育は女のこと……と考へてる人も  
いるんだろうけど……夫婦があつて、子  
供を育てるんだから、やっぱり男子もや  
つてよ（担当、宇佐見、大西、村治、池田、

五十田）



### ＊学習の主人公たち＊

## 川柳を作ってみたら

横浜市立公田小学校四年二組の子供たち

・ペンギンは、くちばしとがって、おしやれ  
ずき  
（近藤良江）

・おさかなは、お池の中の自由の身

（小原聖健）

・けずりとる、緑がへるよ、家だらけ

（杉山由紀子）

・春ってね、きつとふとんできてるよ

（浅野明子）

・お日さまは、西へ西へと、とんでいく

（藤浦 淳）

・ズボンさん、ベルトをはめて苦しそう

（大沢志乃）

・四年生、せは低くても、四年生（近藤健）

・安ものは、買った方がいいが、すぐこわれ

（舟越祐樹）

・わすれもの、したくないのにしてしまふ

（鈴木優美）

・わすれもの、すればするほど多くなる

（神田友子）

・石ころは、いつもポカポカあざだらけ

（加藤蓉子）

・お父さん、ゴルフばかり日曜日

（栗原由美子）

・お父さん、せつせつせつといそがしい

（高橋ともみ）

・敏雄君、ふざけているけど教えてる

（飯島陽志）

「五七五の十七文字で詩を書こう」と提案  
しました。「詩だからね、うれしい」とか  
「かなしい」とかいふ、ありふれた言葉を  
使わないで自分の気持ちがあらわされるとい  
いね」。一つだけ川柳を紹介した後で、早  
速書いてもらいました。

（塚越敏雄）

病むひとへの挑戦

山田 富也

私は三十二歳になる進行性筋ジストロフィー症、デュシャンヌ型の患者です。この病気はいくつかの型に分類されますが、その中でもデュシャンヌ型は進行も早く、最も恐ろしいとされています。全国には、この病気で苦しむ仲間が、二万から三万人もいるといわれています。病名のとおり、進行性で、急に発病するのではなく、徐々に筋肉が侵され、それに伴い症状が現れてきます。一般的には、二、三歳ごろに、走るのが遅い、転びやすいなどという異常に親が気づくようです。個人差もありますが、十歳前後には自力で歩行できなくなり、車椅子の生活となります。その後数年で寝返りさえできなくなり、二十四時間、誰かの介護を必要とするようになります。そして、心臓の筋肉や、呼吸にかかわる筋肉も侵され、多くの患者は、二十歳代で亡くなっていきます。

私は、両親や、教師、級友に支えられながら、なんとか一般の中学校を卒業することができました。その後は六年間、専門の筋ジストロフィー症病棟で入院生活をしました。そのころの八十人いた病棟の仲間の大半は、今

はもうこの世にはいません。私はずいぶん長生きしている方なのです。

☆ ☆ ☆

私は、三人兄弟ですが、二人の兄も同じ病気で、長兄は十三歳で、次兄は昨年、三十四歳で亡くなりました。私たち兄弟がそろって入院していたころ、三人を中心に、進行していく病いと闘いながら、病気の実態を広く社会の人々に訴えようと運動を始めたのでした。無念さを残しながら、若くして次から次へと死んでいく仲間を目のあたりにしていると、何かをせずにはいられませんでした。私たちは、まず、亡くなった仲間の詩を遺稿集という形で自费出版しました。その後も、病棟の仲間たちの詩を集め、『車椅子の青春』として自费出版したり、全国の仲間たちからも詩を募り、『続・車椅子の青春』として詩集を出版しました。さらに、写真展や、絵画展、そして、映画製作（ドキュメンタリー映画「車椅子の青春」、劇映画「さよならの日」、ドキュメンタリー映画「続・車椅子の青春」）など、休む暇もなく運動を続けてきました。

しかし、私たちのおかれている現状は少しも良くならず、現在でもなお、この病気は、治療法はおろか、原因すらわかっていないのです。それでも、病んでいる体ばかり気をとられていたのでは、精神までも病気になるてしまいそうな気がし、仲間たちの手を借りては、各地に詩集を広めたり、上映会を進めたりと、忙しい毎日を送っています。

こんな生活の中で、疲れがたまり、倒れてしまうことも何度ありました。弱々しい脈拍を感じながら、これでもうおしまいかと、何度も思いました。病気が毎日のように進行しているために、自分の本当の限界や、現在の体調の良し悪しがうまくつかめないのです。筋ジストロフィー症と直接の関係がない病気を併せ持つと、余計にわからなくなってしまうます。私の場合、肝炎、腎結石、糖尿病と、健康な部分を捜すのに困るくらいです。

☆ ☆ ☆

さて、私たちは今年、『車椅子の青春』『続・車椅子の青春』に続く三冊めの詩集『新・車椅子の青春』を出版しました。全国の療養所や、自宅にいる進行性筋ジストロフィー症の仲間から、千編近くにもものぼる切実な願いや訴えが寄せられ、その中から八十一人、百一編の詩を選び、収録しました。多くの仲間の詩は、現在どのよう

な状況に置かれ、何を求めて限られた生命を全うしようとしているのかを教えてください。編集作業中の三ヶ月の間にも、四人の投稿者が亡くなりました。そのたびに死亡年月日を付け加えたのですが、明日の命もわからぬ私たちの病気を象徴しているかのようです。

☆ ☆ ☆

私は何か物事を進める時、常にあせりがあります。自分がいつまで動けるか、生きていられるかわからないからです。つい先日も、仲間の一人に、ずいぶん無理をしているようにだが、生き急ぐのは良くないと言われました。しかし、何かをしていなければ病いに負けてしまいそうな気がしてなりません。現在、私はまた新しい目標を持ちました。それは、難病者（重度障害者）の自立ホーム設立です。

人は皆、本来、地域の中で、人間らしく生きていくものです。だから私は、地域の人たちとのかかわりを持ちながら、たとえ限られた命の難病患者であっても、それなりの生き甲斐を見い出せるような家を作り、自立を目指していきたいのです。この難病者（重度障害者）の自立ホーム設立のため、四千万円にのぼる自己資金が必要ですが、その資金集めが始まったばかりで、これからが本当にたいへんです。

私は、常に何かをし続けることによって、病む体に挑戦しているように思います。

病む中で見つけたもの

塚本 しづ子

私は、ある大学附属病院の耳鼻科の特殊腫瘍外来に通いつづけて五年近くになる。平たく言えば顔のガンである。大体、約三十人の患者がいつも顔を合わせる。ということは、もちろん生死の境をさまよった末生還して、多分もう大丈夫という何よりのお墨つきをもらって病院と縁切りする方もいる。しかし、それと同時に、死への旅路についた方、自殺をされた方もいる。

常に新しい患者が入ってくる。生死を共にしている友情というものは、多分、夫にも親にも理解してもらえないことを話し合い、安堵したり、喜び合ったり、悲しみ合う特殊ともいえる奥深いものがあると思う。友情などというより、死を視野に入れて生き合うものの厳しさを持ったふれ合いとでもいえようか。にもかかわらず、死へ旅立つ方に対していかに無力であるか痛感させられる。いとおしみをこめて手を握る、それが出来る最大のことではない。

ガンの発生の原因がまだあきらかにされない現在、治療に限界がある。が、手術の技術は大幅に進歩した。顔

についてもつい最近までは顔が半分になる程ザックリ取って、ガンは治っても顔の損傷がひどく社会復帰が出来なかったりしたが、最近では外見はほとんどそこなわれない。とはいえ、喉頭ガンの場合は声を失い、顔のガンも進んでいれば眼球及びその周辺を取らねばならない。五十代末のKさんは、矢張り眼球とその下の骨を取り二年経過、大きなガーゼをあてて通院している。小学校一年の孫の学校につきそって行っているからイヤ」と断われ、ママに叱られたと淋し気に微笑む。「でもね、小学校三年生の孫と一緒に歩いてくれて交差点の所に来ると手をひいてくれるの」とうれしそうだ。

そのような場合でなくとも予防のため目にも放射線をかけてことが多く、副作用でほとんど視力を失ってしまふ。健常者でも人為的な事故でなく医療の発達したといわれる現代でも、ひそかにしのび寄る病魔のためにいつ病み、いつ身体障害者となるか誰れにもわからない。社会はそのような病める者、身障者を含むものであり、自分はいま健常者であっても障害者予備軍であることを自覚して、もう一度政治を身のま

わりを見つめ直す必要があるのではなからうか。

つぎに病んで最近感じることをあげてみよう。主治医のF先生はT大助教授、耳鼻科の分野で五本の指に入るといわれる名医である。そのF先生の口ぐせは「患者にとっても楽しい治療を」である。ところが、「最近有名大学医学部に入学してくる学生は、医学を志すというより、自分の秀才ぶりを示したくて来る」と嘆く。彼らが医師となった時どのような「先生」となるのであろうか。助かる見込みのない病におかされている患者に、ただただ苦痛を与えるだけの検査を与えはしないだろうか。自分の研究のために、である。また、自分の手術の技をみがくために、貧しい人権意識の薄い医学の発達のおくれている国に「留学」する医師もあるとかいう噂も耳にする。

体こそ病におかされているとはいえ、患者も人格を持った人間なのであり、モルモットではない。けれどそれが上すべりしてしまう危険があるように思える。

もう一点、助かる見込みのないガン患者にとつての関心は、末期ガンの痛みと苦痛である。私も以前そのF先生にうかがってみたことがある。そうしたら「名前を呼ばれたらわかる程度に脳の働きは落ちるけれど、苦痛をほとんど感じないものがある」といわれ安心したことがあ

る。しかしF先生は続けられる。「そのために生命は確実に縮まる。医師はたとえどんな苦痛があろうとも患者の生命を一日でも延ばすことが使命という医師からの非難、さらに患者家族からの非難も耳に入り、最近ためらいを感じている」ということであつた。気の弱い私は苦痛に耐えて一日を生きのびるより、早く楽になりたいと死を望むだろう。それで家族も説得しておくから、そうなたらためらわず、それを使って下さいとお願いをし安堵したのである。

生と死は人間の手のとどかない神秘と尊厳に包まれていると思う。けれど治る見込みのない病、軽くなる望みのないもの、死に至る病を抱え、痛みと苦痛に悶えるような場合で、患者の意識がはっきりしている場合、治療について、「死ぬ権利」について選択することがあつてもよいのではなからうか。むしろそのような機会があつた方が病にかかつて心配なく生きられるのではないか。

科学技術の進歩が目を見張らせられる現代においても、信じてたい程の高さで存在するガンに対する医療の限界を痛感している日々、あえて患者の人格の尊重と、さらにどのような生きるかという選択、「死に対する権利」の三点にしばって問題提起を試みたい。





その後二度再発して入った三つめの病院では西洋医学だけなので、玄米、ゆで大豆、わかめ、とうふを毎日家から彼が運び、それをしっかり食べた。大豆の味は、その日の体調を知るのに最適であった。歩けるようになってからは散歩を要求し、一時間日課として歩き、時々走りもした。天日でうれたトマトや、無農薬のとうもろこし、えだ豆などを、同室の病友たちと共同購入し、隣室まで広がつていたり、じーつと受身で寝ている生活ではなかった。四〇代半ばの女の人たちのほとんどが亡くなり、生きて脱出して、今シャバに身を置けることを思う時、みんなと約束した、「多摩に女の家をつくって暮らそう」を実行しなければと思うのである。

あまりに多く老人の入院をみた時、私は自分が老人ホームに來ている錯覚でしばしば迷った。四〇代の女たちは語り合い、見舞客の女どもも共に語り合った。「我々が老いた時、病院に入ることとは出来ぬほど老齡化が進んでるだろう。みんなで寄り集まって暮らそう。老衰で死にたいね」と。老人医療を二年近く見続けていく中から生まれた自分たちの「老い」の対策ではあるが、元氣になって実現したいのである。

病と共に生きる多くの友人を得てゆく中から、完治して社会復帰したいという強者の考えが消えた。一年八ヶ

月目の退院時に、「病を携えて生きる」という気持ちになるまで永かった。教師として中学生と二〇年暮らしてきて突然「仕事無理」と言われたのは「死を宣告された」に等しかった。その時は「必ず治って三年生が卒業するまでには学校に帰ろう」としか思わなかった、こんな形で仕事と別れるなど考えられぬことだった。

近ごろは身も心も副作用による快と不快の波長にのり切れず、いささかまいっている日々が続いている。二日と快が保てぬ私の姿に、もうすぐ四歳、五歳、九歳になる三人の子どもたちは、私の「快」と「不快」を鋭く見定める力をつけて、たくましく育っていく。一人わがままに不調と快を表す私を、言葉でいたわったりもしないが、ぐちもこぼさず、だだもこねずみつめている。「母の日」に五歳児は私の満月顔を描き、三歳児は泣いている私を描いて持って帰って来た。みんな明るい。私は暗い。私は生みの親。育ての親である彼が樂天的にやって来たからだろう。こんな仲間を支えられてるとほつとする。何か先が展がる氣もする。そんな時中学生との再会がありそうに思え、体内に熱いものが湧き出でくる。今まで強者として、健康な立場で言い切り、動き、だからこそやり切れていたこと——障害をもつ弱者として動きの半減する私に、視点を変えた生き方はあるうが、言い続け、言い切る力が再び生まれてくるだろうか。

職業と病氣

皆川 珂奈江

「仕事が楽しくて仕方がない。生き甲斐よ。仕事によって病氣になるなんて考えられない」というラッキーな人だっていることを否定はしません。でも、この資本主義の世の中、競争原理の法則性にガツチリと抑えこまれた多くの賃労働者は、多かれ少なかれ日々耐える労働の下で生かされ続けていると思うのです。思えば、労災職業病は、労働が「疎外された労働」として存在し始めて以来、同時平行して発生してきたと言えます。生産力と生産関係、つまり社会的経済的諸関係に規定されながら歴史を重ね、多様な型態をもって再生産されてきました。私にその全容を迎える能力はもちろんありませんが、「公認」された職業病患者の一人として、ささやかな体験から考えさせられたこと等を述べてみようと思います。

まず自己紹介風に語ると、私が「頸肩腕症候群」(以下「頸腕」)を体にはりつけてから十年の時が流れ、今尚りハビリ勤務中です。子産み・子育てと、自らの解放の鍵が把めるのではないかと選んだ保育労働の道、「頸腕」で倒れるなど予想外のこと。しかもこんなに長くな

るなんて。今では、多分一生この症状とつきあいながら生きていくしかないな、と覚悟を決めつつある所です。私の職業病斗争(公務災害Ⅱ労災上認定獲得等)については、『現代子育て考』そのⅡ、そのⅤ(現代書館刊)の拙文、パンフレット「ある保育労働者の闘い」「職業病斗争報告集」を参照していただければ幸いです。『ケガと弁当は手前持ち』の前近代的労使関係って、今でも余り変わっていません。これが何よりも働く者にとって問題です。圧倒的多数の賃金労働者は、一日のうち、人間が自然の摂理にかなって生き生きできる昼間の八時間(実際にはそれ以上)を経営者や管理者によって支配され、自由にできないが故に、慢性的疲労に陥っても働かざるを得ません。そして病氣は、本来そのような状態の中から発生しています。『過労』こそ職業病の原因なのです。このあきれる程平凡な結論、あたり前の事に、私も苦い体験を通して気づいたというわけです。

しかし、この事が労働現場ではなかなか共通認識になりにくいのです。炭鉱爆発のように災害性が明白な労災と異なり、頸腕や腰痛(災害性の時もある)、精神疾患等の非災害

性の職業病は、時間的経過の中でジワジワと蓄積された疲労が、一人一人の置かれた状況によって少しずつ変化を見せながら発症するために、罹病者の個人的体質に原因がスリ替えられたり、私生活の問題にされやすいのです。職業病を発生させるような職場は、すでに労働条件が悪く、潜在患者を孕んでいるわけで、仕事が生ンドイ分、労働者同士団結より分断にさらされ、病弱者（病欠者）は重荷として排除の対象にもなっています。被災者も同僚に迷惑をかけているという負目を感じさせられ、あるいは退職し、時には自殺にまで追いこまれたりする人も出てきます。

私とて、夢の中で子供たちの姿や同僚、園長の顔に追われたり、救急車の世話になるなど二度と思い出したくない日々がありました。踏み止まり斗い続けることができたのは、仲間たちの支援、連れ合いの献身によるものですが、私の発症を個人的責任にされることがどうしても納得できなかったからです。この仕事に就くまでは普通の健康体であったこと、私以外にも相前後して同じような患者が発生していたこと、病休で職場を離れると軽快し、復帰すると再び悪化する、という状態は、明らかに労働現場に原因がある事として、私に確信を抱かせました。幸いにも斗いの結果、客観的にもそのことが認

められたのですが、そのための膨大なエネルギーは個人的解決の限界を越えています。ですから、支援体制が作れずに押し潰され、孤立状態の中で苦しんでいる多くの被災者のことを想わずにはいられません。労働者は労働力を売っても、健康破壊を許したり、命まで売った憶えはないのですから、完全に労働力の再生産を保障するのが近代的労使関係の通説になっている事をつき出し、使用者の義務として実現しなければと地団駄踏みます。

去る六月三日「第四回全国労災職業病被災者対策会議」が開かれました。今の所、この場が全国センターの機能を荷い始めているように思います。ジン肺、脊髄損傷というようなもう治りようもなく生命終る日まで耐える被災者から、化学工場、原発産業の中で発生し続ける職業ガンの不気味な広がり、新技術導入（ME・OA・コンピュータ）により新たに生み出されつつある被災者等、労災職業病の蔓延を、私たちはどう迎え撃つのか。主体の斗いは患者の悲痛な声にゆり動かされつつあると思うのだけれど、未だ届いていないようでもあります。労基法改悪、機会均等法、労災保険法改悪等の荒波にのみこまれないために、患者を守り、自らの労働現場を把えなおすことを！

町医者の願ひ

—私の病歴書—

中野 明

農家の四男に生まれた私が医者を目指したのは小学五、六年のころだったと思う。母方の叔父が医院を開いており、長兄も医学生だったせいもあるが、少年の心を決定的にしたのは野口英世の伝記だった。覚えたばかりの人類愛という言葉綴り方に書いて胸を躍らせた。

医学校の予科入学と同時に叔父の家へ養子に迎えられた。一年の冬休みに、母の雑誌で読んだ吉田絃二郎の一文がすっかり気に入って、彼の文学の虜になってしまった。予科三年の最後の試験を前にして、空しさが昂じて遂に試験を受ける氣力を失った。数日下宿に籠ったきりで、やつのことで留年の覚悟が出来、漸く長い感傷から抜け出した。

本科に入り暗記と実習に明け暮れ、無味乾燥な授業に嫌気がさし、哲学書を渉りはじめ西田哲学に傾倒していった。幾度か医者断念しようと迷った揚句、先輩の紹介で某哲学者の庵を関東に訪ねた。「君が何者になろうとも医学をやっておくことはマイナスにはならぬ、それから好きなことをやっても遅くはない」と寤められて二

の句が告げなかった。一坪位の狭い書齋に蔵のような人格に對座していると、微塵のかけらに等しい自分を痛感した。

卒業間近になって内科や外科など各科の外來実習に皆が励んでいたころ、私は分院の精神病棟に泊り込んで、獣医にだけはなるまいと嘯きながら、未來の精神科医を氣取っていた。

兵役、敗戦、引揚げ、震災と、青春の一時期は目まぐるしく動転した。やがて無医村医療に生き甲斐を求めて家を出たのは二十六年の早春のことだった。岩手での生活は全科医として多忙を極め、夜通し往診に回って一睡もしない夜もあったが、人々の温かい心はどんな苦勞も感じさせなかった。神奈川北辺の無医村診療所へ移ってからは、東京や横浜との往來もあり、都会との医療落差、専門医との身分格差を改めて膚に感じた。山峡の雲は美しく、その流れは田舎医者の夢のようにゆっくりとしていた。

三十年夏、父が合併後の初代町長に選ばれ、私は帰郷を余儀なくされた。居てくれなくては困る医者が、比べられる医者に変わった。診るだけで感謝された身分が、いかに診るかを自分に問う立場に変わった。三十八年「実地医家のための

会」が設立されるが、その趣意は私の願いを余すところなく志向したものだ。この会はやがて日本プライマリ・ケア学会を誕生させ、後者は今、医学ではなく、医療学の確立を目ざして根を伸ばしつつある。四十七年、父から受け継いだ病院を診療所に切り換えた。自分の守備範囲に徹することが医者良心と信じたからだ。父が、私の説得を聞きとどけた父は、その年その月に他界した。

成人病が叫ばれ、老人医療が普及するにつれて待合室は賑わったが、心は却って重くなるばかりだった。生活病とも、習慣病とも呼ばれる老人病は、医学がいかに進歩したとは言え容易に癒せる代物ではない。むきになればなる程非力な自分を悲しんだ。父の死を機縁に寺との交流が深まる中で、老人医療の限界は幼時から育まれた真宗聴聞の途を急がせることになった。

「医学哲学の会」の主唱者T博士の論文が、私に驚天動地のショックを与えたのは四十八年のことである。これこそが医者聖なる務と窃かに誇ってきたものが、ごく当たり前の行為に過ぎないと喝破されたのだ。「長生を願い、病氣と死を怖れ、一日も早く病氣から逃れたいと望んでいる大多数の人達の個体的生命の存続や欲望のための要求と、人類全体（種）の生存のための要請とを峻

別し、後者が公的原理として、前者の私的原理に優先することを確認すべきである」。従って「死や病氣も善でありうるものとしてこれを耐え忍ぶよう努力し、健康や長寿も悪でありうるものとしてそれに奢ることをひかえるように方向転換すべきではあるまいか」。

ショックから私を徐々に回復へ手助けしてくれたのは、中国医学と実存心身医学とであった。前者は現代医学の短所を、中国医学との論理構造上の比較を明快に指摘し、後者は人間のみが有する精神の働きとしての意味・価値を医療の面で再認識することを迫るもので、共に、杓子定規で平板な日常診療に幅と奥行きを持たせ、不治の患者に対してこそ医者は存在しなければならないことを識らされた。

読者の皆さんや社会に対して、一町医者としての願望や期待を書くつもりが、計らずも私の遍歴のあら筋に終ってしまったが、病んでいるのは外ならぬ私自身であることに気付いたからであります。

教師のつぶやき ぼくの△△小日記

鈴木 正美

左は、日本のどこかの小学校の教師の文章です。この五〇歳の教師に、ぼくは全面的に共感した。「おまえのようなガキンコに何がわかるか!」と、この教師に怒られるかもしれないが、とにかくぼくは共感した。

◇

「教育臨調」に、わたしは驚かない。民主主義など、もともと虚妄だったのだ。一九五〇年、わたしは新制中学を卒業した。わたしは鉱山の事務所の雑用をやりながら、定時制へ通った。分校だった。クラブ活動もなかった。常任の教師は二人だった。校舎は中学の間借りだった。全日制の高校とは比べられないほど劣悪な環境だった。会社では上役にペコペコするこの世の姿を見せつけられた。

わたしが全日制に行けなかったのは金がないという、それだけのことであった。それだけのことで、この世の道を変えてしまわなければならない日本国の憲法、例えば「教育の機会均等」などはまやかしてあり、憲法はまやかしのものだ! 中学校でならった「民主主義」のうそつ

ぱちに、わたしはガックリときた。

今、五〇歳。小学教師のわたし。わたしに何ができる。後十年、教頭試験も受けず平教員として生きること。これならできる。やりぬくのだ!

◇

○月〇日、知能テストがある。およそ、教える育てることとは縁のないこの知能テストを、ぼくは「ヤダナァ!!」と思う……。

先日、お坊さんがこんな話をしてくれた。「コップに水がいっぱい入っていると、もう水はそれ以上入らない。人間の心も同じだ。空にしとかなければ、入らない……」。

ぼく自身をふり返ってみて、全くこう思うし、クラスの子たちを授業の中で見ていても、そうなんだろうなあと思う。

林竹二は「いまの学校は、石ころをおいしいパンに見せかけて、食べさせている」と言った。知能テストは、およそパンには見えないし、無用無害の長物だと思うから、安心してやることにした。だいたい知能テストなどやらなくなったってテスト結果は想像つくよ!

米の流通のしくみ

おらき敦子

九月八日、城北の読者会では十六ミリ映画『米の流通のしくみ』と『わたしのみつけた小麦粉』を上映した。

初めての会場だったせい、参加者が少なかったのが残念だったが、米をめぐるのさまざまな話し合いがなされ、時間不足をかこつほどだった。

この上映のきっかけは、We '83年12月・'84年1月の大森嘉子さんの中学校での実践報告「米の学習」を読んだこと。

その頃から'83年米の不作、米不足がニュースに現れ、カリフォルニア米の輸入や減反政策見直しが論じられ始めた。スーパーの店頭には、高いコシヒカリ、ササニシキが山積みされ、標準価格米は隅に押しやられ、その粒が目立って小さくなってきた。——消費者としては一体どうしたらよいのか、いらだっている中で、このフィルムを知って、上映を企画した。

実現までの間にも、突然、韓国米の輸入が決定され、冷夏との予想に反して猛暑が襲来するや、一転して豊作、減反継続が言われる——一体、米はどうなっている

のか？

農山漁村文化協会製作のこの三十五分のフィルムを要訳すると——

食糧の国家統制である食管制度に、自由流通という市場原理をとりこんだ「自主流通米制度」の十五年間、消費者は「おいしい米」ササ・コシ」という銘柄米信仰を植えつけられ、生産地は品種の単一化へ誘導された。その間にあって、卸資本は急成長し、今や精米の六割を掌握している。大型集中精米工場では、米は加工食品として製造されている。生産も消費も、流通に支配されているという今日の実態を描き出す。

(詳しくは農文協『農村文化運動』第九三号「特集 米の流通のしくみ」三百円)

上映会の参加者に、アンケートをとってみた。首都圏に住む純消費者、八割がサラリーマンである。回答二〇世帯のうち標準価格米だけを食べているのはゼロであった。買うのはササニシキ・コシヒカリに代表される銘柄米だけというのが五五％、胚芽米・玄米・七分搗米・無農薬米と併用している

のが三五%、標準価格米を買っている一〇%も、銘柄米と併用していた。

つまり、百分が自主流通米を買っている！

この回答世帯の二〇%は、農家の出身であつたり、親戚から送ってもらつたりして、生産地とつながり、米のホンモノの味へのこだわりが強いが、それでも格上げ混米された市販の銘柄米との味の識別は定かでない。

回答世帯の五五%は生協、自然食品店などで米を買い、デパートで買う世帯はない。合成洗剤拒否や学習という個別行動を八〇%が続けており、そのうち六三%が、生協・共同購入・自然食品グループなどの消費者組織に加入しており、全体として消費者としての自覚は極めて高いと考えてよいと思う。

それでも、なおかつ、この映画の指摘する通り、「ササ・コシ」信仰は強烈に浸透している。家族数とも職種・収入とも関連なく、この二〇世帯は、価格にして、十%あたり四、三〇〇円から六、六〇〇円、平均して五、二〇〇円ほどの米を買う。すなわち、標準価格米（政府の公定価格）より一、六五五円、四七%も高い米を「自主」的に買っているのである。

その矛盾を、映画は「政府の米価引上げには反対する消費者団体も、自主流通米の値上げには黙っている」と

指摘する。その差額はどこへ行くのか？ 銘柄米は本当に「おいしい」のか？

「おいしい」米キャンペーンにのせられ、格上げ混米を、「自主」的に高く買っている消費者のあり方が、流通資本の支配を一方で許しているのではないだろうか？

映画を見て、流通資本のきかないやり方への怒り、銘柄米への疑問が語り合われる中で、消費者の勉強不足の反省も出た。

従来、米については、とかく生産と消費とが対比される形でとりあげられてきた。初めにあげた大森さんの実践例も、映画『……小麦粉』も流通過程への言及はないし、消費者向けにわかりやすく書かれた『米・イネからご飯まで』（星川清親・柴田書店・一九七九）にも、流通資本の役割は書かれず、生産者と消費者双方の怠慢・無知が、うまくない「おいしい米」ブームをもたらしているかのように書かれている。

現在私たちは知らずに世界各地の産物を買ひ、食べている。食糧は世界的に戦略物資として重要度を高めており、流通の意義は極めて大きい。食生活は生産と消費だけで成り立っているのではないのである。

（食糧の生産・流通の現場で起きている数々の不合理について、貿易摩擦や、農業破壊政策におびやかされる私たちの食糧について、非常によくまとめられている『食糧』（朝日新



聞社・一九八三)を読んでほしい。

ところが、現在の家庭科教材は、消費のうちでも特に調理の段階に偏っている。半田たつ子さんは、かつて執筆した教科書原稿で世界の食糧事情や流通をとりあげたところ、検定で、これは社会科でやることだ、と削られたと語った。

消費者は、生産者との対立という図式にのせられるの

ではなく、流通を握り、操作している資本・国家にも目を向けて、生産者との連帯を考える必要があるのではないか。消費者教育に欠けているもの、あるいは意識的に欠落させられているものが何か、をこの映画は考えさせてくれた。一見をお奨めしたい。

(このフィルムは、全国に無料貸出をしてくれる。問合せは電話〇三―五八五―一一四―農山漁村文化協会文化部まで)

## 「新しい家庭科を創るために」

小学校では」の

中里清志さん

アメリカにいらったそうです  
ね。

「もう五年になりますか。Y M C Aの企画でニューヨークからロスまでホームステイをしながら、五十日ぐらいでアメリカを横断したんです。一族と車で小旅行した時、こんなことがありました。十歳ぐらいの子が車の中でワイワイ騒いでばかり、とうとう父親は家から10位手前で、その子を車からボンと出してしまったんです。一人で歩いて帰って来ましたが、厳しいと思いましたね」

現在の学校情況はいかがですか。

「子供たちをとりまく環境が年々悪くなる中で、子供を守るとはどういうことか考えていかなければならないと思つて労働組合の仕事もしています。

非行はピークを過ぎたと報道していますが、そうじゃないんですね、中学の先生なんか聞くとも陰質化しているんです。

今六年を担任していますが、朝、子供たちとマラソンをしているんです。走った後、肩をたたいて話したり。

高学年になると女の子なんか運動しない子がでてくるんですよ。健康第一を忘れていたみたいですね、精神面でも」

雑用が多く教材研究の時間もないとか……

「新指導要領が制定されてゆとりの時間がで

きたのですか、何をするかの会議などですね……教材研究はほとんど家ですよ」

小三のお子さんの学童保育の役員、町内会・「水害をなくす会」の役員、おつれあい保育園の役員……まさに地域に生きていらつしやる。

「夏休みに家族で木曾駒ヶ岳から御岳山に登りました。木曾駒では御来光を見ることが出来て、山小屋の人によると年に三回しかないいい日の一日でした。

この間、日本百名山に登ったという人がいました、登ってみたいですね……」

山を話題にしていると時間を忘れそうです、お忙しい方だからこの辺で。

南浦和、午後六時。雨。

(中野 敬子)

# We になんでもいおうなんでもきこう

七月号でお願いしたアンケートに答えて下さったご意見の中からご紹介します

ウロコが落ちたような気がして、「頑張ろう!」という元気がわいている自分に気づく。そんな雑誌です。(昭島・平岡さゆり)

◆いつも痛い所をつかれる思いですが、授業やHRなどにも参考とさせていただき、時には利用させていただいております。

(東京・国友たま)

◆一人でしょっていくには問題が大きく多すぎる世の中、この雑誌を読むと、色々問題が見えてくるようです。仲間が一人でも増すことを願っています。

(稲城・鈴木友子)

◆波のページをいつも心待ちにしています。(福井・本川須美子)

◆忙しくてためてしまいがちなのですが、読み終わったとき、目の

知恵等を出してもらおうといいと思います。(所沢・中嶋里美)

◆毎号、様々なことを考えさせられながら拝見させていただいています。真剣に問題に取り組んでいらっしゃる方々の意見や報告に触れるたびに、がんばらなければと勇気をふるい起こされる気がします。ただ……全般に教師と呼ばれる方々の文章には、気負いすぎる感があり、逆に一歩学校を引きさ

◆子供は母親が、絶対母乳で育てるのが自然だから、0歳児の母親は働くな、ということになって、乳児保育が後退し、仕事や勉強を続けたい女性がますます孤立無縁になってしまいう危険性がある。

(八幡・安東尚美)

◆毎号楽しみにして読み、自分の進路の指針としています。それにして日々忙しさに負けそうで、カバンの中でずい分眠っていることがあります。がんばって下さい。

(宝塚・政処紀子)

◆新しい文化のために、お楽しみコーナー、提案コーナー、生活の

◆長年教職を離れていて、再度学校に入った私。50代の私には、生活、生徒の見方の多様性を、御話で教わり、目を見張る思いでおります。(仙台・西澤幾子)

(静岡・稲葉伴子)

◆七月号の平山たか子さんのご意見と大体同じようなことを、私も感じています。

(小千谷・五十嵐愛子)

◆下の子が三歳になったら、四人の子らと共にフォーラムに参加したいと思います。最初はとっつきにくい本でしたが、今はとても中

身のある本でいいと思います。(東京・川鍋由利子)

◆新しさが溢れています。パラエティに富んだ内容です。魅力的です。こういう雑誌を読む人がふえれば、保守的な私の住む地方の古

(鎌倉・駒野智佳子)

◆新しさが溢れています。パラエティに富んだ内容です。魅力的です。こういう雑誌を読む人がふえれば、保守的な私の住む地方の古

くさくてさげすまれた家庭科も変わりましょう。(松江・長谷川薩子)

◆五人で読書会をしています。今回四月号をとりよせテキストにしました。(函館・平石裕子)

◆なるべく目をそらそうとしている点を鋭く指摘して、怠慢になりつつある精神をひきもどそうとしてくれる刺激剤として読んでいます。(盛岡・三田フミ子)

◆大変読み易く、楽しみにして待っています。生徒がとても好きな家庭科となればいいですね。家庭というより、総合科目のようにも思います。(大村・古賀順子)

◆女性をめぐる問題についての一定のインパクトは、少なくともわたしにとってはあります。この本から直接というより、あるきっかけを与えてられて、深く深く下降して、他の著作物にあたる、というように。これからも精進してゆきたいと思っています。実践や理念をさらに深めるための「誌上討論」ふうな欄を設けてみてはいか

がでしょう。(横浜・植垣一彦)

◆週一回の英語を通しての中学生とのつきあいを再開して三か月。少年よ、少女たちよ」の岡さんの言葉に祈りを感じました。(鳥取・前田享子)

◆毎号充実して、読むだけでもたいへんですが、たのしみです。本の紹介特にいいです。(千葉・亘公子)

◆楽しみにして読んでいます。三月の公開ゼミナールには初めて参加しましたが、読者はやはり先生方が多いようですね。もっと一般の人にも広めてほしい雑誌だと思います。(東京・橋口直子)

◆一つ一つの文に色々考えさせられています。今までとっていた本では得られなかった新しい角度で物を見たり考えたりに、改めて今まで流されていた自分を感じます。(岡崎・鈴木昌子)

◆中身が濃いので読むのが疲れるという所があると思います。一般向け誌なのか、家庭教育専門誌

なのか、むずかしい所ですね。私は一生懸命読んで、学生に話し、講義に使用していますが、なかなか買ってくれないみたいで悔しい思いをしています。でも、それも私の無力さからかと思案して、授業改善にアタック中です。(高知・菊地るみ子)

◆Weが届くのが楽しみです。家庭科必修の事がやっと報道されるようになった今、がんばって下さい。(柏・橋本葉子)

◆カウンセリングの事例をたくさんつけて下さい。(武蔵野・中本保子)

◆いろいろと教育行政批判の参考にさせていただいています。ひろい読みのみしています。(東京・宮本なおみ)

◆男女別名簿に抗議しようというのを読みまして、何かハツとする思いです。なんとなく受け入れてしまっている身近なことも、よく見直してみなければいけないなと思いました。エリート向けの雑誌

にはならないでほしいと願っています。(東京・成田淑子)

◆立教時代、半田さんの「家庭教育」を受講し、毎回楽しく学習しました。今後、何らかの形でWeを盛り上げてゆく力になってゆきたいと思っています。(横浜・久保田安子)

◆二年の非常勤講師生活の後、今年公立高校に本採用になりました。京都は来年度からの制度改善(？)に向けて、現場で様々な議論がなされています。類系別(できる子できない子を分ける)を前提としてカリキュラムが再編成されていますが、我校では家庭一般が英語や理科などの犠牲になる方(候補)にいつも上げられます。「進学」という言葉の前には正常な理性を保つのは至難の技で、「教育熱心」な先生ほど家庭一般を必要とするのです。(京都・宮武由紀江)

スペースが尽きました。ご紹介できなかった方、お許しを。

諸々の事件を通して、母子家庭、父子家庭に育つ子供たちの問題に関心を持つようになった。父母双方が健在であつても、母子家庭的な家庭、父子家庭的な家庭も増加している。もちろんこれは比喩的に言っているのであつて、母子家庭と父子家庭を型にはめて色分けしているわけではない。例えば母親が一人で子供たちを育てていても、母子家庭のタイプと父子家庭のタイプがあるように思う。

私自身の幼児期は父が職業軍人で外地へ行っていたため、母の郷里に身を寄せての生活は今思うと古典的母子家庭そのもの。子供たちの食料不足と病氣と死だけを恐れて、すべてに消極的だった母。

心配症で病身の母だけが頼りで、母が死なないう日夜祈っていた私たち姉弟。貧しく疑い深く、それでいて家族は濃密な愛情で結ばれていた。長い間この幼児体験からぬけ出すことができなかった。

そして今私自身が営んでいる家庭は、夫婦がそろっているのに父子家庭である。子供たちは好き放題にたくましく生きていくけれど、基本的な生活習慣が身につかぬまま成長し落ちつきがない。この子たちが将来どんな家庭を作るのかふと不安になり、これまでの生活を反省するのがもう取り返しがつかない。プラスの面としては、私の育った家庭も、私が作った家庭も、親の力不足の分だけ子供たちの仲が良い。全く子育てというのは難しくて何が良い結果をもたらすか、決めつけることができない。

ところで最近、かなり長期間母子家庭、父子家庭で子育てしてきた男女が子連れどうしで再婚するケースがふえて、両家庭のドッ

キングによるトラブルも多発している。

ある女性は、五年前生活力のない遊び人の夫に愛想をつかして離婚、一人娘を育てながら学習塾を経営し自活してきた。夫の残した借金も払い終わり、やっと一息ついたら四〇歳。娘は中学一年でピアニストを志しているが、貯金もなく将来が不安。身体もあまり丈夫でない。こうしたとき好条件の再婚話がもちこまれた。相手は五八歳の大学教授で十年以上前に妻と離婚し、三人の娘を育ててきた。上の娘はヨーロッパに留学しており、下二人は大学生。彼女の娘も養女にして音楽大学にも行かせようという。男はこりごりと思っていた彼女なのに、わずか二ヶ月の交際で、住みなれた借家や学習塾をたたくで再婚し娘をつれて相手の家庭に入ってしまった。後日彼女の娘は、最初からあのおじさんも嫌いだったし、転宅や転校で死ぬ程辛かったけれど、ママがうれしそうにしているの言ひ出せなかったと言っている。破局は数ヶ月でやってきた。夫はおだやかな外見と違つて、神経質で自己中心的で冷酷。大学生の娘二人は放つて育てられたため下着も汚れ物もちらかし放題。朝から焼き肉ばかり食べ、わがままで生活を変えることを拒否する。小ぎれいに、貧しいながらも三度の食事のバランスにも気を使つてきた彼女たち母子はびっくりしてしまつた。ついに彼女は病氣になり、娘と共に追い出されてしまつた。財産も職業もない彼女は、生活保護を受けながら、ゼロからの再出発。最初の離婚で経済力がどんなに必要か身にしみていたのに失敗をくり返してしまつたと述懐している。

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(四一六)

### 山の雫に

六八六年十月三日、大津皇子はこの歌を残して世を去りました。謀叛の罪の名による電撃的な処罰であったことは前回に述べました。

大津は、ものにこだわらないあけっ広げな性格でした。

あしびきの山の雫に妹待つとわれ立ち濡れぬ山の雫に(一〇七)  
当時、石川郎女という魅力的な女性がいまして。草壁皇子の思い人でした。その女性に大津も心を寄せました。「山の雫に」という心にくいばかりの言葉をくり返して、大津は切々と歌いかけます。

吾を待つと君が濡れけむあしびきの山の雫にならましものを

(一〇八)

郎女は大津の歌の言葉をひきとって、すかさず応えています。男心をくすぐります。相当な才女です。この二人はやがて結ばれます。

一〇九番歌はその時の大津の自認の歌です。

### 冤罪？

片や、草壁の郎女への歌は、大名児を彼方野辺に刈る草の束の間もわれ忘れめや(一一〇)です。彼方の野辺で刈る草の束ではないが、束の間もあなたを忘れはしない、という意味でしょうが、今いちさえませんね。郎女の返歌は見あたりません。

ここでも、草壁は大津に遅れをとっています。恋の恨みはこわい。あれやこれやで、大津の存在は草壁(持統)にとって我慢がな

らなかつたのでしょう。邪魔ものは消せ。大津はその犠牲になったのだと思います。大津事件には冤罪の匂いが色濃く漂っています。私は大津の冤罪を信じます。再審請求をしたい気持ちです。

### 二上山を弟と

弟・大津の死を知って姉・大伯皇女の哀しみはいかばかりであったことか。伊勢神宮の斎宮の任を解かれて、傷心の大伯は十一月十六日、空しく大和へ帰りました。

神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに

(一六三)

見まく欲りわがする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに

(一六四)

落莫の情は読む者の胸に迫ります。やがて大津の亡骸は二上山に移葬されました。死後も大津への世人の思慕が強かったので、敬して遠ざけたのでしょうか。大伯は三たび歌います。

うつそ身の人にあるわれや明日よりは二上山を弟とわが見む

(一六五)

磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはな

くに(一六六)

大伯はこの後、七〇一年に四十一歳でひっそりと世を去りました。夕日の二上山は哀しく美しい。わけても秋の日のそれは。その雄岳の頂上に大津の陵墓があります。大津を偲び大伯の哀しみを胸に、この十月、私たちはまた二上山に登ります。



萬葉の男たち・女たち

## 姉と弟(二)

井田

邦弘



## 仲間と一緒に

松村寿美

私が障害者の問題に関心を持ったのは、高校時代であった。

その頃の女学生が誰でもそうであるように、私も結婚や出産などに興味を持った。そんな中で「出産」について、一つ気になることがあった。それは、世の中で妊婦への励ましによく言われる「五体満足な子を生んでくれさえすればよい」という文句である。私は「じゃあ、もし五体満足じゃない子が生まれたらどうするのだろう」と思った。そして自分にそういう子が生まれたら、その事実をどう受け止めたらいのだろうと考え込んでしまった。しかし、その時の私には、その難題の答えを出すすべもなく、大学は福祉学科に進んだのだ。ただ、五体満足論に対する感情的な反発を胸に抱きつつ、大学四年間を過ごし、様々な大義名分を身につけて社会にとび出した。

その頃、知り合ったのが「むかい風」の元祖のような人々であった。皆、脳性マヒで車いすに乗っていたり、言語障害があったり、歩行困難だったり、健常者と呼ばれる私にはないハンディがある。でも彼女らには、生きてゆくパワーがあり、「人間」そのものを深めるための洞察力や考える力があつた。そしてその強さの中に、何よりも素晴らしい優しさがあつた。それまで障害をもつ友達がいなかった私は、大いに影響され、様々なことを学んだ。そして、私は「五体満足論」がいかに社会における障害者差別を生み出す大きな

要因の一つになっているかを確信した。そして自分なりに、私の生き方で対抗してゆけるかを考えた。それは簡単なことで、障害を持つ子供が生まれないよう望むのではなく、子供の命そのものを望むということであつた。

実際、自分が子供を宿した時、当然「五体満足論」を様々な方から言われたが、はつきり「生きて元気に生まれてきてくれればよい」と公言した。しかし、出産の場面で本当にそう思えるか不安だったのは事実であつた。当日胎児が産道で止まってしまい、酸欠状態の危険もあり大変な難産だったが、後で障害が残っても命さえ無事であればよいと本気で思えた。とてもうれしかった。

その子は、もう二歳になり、今年の六月には次女が生まれた。やはり、同じだった。ただ上の子が病気がちで手がかかるので、次の子が障害児だったら大変だろうなあ、しんどいなあと思った。でも、しんどさは一生懸命につきあうことでできっと乗り越えられるはずである。それより、障害をもつ子の存在を認め、同じ人間として共に生きるしんどさを味わうことに大きな意味があるのだと思う。偶然にも、障害を持つ子供を生まなかった私が、こんなことをいうのは生意気かもしれない。でも、とにかく、私は生む性である女として、そして人間として、どんな状況にあつても、社会における障害者の差別を絶対に許してはならないと思う。

毎日、子育てにふり回されている私だが、女として、人間として、いつも何かを投げかけてくれる「むかい風」の仲間とは一緒に年をとってゆきたいと思っている。



## 男女平等教育すすめてますか

『自然な関係』を書いた吉田真由美さんに言わせれば、好きなものを仕事にしてこそ意味があるという。誰もがやりたがらない仕事はどうするか、単純反復労働はどうするかという問題等があるが、基本的には彼女の意見に賛成だ。そうなる所高校の進路指導などもあり現状を変えなくてはならない。

私が高校生の頃は進路についても担任との面接などなく、自分で決め、就職係の教師から求人票をみせてもらって会社を選んだ。私の中にも自分の好きなものを自分の職業と結びつけるという発想は皆無だった。

高校生の頃、私は映画を見るのがとても好きだった。担任との面接があつて、「そうか、君は映画がそんなに好きなのか、それじゃあ映画女優か、映画評論家か、それがむずかしければ、映画会社で働いてみるか」などとヒントを与えてくれば、複雑な世の構造を知らない十七歳の私は、その気になつて映画撮影所などへも足を運んでいたかも知れない。

紆余曲折を経てもうすでに人生の半ばに達してしまつた。後半の人生を豊かにするために常に自らへの進路指導も怠らないでいる。私の好きなことは常に人と接していること、出来たら大勢の人がよい。それから書くこと、考えること、笑うことである。テーマで言えば、食べること、体と精神の関係、服装のこと、色彩、もちろん女と男の関係も。

今の教職を投げすてすぐ映画女優、ファッションデザイナー

## 男女平等、茶の間に進出

中嶋里美

—というわけにはいかないので、少しずつ移行措置を取りたいと思つてゐる。先ず、書くことにはもう少し時間を費したい。何年かに一冊くらいは本を出してもみたい。そしてもう一つは笑いと男女平等のテーマを結びつけてみたいのである。

実は私は、長年どうしたら、男女平等の問題が日常生活の中に浸透していくかを考えつづけてきた。本を書く、新聞に投書する、集会をひらく、読書会をする、テレビ・ラジオで取上げる、デモをする、合宿を行う、講演会をする、映画・演劇にする等々。これら一通りのことにはすべてかかわつてきた。しかし何故か、もう一つ根が張れない感覚を持っていた。どうしたら根が張れるか。

ある夜のテレビ番組がヒントを与えてくれた。それは東北地方から中継されている「お笑い番組」であつた。舞台では二人の漫才師が熱演中、「……むこうから、こちらの目がつぶれそうなドブスがやってきて、私に話しかけるんですね。ちよつとお兄さん……」カメラは観客席を写す。日焼けし深いしわを刻んだ中年の女の人の顔が笑う。きびしい労働の合間をぬって聞きにきている彼女たちが女をさげすむ言葉で笑わざるをえない現実。これが今なのだ。お客は大方女たちだつた。お笑い番組なら茶の間へも進出できる。誰にでもわかるように笑いと風刺にさびをきかせて男女平等をテーマにするのだ。落語にしてもいい。男の漫才師より女の方がもっと質の高いものを提供できるかもしれない。

私と錦さんはすでに五つの脚本を書き、「行動を起こす会」の合宿で初演した。この次は秋の文化祭で。

どんな集会にもかけつけますので御一報を。読者の皆様もぜひ挑戦を！

# シネマ



## 「フットルース・オブ・ストリート・ファイアー」

遠藤 由紀 (カットも)

映画を見に行くとき、ある程度客層を予想して行く。つまり女の子が多いか男の子が多いか、おじさんが多いかおばさんが多いか、アベックが多いかである。

映画館があまり男ばかりだとこわいので、そういうお客をよびそうな映画には一人で行かずに友達をさそう。オールナイトもやはり勇気がないので友達をさそう。

けれど最近では予想のはずれることが多く、どんな映画に行っても女の子が多い。アクション映画特集であったオールナイトにも、女の子が半数以上いてうれしい驚きだった。

さて、今回は「フットルース」と「ストリート・オブ・ファイアー」を見に行った。両方とも今はやりのプロモーション・ビデオの

影響をうけているとかいう音楽映画で、音楽は映画の公開前からかなりはやっていた。

「フットルース」は音楽もダンスも禁止されているアメリカの田舎の高校に転校してきた男子高校生が、そこでダンスパーティを開こうと努力する映画で、「ストリート・オブ・ファイアー」はアイドルのロック歌手が突然舞台から悪者につれさられ、昔の恋人であるヒーローがうばい返すという映画である。

観客予想としては、「フットルース」「ネアカ、単純、ガールフレンド付」少年か、キャピキャピ女子高生三人連れ、「ストリート・オブ・ファイアー」―「ネクラ、メガネ、うっ屈した青春のエネルギー」少年と想定したので、友達をさそった。これは予想に反することなくだいたいそんな感じの客席だった。「フットルース」は優等生少年が主人公で、「ストリート・オブ・ファイアー」は不良青年が主人公という違いはあっても、二作とも青春映画であり、話の先が見えるパターン化されたストーリーという点では同じである。

「ストリート・オブ・ファイアー」の監督が、「観客に新しい発見を与えようとする映画より、忘れ去っていたことを思い出させる

映画を」と言っているが、まことにその通りで両作品共に「いつかどこかで見た感じ」。

男の子が主人公だと、今までさんざん語りつくされているので、新しい発見は望めないのかもしれない。

観客のネクラ少年もネアカ少年もきまりきったストーリーの中に青春を再確認するのがいいのかもしれない。

私はステレオ・タイプのお話に、ものたりなさを感じたけれど、男の子たちはそれでいいのかもしれないし、作り手側もそのような男の子に見てほしかったのかもしれない。

だから素材はワンパターンになるのだからうけれど、やはり観客に少女がいることも頭にいられて映画を作ってほしい。せめて事前に女の子が半数ぐらいいるのではないかと予想できる映画を作ってほしい。

いわゆる女性映画ではない。

女の子の青春映画だ。去年大ヒットした「フラッシュ・ダンス」は、若い女の子の青春映画で、女の子を動員したことがヒットの原因だという。

中学生や高校生の女の子たちがワクワクしながら自分の青春に希望をもてるような、そんな映画がもっとできればいいのと思う。



今年の夏の暑さといったら！ 毎日ギラギラで、もううんざりでした。一九四五年八月もこんなだったのでしょうか？

所は変わって、東ドイツの都市ドレスデン。一九四五年二月十三日から十四日にかけて、この美しい町は連合軍の空襲をうけ、完全に破壊し尽くされます。二十五万人もの死者を出したという物凄い空襲です。

ヨーロッパ戦線は、戦場となった国々に加えて、米ソ両軍が絡み、実に複雑な様相を呈していました。このドレスデン破壊が、戦争の早期終結のきっかけとなったといえます。いわば、ヨーロッパのヒロシマ。

フランスのベストセラー小説『野性の女よ、さようなら』は、ノンフィクションさな



ほん

## 『野性の女よ、さようなら』

小田亜佐子

がら、いやそれ以上の力で戦争という怪物の姿を描き出しています。

ドレスデンに住む少女ヨハンナは仲よしの友達ヘラとともに、川の向こうの曲馬場にかーニヴァルを見に行きます。出し物が最高潮に達した夜十時前、突然不気味な空襲警報サイレンの音。爆撃が遠のいて、避難した地下室から外へ出た二人が見たのは、川の反対側、旧市街の上をおおう炎のカーテンと煙の巨大な経帷子。

母レニと姉グレーテのいる家に帰らなければ！ ヨハンナとヘラは大人の制止をふり切って向こう岸へ、燃えさかる町の真中へと飛び出していきます。

結局ヨハンナは、記憶喪失となった母レニを助け、二人でブラハの知人を頼って逃避行を始めます。が、二人の行手には恐しい出来事が……。

避難先の山荘で、ヨハンナは今まで知らなかったこと、「収容所とかユダヤ人とか、そういうことの自業自得として爆撃されたこと、ドイツ人はチェコでも、ポーランドでも、ロシアでも、フランスでもひどいことをしてきたために復讐されたこと」を初めて聞かされます。

そして、ブラハで、その時はもう敗けていたために、ドイツ人狩に巻きこまれるという形で、再び復讐に遭い、不幸の波にもみくちゃにされてしまうのです。

ドイツ人対チェコ人・フランス人・ロシア人の戦争をめぐる憎悪の世界。片や、母レニに尽くすヨハンナ、二人を助けてくれた合唱隊長の優しさ、ヨハンナの初恋という愛の世界。両者の対照がこの小説のテーマである、と本の帯にはあるのですが。

戦争は恐怖と悲慘、不幸のオンパレード、まっぴら御免であることに違いありません。ところが、平和な時代に生れ育った世代（例えば私など）は、ライフ・ヒストリーをもてず、したがって平和の喜びや、人間の生とは何かを感じることが難しい、という説があるのです。つまり、この本のいう「愛の世界」も、平和な時代の世代は自ら経験することが困難だろう、平和も又不幸なり、と。

そうなのかもしれません。飢えを全く知らない分、生のエネルギーに欠ける。でも、小説は充分面白かったです。

クローンジュ『野性の女よ、さようなら』読売新聞社、一九〇〇円

# こんにちは！男女で学ぶ家庭科

石川 由紀

調理実習が始まっている家庭科室へそっと入室。(エーと、中島先生はどこかしら) 見上げるばかりの男子生徒の中に可愛い御姿を発見。先生も小さく見えますが、調理台も低く見えます。一グループの男女比は四対二、大きな男子生徒が目について五対一じゃないかと思うほどの風景です。グループによって作っているものが少々異なってますけど、どうやら今日は中華風の献立三品のもよう。でも組合せは自由なのかしらと思っ

ていたら、ちゃんと黒板には主題の三品が書いてありました。このことを先生にお尋ねすると、「実習目的がつかめていたら材料の選択や献立のバリエーションは気にしない」そうです。先生のこの寛容さが、生徒の支持する共修家庭科を十年も続けさせた一因ではと感じました。

冷し中華ソバの麺をゆでている男子は片手で作業、自信のありそうな女子が薄焼卵を焼いています。

隣の台では腰をかがめて真剣な目付きで男子が焼いています。炒め物用の箸を丁寧に切っている男子の横で、牛乳豆腐用らしいサイダー羹を流し込んでいる女子、団子をまるめる男子。手際の良さは女子が上ですが、これは多分家庭での経験差、刻み上がったキュウリの細さに差はありませんでした。

五十分授業も終わりに近づいて初めて中島先生の大きな声、「盛付けしてますか。さあ空いた物から片づけて」。昼休みとつなげての実習でした。台から台へ話しかけて歩いていた私も御相伴にあずかり、幾種もの皿が並び、デザートだけでも三種も頂戴しました。

このバリエーションの豊かさは先生の御指導ばかりでなく、男女混成チームだからこそと思うのは私の偏見でしょうか。

なぜこの須坂高校を訪問したかったのかといいますが、ほとんどが進学希望、その上男子が圧倒的多数のこの高校で、男女共修家庭科一般がもう十年目。しかも文系二単位、理系一単位だったのが今年から理系も二単位に増えたと聞いたからです。その背景の一つに卒業後全員が親元を離れ、文字通り巣立ちます。ですから学習の主人公も、親も、教師も、男女必修の家庭科に対して共通の認識が

あるのでしょうか。授業内容も実社会に向けた組立てのようにお見受けしました。そのことはアンケートに次のような形で現れています。

導入三年目の調査で共学の必要がある90%、実施学年は三年次がよい55%、理由は上級生になった方が社会・家庭の関心が強いから。受験で焦っているのに家庭科は心が落ち着くから。学んでもまもなく実生活に生かせるから。自炊生活にすぐ役立つから。精神的に最も大人になっているから。

今年度行った卒業生への調査でも、ほぼ全員が男女共学必修が必要と答え、もちろんその親たちも「やってもらってよかった」という声だったそうです。

今日逢った三年生たちも来春は親元を離れ、それぞれの生活の中で、中島先生の授業を思い出すのでしょう。頑張ってください。

(長野県立須坂高等学校を訪ねて)



◆集会―「進むも止まるもあなたらしい」―

共修と平等法は車の両輪

・日時 10月20日(土) p m 6時

・所 勤労福祉会館(中央区八丁堀)

・内容 “キャンパスの共修運動” 松原慶子

“家庭の中の平等法” 遠藤和枝 “働くこと

って、こんなに素敵!” 桜井陽子 “家庭科

共修・政治の舞台裏”

樋口恵子(予定) その他に、“私も言

いたい・聞きたい” “ワ

インパーティ”等。

ほんとうに女たちの

望んでいるかたちで

性差別撤廃条約を批

准させたいの思い

をこめて。

・問合せ先 国際婦

人年をきつかけとして行動を起こす女たち

の会(東京都新宿区荒木町23中沢ビル) 3

F ☎03-357-9565)

◆教育デイスカッション(パートⅡ)―「い

ま、教育を考える」

・日時・内容 10月28日 “ここまできている

学校の管理化” 11月25日 “何でも言おう

情報のべいじ

! 父母から教師へ、教師から父母へ”

12月16日 “子供たちはなぜ荒れるのか”

1月27日 “自立した人間関係をつくるため

に―地域で、家庭で、学校で・実践①性教

育と女子教育を通じて” 2月24日 “同・

実践②家庭科の男女共修を通じて”

パートⅠでは、明治から現在までの教育

の流れをたどり、世界情勢の中で、国の動

向の基に教育が支配されたことを学んでき

た。パートⅡでは各現場での具体的な実践

報告を通して、デイスカッションで内容を

積み上げていく。(助言者 田中裕一)

・所 婦人会館(熊本市白川公園となり)

・主催 熊本の女達の輪を広げる会

・問合せ先 熊本市新大江3の4の17 すど

う方 ☎096-383-4136

◆冊子―「都電往来」

・内容 都内で唯一の都電「荒川線」と人々

の生活の拠りどころを求めて、自主グルー

プ「社会教育を考える会」の会員が目と足

で確めた学習レポート。沿線案内、暮ら

しとのつながり、都電の歴史など。

・一部六百五十円(B5判、百ページ 下別)

・申込先 樋口敏子(東京都豊島区千早町3

の39 ☎03-955-1702)

◆公開自主講座―放送大学の真の狙いを見抜

く

・日時 10月29日(月) p m 6時30分〜9時

・所 東京大学(本郷)工学部8号館82番教室

・内容 “生涯教育政策の意図するものは”

池田祥子(東京文化短期大学教員)

・問合せ先 “大学論” 実行委員会(文京区向

丘1の3の7 ☎03-814-1877夜)

◆公開講座―臨教審を問う

・日時 11月12日(月) p m 6時30分

・所 上智大学3号館三二一番教室

・内容 “教育の現場は臨教審に反撃しうる

か”―戦後の教育統制を軸に―武藤啓司

(大田区都南小学校教員)

・参加費 五百円

・問合せ先 上智大学カリキュラム委員会

(☎03-238-3883昼) “大学論” 実行委員会

(☎03-814-1877夜)

◆映画―「海盜り―下北半島・浜間根」再上映

・日・所 11月9日(金) 25日(日) 鈴なり壱番

館(下北沢 ☎03-460-8610)

・内容 本誌84年6月号参照

・前売千二百円・当日千五百円、中・高校生

八百円(当日のみ)

・連絡先 青林舎 ☎03-504-1706

丸橋 賢著

『癒しの思想』

柏樹社刊 価一、八〇〇円

歯科医療の第一線に立ち、「良い歯の会」活動にも取り組む丸橋氏は、「病んだ口腔をのぞくと、私の目には病んだ世界が重なって見える。病むいのちを癒すこと、それは、病む社会・病む自然をそっくり癒すことである」という。食生活、思考方法―現代の生活様式・構造そのものに深い病根があることを指摘し、「癒しの思想」の確立を提唱する。

「癒しの思想」は、どのようにして丸橋氏の中に芽生えたのだろう。その秘密は、第1章に描かれる、いのちあふれる野山の情景にある。

小学校入学の日―「山村にも遅い春が訪れ、土手には白や黄色のペンペン草が可憐にほころび始める。……漸く解けた畑や土手の土は水を含んで黒く、温もりのある土の匂い

が漂っていた。……それらの土の色や匂い、芽や花の姿や色、それらの全てが私から離れないひとつの原イメージとなって焼きついている。それはいのちの活動の開始の時であったのである。私は道を走り、土手にかけ上りながら、小学校へ向った。まだ桜の蕾はかたかった。

そして、その名も優しい温川ぬかがわに群れる美しい魚たち……。

化粧した若い女性の腐った口の中を診る時、この自然がダブる。口腔の病を克服することと、病んだ社会、病んだ自然を克服することは、丸橋氏にとってピタリ、一つのものなのである。

向井 承子著

『たたかいはいのち果てる日まで』

新潮社刊 価一、三〇〇円

「極めて少数のほんものの医者の一」と、かつての同僚に語らせた中新井邦夫氏。全人

間で患者を受け入れ、理解するところから医療を出発させた中新井邦夫氏。いま、東大阪市長栄寺の街角に、石地藏となって立っている中新井邦夫氏。地域社会に密着した身体障害者のための治療・矯正センター建設に情熱を注ぎ、弁慶のように素手で立ち向かい、ついにガンのためにいのち果てた中新井邦夫氏。

向井さんは、彼の死後、彼と出会い、彼にとらえられてしまった。綿密な取材の過程で、幾度もドン・キホーテを連想したという。「美談の人」ともいう。美談を滑稽とすら捉えがちな風潮の中で、美談に背を向ける世も淋しく、美談をあてこんで安逸をむさぼる世には、余計に戦慄を覚えつつ、彼は「期せずして美談を生きたことになった」ともいう。

中新井邦夫のすさまじい生を原稿用紙に再現している時、向井さん自身もまた、同じ病ではないかとの疑いを持たされていた。そのことを知っている私は、「命を賭しても自らの信じる美を貫こうとした彼自身の美学」との向井さんの中新井邦夫観に打たれた。この言葉は、この本を世に送り出そうとする向井

さん自身でもあった。その烈々たる気魄が、この本からゆらめき立つ。

全国の進行性筋ジストロフィー症者

『新・車椅子の青春』

ありのまま舎刊 価一、〇〇〇円

〒二五〇円

筋ジスよ／私はお前を許していない／お前のお蔭で／多くの人々の温かい心を得られたことは／認めてやろうと思っただけで／私からきらめきの青春を奪い／私に車椅子の青春を歩ませているのは／お前の仕業だから

筋ジスよ、筋ジスよ／私はお前を許していない／私はお前を許していない

筋ジス患者であった二人の兄を亡くし、自らも病む山田富也氏の呼びかけで、全国から千編にも及ぶ詩が集まった。徐々に萎えていく指先にペンを握り、生の証しとして詩を書く筋ジスを病む人たち。その中から百編を選んでまとめたものだが、最優秀賞を得た右の詩の作者は、選ばれた二日前に亡くなっていたという。「これが私達の現実である」。この重い言葉を前にして、私は何を書くことがで

きようか。

だが、最後に残った指に力をこめて詩を書き続ける患者は少なくなりつつあるのだそう。な。「病氣を受け入れ、置かれた状況を受け入れ、その瞬間瞬間を楽しく生きられればという諦念にも似た、ある種利他的な生き方が増えて来つつあるようにも思える」、と山田さんは記している。自在にコントロールできる電動車椅子、リモコンテレビなど、闘病生活も随分変わった。でも、何といっても、患者が本心に願っているのは、家族と共に生活し、友人と常に自由に触れ合える生活だ、と。(発行先・宮城県七ヶ浜町松ヶ浜字西沢田七九一三、Tel 022357・3178)

先天性四肢障害児父母の会編

『ぼくの手、おちゃわんタイプや』

三省堂刊 価八〇〇円

先天性四肢障害児の多くは、二歳から三歳ごろ、自分の手や足がまわりの人たちとちよつとちがうことに気づく。

お母さん、わたしの指、どうしてないの？  
ごはんとくさんたべれば、足、はえてく

る？

この子どもたちのかかえている様々な問題について、一緒に考えようよ、というところから生まれた本。

福祉について学び、できれば一生の仕事にしたいと願っている下の娘が読んで、「この子たちにとって、親たちが、きちんと問題をとらえて、こういう本を作ってくれたことは、すごい励ましになると思う」と言う。

一方、84年春の「生命科学と人間」国際会議で基調講演に立った桑原武夫京大名誉教授は、「重篤な遺伝病を持つ胎児の出産は慎重にすべきだ、という医師の勧告を妊婦が拒否することは、個人の自由といえるでしょうか」と問題提起したという。危い、危い。これが今日の「いのち」をめぐる状況だ。

「先天異常の子どもと出会い、そこから理解が生まれ、共感が芽ばえ、共感が確かなものになった時、初めて、障害をもつ者、持たない者が同じ時代を共に生きる者同志として、対等に向きあえるのではないか」。

著者の一人であり、先天性四肢障害児父母の会会長である野辺明子氏の言葉だ。中・高校生にぜひ読んでもらいたい受精のメカニズムを学ぶ本でもある。



## 「病む」ということ

半田 たつ子

心待ちにしていた「木犀の香」を、一昨日初めて「聴いた」。「独り慎シムとは」と尋ねられたある高僧が「木犀の香をお聴きかか。すれば、それがその、独り慎シムじやて」と答えた——木犀の香を聴くと、必ずこの話を思う。木犀の香はまた、病床にあつて自分をみつめていたころの透明感を呼び起こす。

十七歳、二十二歳。青春のただ中に二回も療養生活を送った私。ものを想う習慣は、この日々になされた。病んだ日の思い出から、辛さ・苦しさ・耐え難さが薄れ、自己観照の時としてこの懐しさのみ募る。

東京から、福井県小浜へ、金津へ。再び東京へ。大切に抱えてきた敗戦前後を刻む日記帳、薄い鉛筆書きの頁は、もう読み取り難くなっているけれど、空襲下に病んだ十七歳がそこには息づいている。

〈三月十日——今晚二時半過ぎまでの大夜間空襲は実にすさまじい限りであった。雨あられの如く降る焼夷弾。北方に起こった火災は折からの熱風にあふられて天を焦す、火の粉は舞ふ。そこをB29は悠々と、その姿を鮮やかにうつし出しつつ飛ぶではないか。(略) 今日も学校を休んだ。熱は九度五分に上り、非常に苦しんだ。……〉

〈三月十一日——朝のうち八度五分であったが、とうとう夜は四〇度まで熱が上がってしまった。中耳炎ではないか、チブスではないかと、さんざん母に御心配をおかけし、何といふ親不孝……〉  
発病は三月九日だったが、空襲下、医師の往診もままならず、三月十五日にやっと診察を受け、〈肺門浸潤とかいふことであつた〉と記している。

〈三月二十二日——とうとう硫黄島は敵手に渡った。度々新聞紙上で報道された壮烈無比、全く大和魂の権化たる幾多の勇士が、弾丸尽き、うらみを呑んで、皇国の将来を懸念して突撃されたことを思ひ、ただただ銃後の務め至らざるをおわび申し上げる他はない。

『小さき花、聖女テレジア』の自叙伝を読む。ひたすらに天主のみむねにかなふやうと幼き頃よりそのみを思ひつつけて精進した聖女の語る自らの生活は、私の胸を打った。今病床にある身としても、出来得る限りの修養をつんで行かうと思ふ……〉

〈三月三十一日——「マーチ」「三月」「弥生」。聞くからに楽しげな、愛らしい桃の花を髣髴させる月である。(略)「お暖かになりましたね」と交はす挨拶に、なんと喜びが籠っている事であらうか。ほっとした思ひで目を上げると、匂ひで咲くといふ梅の真盛りである。庭の蔬菜もぐんぐんと勢いづいて、大きく育つのが目に見える。桜の蕾も大きくふくらみ、おや、山吹も咲いている。

「チューリップが出たわよ。それ、ここにも、ここにも」「牡丹は今年幾つ咲くかしら、一つ二つ……」

「春」という嬉しさを胸に潜めて、春らしいもののあれこれを見付けては、喜びの声をあげる。とりわけ、今年は学校をお休みして呑気にしている為に、春の喜びをひしひしと感ずる。うぐひすの歌も

上手になった。うぐひすは、毎日の如く鳴りひびくサイレンを、なんと不気味に思っていることであらうか。……

そして、同じ日へ今朝の新聞は、沖縄本島への砲撃、日に七千発と報ずる」とも記している。

稚拙な和歌もある。

へ五月一日——待ち待ちて、今日開きにし牡丹には、心して吹け、はげしき風よ／（集団疎開した）妹の たより四通も 来る朝やさしき笑みに 一日始まる／妹の たより来 牡丹の花開く 今日嬉しき日にてありけり

へ五月二日——吹き荒れし 風のいずこに消へしやら 今日すがすがし 露含む庭／朝露に ぬれし牡丹は ほほえみつ 風に静かに かしら振るなり／朝風に 仄かな香り のりて来ぬ 見上ぐれば藤 ほころびており／この池は さつきの王よ 鯉泳ぎ 藤波立ちて 牡丹も咲きぬ

へ五月二十四日——とうとう番が来た。焰々と燃え上がる火は、あちらにもこちらにも。敵機の来襲とともに、お稻荷様の方へシウルシウルと頭上をかすめる爆弾。上る轟音。瞬間、天を圧してもくもくと火が上がる。ああ、黒煙だ黒煙だ。（略）

焼夷弾は空中にて炸裂、火の塊となって落ちる。落ちては又はね上る。やがてその一つは我家の小路へ。うぬ、という気持をただ右足にこめて踏む。ぼうつと足が熱くなって、ズボンに火が移ったかに見え、ぬるりとした感じを受ける。油脂（爆弾）だ！

続いて足を踏みつける母に、危い！、と叫ぶと、母はそばの砂が詰められた木箱を叩きつける。箱のわきからチヨロチヨロ舌を出す火に、足先で土をけてかける。有難い、消えた。（略）

いつか赤い空に、水色の暁のきざしが現れて、まだ燃えさかる火を見つても、空襲警報の解除を聞いた。時は四時、一時半より二時間半の戦闘であった。……

さすがに翌日の日誌は、〈今日は体がだるく、食欲がなくて仕方がない〉の一行だけ。

主治医が罹災し、薬ももらえない。その上父が胃潰瘍で日本赤十字に入院、大病院も空襲で機能を失う。母は必死で買出し、父と私の食糧を確保してくれた。知人から届く干魚・卵、庭の野菜で栄養を補うほかは、じつと安静にしているだけの療養生活であった。

へ六月三十日——六月を終る。嘆息をつく——ああ、ああ。今日はたまたまなく学校に行きたい。明日から行くつもりであったのに、と思うせいであらうか。……

へ七月五日——昨日、一寸働いた為か、又七度八分も熱が出てしまった。いよいよ休学を決心する。（略）繰返し『狭き門』を読む。病んだ日々、むしろ親しんできた私。だが小坂富美子『病人哀史』（勁草書房）を開いて愕然、慄然。わが国の医療の変遷を病人の側からたどり、人権意識の低さが、病人をいかに差別し、悲惨な状況に突き落としたか、その克明な記録に衝撃を受けた。私もまさに「Ⅷ 戦争中の病人 (4) B29空襲下の病人・ケガ人」の中の一人なのに、この悠長な日記はどうしたことかとうろたえた。

時代を等しく共有しながら、病人に等しからざる処遇が厳然とあった昔。ようやく病人の人権が尊重されるようになり、福祉制度の発達、確かに病人を救った今。だが、日進月歩の医療技術は、時に人間性を踏みにじり、気ぜわしい時代・環境が病人を疎外する。病む人がゆつたりできる状況こそ、昔も今も最高の治療法なのだ。



### 〈We兵庫の会〉

◆七月二十八日、神戸市勤労会館で。参加者二名、うち初めての方一〇人。二組のご夫婦の参加も叶えられました。読売新聞の清野さんは突然の用事で参加できなくなり、国会の労働委員会の議事録（江田氏質問）のコピー等を届けて下さいました。貴重な資料ありがとうございます。輪は確実に広がっていると胸が熱くなりました。

まず「今、私が一番考えていること」ということで自己紹介、いつも時間不足なので、今回は始まりを三〇分繰りあげ、話し合いに十分時間をかけました。メインテーマは「性別役割分担を考える、男の家事労働について——こんなかたちもある」です。

まず、井原さん、乾寿・早百合さん、東海寺・黒住さんの場合などをうかがいました。

ここが問題！では、地域の婦人運動をしていく中でも小さい子どもが親の犠牲になっているのではないか。家庭と運動の両立で

女の人の悩みはつきない・女が働くとき子どもへのすまなさ意識は？・男の仕事をするとうらえるか？・女の人の耐えることを美德としてきた考え方は？・モータリゼーション時代の人にも意識革命させるには？・家事労働はこれから共同化していくことが必要。そして週末を楽しむ家事というものを考えてもいいのでは……？・女の人が経済的に拠点を持ち得ていない。仕事と生活をドッキングさせることは新しい生き方だけど大企業にまきこまれない女の経済的拠点をつくらなくては……など、など。

家庭科については、校内に家庭科をPRすることに努めている。実感として、若い男の先生たちが家庭科の大切さをわかってきた

・家庭科の先生は他の先生とちょっと話をしてほしい。私の高校時代、準備室にいつもいて独得の雰囲気があり不満を感じていた。また生徒がこんな授業をしてほしいといっても勇敢にとり組む姿勢がなかった、などなど。

町田さんがPR中のごませんべいをかじりながらの話し合い。家庭科の教師も悩み、懸命に努力しているのだけだかつての生徒からの声はきびしい。四時間がアツという間に過ぎました。

（入江一恵）

### 〈We石川の会〉

◆八月二十一日、七尾市で、半田さんをお迎えしてWeの会を開きました。参加人数三九名。二時間半の活発で充実した会でした。

まず初めに石川女性懇話会の三石さんが、懇話会からの挨拶を兼ねWeの会について話しました。次に、参加者全員に自己紹介を兼ね、Weとのかかわりなどを話してもらいました。小・中学校の教師の方が四三%。Weは知っているが、熱心な読者ではないという方も……。次に半田さんに自己紹介を兼ねて、Weと共に歩いてWeを話していただきました。半田さんはまず、Weとのかかわりの深い石川の寺島さん、古田さん、三石さんなどの功績を具体的に話され、その後Weに至る道筋を簡潔に、最後にこれからのWeの問題点にまで言及されました。その後「半田さんの話を聞いて、Weを読んだ感想」と題し質疑応答に入りました。質問も活発に出されました。なぜ新しい家庭科なのか。なぜ夫婦の性差を越えた関係が晩年になるのか。半田さんは「小刻みな葛藤があって」と言われたが、波風を立てずに、姑との関係、子供との関係をうまくやっていけないものか。自分は女だから許



してもらえんと思ってる所がある、それを出して活動していいものか等々。

多くの質問に対し半田さんが明快に、次々と応答されていく様は、小気味いいくらいでした。最後に懇話会の木下さんがWeを広め「手をつないで頑張ろう!!」と結び、会を終わりました。その後、有志で二次会との盛り上がりようでした。この陰には、1、参加者の方々がWeをあるいは『人間って不思議』をあらかじめ読まれていた事。多少とも問題意識のある方々であった事。2、主催者の綿密な計画と協力（手作りお菓子、岩清水コーヒーなど）。3、司会の高瀬さんの手際良さがあった事。そして何よりも4、半田さんの人間的暖かさがこの会を成功させたのだ、ということを書き、We石川の会の報告といたします。

(宇野佳子)

### 〈We岐阜会の会〉

八月二十五日・二十六日は、半田さんをお迎えして、なつかしさ一杯の二日間でした。しみじみと心の奥深くしみ込むような半田さんのお話は、いつもながら参加者の強い共感を呼びました。

・つづいての話し合いでは——子供のゆがみ

は幼稚園の中から始まっている。子供の問題を簡単に親の責任だけにしないで、小・中・高の教室がどうなっているか、裸で話し合ってほしい。良心的な先生まで過剰管理に慣れっこになっている。ものが見えない。効率主義の危険性。「あいさつ運動」等、押しつけ道德教育の弊害。生徒監視用のテレビカメラが廊下に取りつけてある中学の話。反面、障害児をまじえての活気ある学級作りの話など。

・読後感では——斉藤次郎さんの「バランス主義」。今も気に懸る。一見良識的に見えるバランス傾向のために、問題の焦点がぼかされて議論にならない。岡百合子さんの巻頭言、大仏レアさんの赤い羽根の記事など心をゆさぶられた。半田さんのお話もWeの冊子も、普通ならば素通りしてしまいがちな物事を「あつ」と気づかせて立ち止まらせてくださる。大ざっぱすぎる世の中だけに、そういった感性を今後もぜひ失わないでほしい。

・Weでぜひ——戦後教育すべてを否定する風潮の中で、どこからどう間違ったのかを。もし、三十代の親に欠陥があるのなら、その原罪は？ 画一的な教育の打破といわれるが、その中身、手だてにずれはないか。ねらいは

？ 分別ができるようになったらもう体験できない青少年女性の「あこがれ」のようなもの。そういうナイーヴな感性や、ぎりぎりの体験を持たないで大人になる不安などを。

最後に「家庭科共修と、男女の雇用平等の問題は車の両輪です」「もつと怒らなければ」「あなたの言葉であなたの手で関係機関に葉書を」との半田さんのお言葉が強く心に残りました。

今まで岐阜では、「なずな学園」の尾藤先生のお骨折りで、年に一度会合を持っておりますが、「私たちの手で定期的に読者会を」との読者からの提案に全員賛成。これからが楽しみです。気張らないでやっていきたいと思っています。継続は力ですから——。

(金井多賀子)

### 〈Weの会カレンダー〉

- |       |                         |             |
|-------|-------------------------|-------------|
| 9・27  | 船橋／29                   | 江東、愛知       |
| 10・28 | 兵庫                      |             |
| 11・11 | 武蔵野                     | 御殿山C・C 一時半  |
|       | (連絡先・山田則子 0422-51-9461) |             |
| 17    | 城北                      | 北区十条出張所 二時半 |
|       | (連絡先・蔡 和美 03-506-5839)  |             |
| 18    | 大阪豊中市福祉会館               | 一時半         |



◆朝日新聞「青鉛筆」(6・15)を読んで驚きました。コミック誌の車内つり広告に女性の胸をハシでつまむ写真があり、それに「チチも愛読、ハシからハシまで、大人のコミック」と書かれているのに対して「国際婦人年をきつかけとして行動を起こす女たちの会」が抗議したことが書いてあります。

▽女性の豊かな胸をハシでつまむ―講談社発行のコミック誌の車内つり広告―写真―に、出勤途中、ニヤツとした男性もいるだろう。が、これに(略)「行動を起こす女たちの会」が猛然とかみついた。

▽同会事務局の山田満枝さん(三六)は「女をモノとして扱っている。(略)」とカンカン。抗議に訪れた女性たちのけんまくに、初めは「差別なんてとんでもない」と抵抗していた講談社側も、最後には「いわれてみれば不快感を与えたかも」と反省の弁。

▽実は次の号も女性のヒップの大写真だったため、印刷寸前ながら、急いでボツに。今後は女性の声を配慮することで一件落着いたが、同誌の男性たちは「女性の扱いはむずかしい」というものです。なんというひどい書き方。私はすぐ朝日新聞社に電話したのです。

▼モシモシ青鉛筆を書いた人にお願いたいのですが

。ハイ! 社会部です。青鉛筆ですか、今は出られません。

▼それでは書いた人に質問したいのですが、伝えていただけますか?

。ハイなんでしょう

▼あなたのお名前はなんとおっしゃいますか

。タケウチです

▼では、あの記事の中にニヤツとした男性もいるだろう、と書いてあるのですが、ニヤツとした男性をホントに見たのか。それともニヤツとしただろうと想像して書いたのか。また書いた人はどうだったのか聞きたいのですが

。言ったら、そのタケウチという人、笑ったのですよ。それで

▼あなたも笑っていますね

。そうしたら、

。そんな議論はダレかとやってくれ!

ガチャーン、だったのです。びっくりしました。でも、ここでひるんではいけないと、こりずにもう一度ダイヤル! 今度は少し落ちついていそうな男。名前は言いません。さっきと同じ質問。

。本人でないからわかりません

▼では、「かみついた」とあります

すが、本当にかみつかれたのですか

。かみつくわけではないでしょう。比喩ですよ。こんな比喩はどこにだって、たくさんあるでしょう

▼そんなことぐらい私だってわかっています。かみつかれてケガでもしたのかなんて思っているわけではありません。でも、女がものを言うとき、かみついたとか、まるでものを言った方が悪いみたいじゃないですか。同じようにカンカンとか、けんまくとかも、すぐ使うけど、あなただって女だったら、差別されたり馬鹿にされたらおこるでしょう

。いやー、おこるかもしれないけど、女になったことないからわかりませんね

▼男はこんなものだなんて馬鹿にされたらどうなのですか

。私は男を代表しているわけではないので、なんとも言えませんが、奥さんは「行動を起こす

会」の人ですか？

▼「いいえ違います。ただの女です。でも奥さんなどと言わないで下さい」

。「行動を起こす会」の人ではないなら返事はできません

▼では人は何かに所属していないければものを言えないのですか

。いやそういうわけではありませんが、人にはいろんな考え方があるわけですから、それにいちいち返事はできないということです。奥さんの考えは一億分の一なのだから

▼一億分の一でしょうけど、「…：会」以外の女だっておかしいと思っただけですよ。それに奥さん奥さんと言わないで下さい。私は人の妻として存在しているわけではありませんから！（略）それに女性の扱いはむしろかしいなどと軽々と書いています。これも講談社の人が言ったのですか、それとも書いた人がそう思ったのですか

。その場にいないのでわかりません

▼青鉛筆の筆者に伝えて下さい。

こんな差別的な書き方をしないように。それにタケウチさんの

電話の態度はなんですか。朝日新聞社には質問もできないのですか？（略）何か言うときすぐやれ「…：会」の女かなんて言う

けど、「会」の人でなくともおかしいと思っただけの女がたくさんいるのですよ。そのただの女が、勇気を出して言っているのです。あんまりおかしいから。これからは、よく考えて書いて下さい。（横浜・青山楨子）

◆保守王国石川県、松任市の町のはずれで、家庭教育というテーマで半田たつ子さんにお話をいただきました。

これには次のようないきさつがあります。

公民館で青少年健全育成協議会の話し合いの時、おやじの権威がなくなつたから子供たちの非行が

多くなつた、という男性の発言がありました。私は、驚いて、男性の権威があれば非行がなくなるといふのならば権威を持つて下さいと言つたのです。

男性の権威とは何かも問わず、子供の非行とは何かも考えず、戦後、靴下と女性が強くなつたから

…男もだらしなくなつたから、という妙な思い込みがあり、講演者はいつも男性、女性の講演を男性も女性と一緒に聞くという講演会は一度もなかったのです。ですから、男性も女性も共に聞く講演も考えてほしい、と切望したので

す。ちょうど、Weの会に半田さんがこられるので、チャンスと思い、講演会をともちかけたのです。

公民館の人々は講師は何者なのか、ウーマンリブの肩いからした女性ではないか、革新ではないかとおびえ、一方では人が集まらないのではないかとビクビクしながら、その日を迎えたようです。

田舎の人々も、今何を考え、ど

う生きたらよいのか、子供たちをどう育ていけばよいのかから住んで、何とかしなければと思つても、自分自身の力不足に、地だんだを踏むばかりなのです。

ところが当日、今までにない多くの人々が集まりました。百人も集まるということは、かつてなかったのです。いつもとはうってかわつて女性の講演を男性女性共に聞き、しかも四十代の、子供をもつ男性が半数近くいたのです。

次の日すぐに、「子供の見聞くんだったな」とその晩から父ちゃんと言ひのよ、「家へ帰つて、娘に話したら、「ツツパリの友達は一人では何もできないし、しない。気が優しいのよ」と言い、一晩中話しあった」などの電話がかかりました。そして、松任文化会館で、もつともつと多くの人々に聞かせて下さればよかったのと言われました。

（石川・三石久江）

情報1 江田五月氏、またまた大ヒット！

七月二十五日衆院文教委での江田氏の質問。文部省は、高石小中局長が社会教育局長の時、「明日の親のための学級」を始めているが、それはどういう意図かに対し、高石局長は、婦人学級・家庭教育学級はどうしても女親中心に考えがちだが「明日の……」は、妊娠期の男女を対象に教育の機会を与える発想だ、と答弁。

江田氏は、妊娠期では遅い。「もっと小さい時から、家庭とは一体何だ、家庭の責任を男女ともに果たしていく、そういう家庭責任感覚とか生活感覚とかというものを教えていく、新しいタイプの社会人を育てていく、これが今非常に必要。学校教育も考え直さなければならぬところに来ているが、いかがと。高石局長は、「まさに御指摘のとおり」「学校、家庭が二人三脚になってそうした生活の基礎、基本になるものを身につけさせるようにしていかねければならない」「正しい家庭についての教育というもの、教科で言いますと社会科や保健体育、家庭科という授業でやっておりますので、そういう面での教育内容

を充実していくことも必要であろう」と答えた。

江田氏は、「これからの教育の一つの大きな柱に据えなければいけない」。家庭科を見直す必要性、文部省の職業教育課で家庭科を扱っていることも考え直す必要があると述べ、差別撤廃条約との関連で検討会議をつくったが、その報告をしてほしいと要望。

高石局長は、各専門家の意見をお伺いするところから始めている段階。本年中にはその基本的な考え方にめどをつけたい、と。

江田氏は、審議をオープンにと望んだ後、男女の区別を家庭一般を学んでいく上でなくしていこうという方向性ははっきりしている和理解しておいていいか、と問い詰める。

高石局長は、小学校の低学年の教科構成にも議論があり、その延長線上で家庭科を考えたい。「したがいまして、方向としてはより内容を充実していくという方向になろうかと思えますけれども」、今後の検討会議の御意見を承って対応を考えたい、と。

江田氏は、女子の家庭科は絶対に必修で守ってくれという声が強いが、これは当然。「女子必修、男子もやはり必修。男女ともに選択にしてしまうということになる可能性はある

のですか、ないのですか」と畳みかける。

高石局長「今のところその点については全く白紙でございますが、基本的にはそういう内容について強化していかなければならないという態度でございます」。

江田氏、男女とも選択は形式的には条約の方向に合致するかもしれないが、男女ともに家庭責任を果たしていこうという条約に反する。現状で選択すると、男はもちろん、キャリアウーマンとして頑張っていこうという女性性は、家庭科に見向きもしなくなる。それは日本の現状をますます悪くする、と。

そのあとで、中学校の技術・家庭の方が高校よりさらに問題が深い。検討会議では中学校の問題をどうするか、と質問。高石局長「高等学校の家庭一般をメインのテーマにしておりますが、付随的に中学校の技術・家庭科についても当然論議が及んでくるのであらうと思えます」。江田氏「付随的というのは、この検討のテーマにはちゃんと入るということとでよろしいのですか。高石局長「条約上の関係でその問題についての指摘も若干なされておりますので、検討はしていかなければならないと思っております」。

皆さん！ 文部省、変わってきましたぞ。

## 情報2

「家庭科の男女共修をすすめる会」家庭科教育検討会議でレクチュア

みだしの会議は、三回目にあたる九月三日、「共修をすすめる会」から「高校家庭一般の男女共修についての意見」を求めた。このための諸連絡に際して、文部省側の態度は誠実で好感が持てた。会議の内容については「非公開」を何度も念押され、江田氏が文教委で要望されたように、オープンにしてはなぜ悪いのか、と疑問を抱いたが、ともにも角にも、「一般普通教科として男女共修（共学・必修）にすべきである」と会の主張を開陳できたのは、画期的なできごとであった。

## 情報3

全国高等学校PTA連合会、驚愕の大会決議

鹿児島で開かれたみだしの大会は、八月二十九日、「全国三百万の会員の代表六千名が討議した結果」と銘打って、次のような決議を採決した。

一、社会退廃の一因は、家を省み、郷土を愛し、国をおもう、国民としての基本理念の欠如から由来していることであり、心の尊厳を培う道徳教育を早急に確立すべきである。又

学校行事において、国旗の掲揚、国家の斉唱を行わない一部の風潮は誠に遺憾であり、我々は重大な関心をもってこれらの問題に取り組む必要がある。

二、性風俗の乱れは近年益々増長の一途をたどり、図書出版物、放送放映番組、性娯楽施設の増加等に見られ、青少年に与える影響は計り知れないものがある。我々は親権を行使して地域の環境浄化に取り組み、又これらの排除運動、規制化に向けて関係機関の協力を求めてゆく。

三、家庭の機能崩壊が論じられ、望ましい母性を育てる子女の教育が叫ばれている時、「婦人差別撤廃条約」の批准に関連して女子必修、男子選択という現行の「家庭科」履修形態が改変されようとしており、二十一世紀に生きる子女の人間形成上ゆるがせにできない問題である。高等学校の科目「家庭一般」の現行履修形態は絶対に存続されるべきである。

## 情報4

48婦人団体、家庭科についてシンポジウム開催

九月二十一日、参議院議員会館で婦人団体主催による「家庭科問題をめぐるシンポジウム」が開催された。和田典子氏の経過報告の

後、パネラー四人の話に入った。

戦後、男女共修の新しい家庭科の創設に貢献した山本松代氏は、その時の苦労と熱い思いを語り、又、「二、三年で農林省に移り、共修の家庭科を育てられなかったことが、今の自分の苦しみである」。横浜国立大学で家庭科教育法を教える牧野カツコ氏は、「まず、なぜ家庭科が男女に必要なのか、なぜ今でも女子必修なのかを歴史的にとらえさせている。男子の受講者も増えている」。国民教育研究所所長の木下春雄氏は「高校入試でも類型化の中で、男女差別、分轄がなされている」。長野県立梶川高校の家庭科教師青木彰子氏は「共学を受けた生徒が家庭科についてしっかりした考えをもち、高校の職場にはいつて来ている。うれしい。生徒は家庭科をやってよかったと言っている」。

会場質問の「共修はわかったが、それをやる先生がいるのか」に対し、「制度が変わる時、従来も、教師の再教育が行われてきた」「教師は目の前の子供を見ながら、常に勉強しなければならない。それはどの教科も同じ」と現場の教師たち。今後の運動のすべめ方として、女子必修を請願しているところに意見書を出すことが提案され閉会。

# 十字路

★神奈川・ドヤ街の肉声

中学生に

そっぽを向いていた中学生たちがしきりと耳をすましている。「教師」は横浜のドヤ街「寿地区」の話をした。そこで暮らす人たちに字を教え

ている自分の体験談を。中学生による浮浪者殺傷事件が起きて一年近くなる昨年十二月から海老名市立有馬中学校の教師に頼まれて、大沢敏郎さんは月一回、そんな授業を続けてきた。毎回出席し写真を撮ってきた写真家の坂本鉄平さんは「生徒のかわりに圧倒される」と。「つっぱりと呼ばれる生徒が一番求めているのは、人間としてどう生きるべきか、でしょう。今の学校教育で一番欠けているものがこの授業にはあるように思えます」と同校の教師。

(朝日8・5)

・拒否者告発やめよ!!

基本的な人権の侵害などを理由に、指紋押捺を拒んでいる在日外国人五人が国際交流課を訪れ「拒否者に対する告発をやめてほしい」と要望書を提出した。県側は「安易で抜き打ち的な告発はしない」と答えたが、「原

則告発」の姿勢を崩さない。(同8・2)

・夏休み教室で有害食品の実情を

川崎市消費生活センターが子供たちにも消費問題を考えてもらおうと企画した食品添加物検出テストが人気を呼んでいる。有害食品のPRは子供自身に体験させる方が効果が大きいと。(同8・3)

・「眼をさます」若者

反戦と反核を一致点にした「眼をさませカワサキ!」が九月二日開かれる。二百人、千人と参加者は増え、今年三年目。行政からの援助は一切なし。(同、8・11、山口里子)

★北海道・「教育改革」で質疑

「教育を考える全道シンポジウム」(民主教育をすすめる道民連合、北教組主催)で臨教審設置法案の狙い、国民合意による教育改革の進め方などを討議した。(毎日、7・11)

また同シンポでは学校、家庭、地域での教育の在り方に厳しい意見が続出したが、参加

者は「戦前のように上から押し付けられる教育では、子供たちを戦場に送るだけ」と、各地域で教育論議を重ねていくことを申し合わせた。(道新、7・12)

・修学旅行の黒い周辺——緊急ルポ

「修学旅行を引率する教師が、土産品店から

リベートを「こんなウワサを聞いて記者は洞爺湖で取材した。生徒「この店は安い。他の店は高いからダメと言われた」。が、むしろ指定店は高い。校長に「リベートを受けとっているのでは」と尋ねると「指導上一店に決めただけ」としどろもどろ。学校と業者の癒着立ち切ろう! (毎日、7・16)

・本道高校生はハト派

創価学会北海道高等部が反戦運動の一環として、全道約七千三百人の一般高校生対象に行った平和に関する意識調査がまとまった。戦争に反対83%、反戦活動を56%、自衛隊イ

ヤ66%。同高等部は「おおむね平和について真剣に考えている」と分析。(道新、8・2)

・女性委員サッパリ

各種審議会、協議会など百九十二にのぼる道付属機関の委員のうち女性の比率が、五・八%にとどまっていることがわかった。女性委員ゼロの機関は六割強。(読売、8・25)

・悩める中学教師

中学校教師の組織、札幌研が、札幌市内二十八校の中学校教師対象にアンケート調査を行った。「本気で辞めたいと考えたことがある52%、その半数は「ごく最近」。理由は「適性に疑問」「指導力に限界」「非行問題へのむ

なしさ」

(毎日、8・26)

・自閉症施設(石山) 紛争解決

入所者によるトラブルなどを懸念する住民側の反対があり、建設中止となっていた札幌市南区の自閉症者更生施設「聖静学園石山センター」について、道側の「施設運営に住民も参加」などのあっせん案を住民側が了承し一年ぶりに解決。(読売、8・31、高橋芳恵)

★新潟・高校家庭科を男女共修に

表題を目ざす「今こそ家庭科の男女共学を!!」長岡集会(小野塚サチ子代表)が開かれた。家庭科教師をはじめ、自営業男性、主婦など予定を倍も上回る七十七人が参加。講師に半田たつ子さんを迎え熱っぽい論議が交わされた。(新潟日報、9・3、山口久子)

★千葉・自主夜間中学開設1年に

「松戸市に夜間中学を作る市民の会」が公立夜間中学ができるまでの間、同市勤労会館で毎週二回開いている「自主夜間中学」が満一年を迎えた。二十六人の生徒が熱心に勉強を続けている。講師は三十五人のボランティア。

(毎日、8・3)

・県議選定数訴訟で違憲判決

県議選の一票の重みに「対六・四九の格差を裁判所は「違憲・違法」と断じた。被告の

県選管は上告の意向を示し、自民党は格差は正にすぐ着手する様子はない。人口密集地と過疎地を抱える千葉県を象徴する問題。

(朝日、8・8)

・読み聞かせ授業を全国に公開

地域ぐるみで進めている学校図書館活動を全国の教育関係者に知ってもらおうと、市川市教委と全国学校図書館協議会が十一月市川市内の市立小を開放し公開研究大会を開く。自治体の教委がこのような研究会を開くのは全国でも珍しい試み。

(毎日、8・18)

・心理学応用し障害者訓練

「千葉さくらんぼの会」は、星野公夫・順天堂大学体育学部助教授が考えた、心理学を応用したトレーニングで体の不自由な子どもや青年たちに集中宿泊訓練をした。「肩の力を抜くのよ」などと声を掛け、障害児に主体性を持たせる。効果は上々。問い合わせ0472(61)0867

(朝日、8・23)

・韓国米の輸入やめよ」

五十三年産米の臭素残留問題をめぐる政府の韓国米輸入に抗議するため、千葉、東京、埼玉、栃木、茨城の農業関係者らが千葉港公園で集会を開いた。(毎日、8・28、木田直子)

★岐阜・廃油せっけん評判上々

各務原市は全国で初めて自治体として廃油を原料にしたせっけん作り運動に取り組んでいる。社会問題となっている廃油対策、洗剤・無リン洗剤への対応を市ぐるみで行っている実績に対し評価が高まっている。

(岐阜日日、8・28、高橋和江)

★熊本・平和の輪を広げよう

高校生の反核シンポジウムが開かれ、県下の高校生や教師約五十人が参加。高校生から「私たちは「知らない」のではなく「知ろう」としない」「世代なのは」「いまの日本は本当に平和とはいえない?」。(熊本、8・5)

・「非核熊本県宣言」署名運動

「『非核熊本県宣言』をめざす熊本県民の行動実行委員会」は十二月県議会に署名提出を予定し、同宣言の実現を求める運動を行っている。署名目標は三十万人。☎096(364)7188 (熊本、9・4、中山そみ)

★おめでとう!! 平井和子さん

「あすのふるさとを考える」と題して毎日新聞社が募集した「毎日郷土提言賞」に静岡県土肥町の平井和子さん(We読者・84夏季フォーラム実行委員)が準提言賞に輝いた。提言の内容は「公民館活動などで女性史の講座を設けて欲しい」。(毎日、8・17、編集部)

### ★臨教審、審議を開始★

臨時教育審議会（首相の諮問機関。会長・岡本道雄前京大校長）は9月5日、初会合を開き、中曽根首相から「わが国における社会の変化および文化の発展に対応する教育の実現」のため改革の基本的方策について諮問を受け、3年間の審議をスタート。

首相は「教育改革の目標」として①わが国固有の伝統的文化の維持発展②日本人としての自覚に立った国際人の育成一を強調。

また、森文相は教育改革の重要課題として①社会の変化、文化の発展に主体的に対応しうる人間形成の基礎づくり②学校制度の多様化、弾力化と教員の資質・能力の向上③年齢段階に応ずる多様な生涯学習のあり方④人間評価、人材登用のあり方の再検討など学歴偏重社会の是正一を指摘した。

岡本会長は初会合のあと、臨教審の今後の運営について①数回、委員の自由討議を行い問題点を洗い出す②具体的な検討課題が決まったら小委員会を設置して専門的な調査、検討を行う一との基本方針を明らかにした。（毎日、9・5付）

### ★労働時間見直し中間報告一労基法研★

労相の私的諮問機関、労働基準法研究会（会長・石川吉右衛門東大名誉教授、学識経験者26人で構成）は8月28日の総会で、現行労基法の手直しを内容とする中間報告をまとめた。最終結論は来年夏ごろの予定で、'86年の通常国会で法改正したい考え。

同報告は「1週の法定労働時間を短縮し、1日の法定労働時間を弾力化する」立場から1日9時間・週45時間（現行1日8時間・週48時間）を打ち出している。労働時間の見直しは'47年の同法制定以来初めて。

労働省は①週40時間が世界の大勢だが、わが国の調査では週45時間以下の企業が多く、受け入れやすい②1日9時間、週5日で週休2日制の実現も可能一などと説明。

しかし、零細企業については段階的に実

施する、としているが「1日9時間労働が一人歩きし、結果的にこれまでより過重労働を強いられるおそれがある」（真柄総評事務局長）、また1日8時間労働が定着しているわが国では、生活時間がズレ、家庭への影響もかなり出てくるだろう、と反発がある。（毎日、8・29、31付）

### ★「育児時間」男子職員にも一田無市★

東京都田無市は9月10日、これまで女性職員にだけ認めてきた「育児時間」を、共働きの男性職員にも適用することにし、市議会に提案。同17日「時期尚早」と継続審議になり、成立は12月の市議会に持ちこされた。しかし、改正条例案に全会派が賛成しているため、その時可決成立し、来年初めから実施される見通し。

労基法第66条では、生後一年に達しない乳児を育てる働く女性に、休憩時間以外に1日2回それぞれ最低30分の「育児時間」を使用者に請求できる権利を認めている。

同市では「母乳ではなく、保育園につれていって人工乳で育てる女性職員が増えている。育児時間を保育園への送り迎えに利用しているのが現状で、父親が送り迎えするほうが都合のいい共働き職員もいるはず。そこで育児時間の適用を女性職員に限定するのは、男女平等からいっておかしいと判断した」としている。

国家公務員、地方公務員ともに男性職員に育児時間を認めるのは「全国的に初めてのケース」で、特別の家庭内事情がある場合に限ってそれを運用した例は東京都渋谷区ぐらい。（朝日、毎日、9・11、18付）

### ★身障者雇用実態調査一労働省★

労働省は8月24日、身障者雇用実態調査をまとめた。同調査は身障者5人以上を雇っている事業所のうち13,000をピックアップして昨年10月実施。

常雇いの身障者は314,00人（うち女子58,000人）で'78年調査より81,000人増。



産業別では製造業45.7%、サービス業17.5%、卸・小売業12.9%。障害の種類は、肢体不自由67.2%、聴覚障害18.2%、内部障害7.8%、視覚障害6.6%。肢体不自由の中では47%が下肢機能障害。障害の度合いは中度が37.4%を占め最も多い。

採用以前から身障者だった人の入社後の平均勤続年数は8年7ヵ月。平均給与は月額181,000円（男子199,300円、女子116,400円）で一般労働者の86%。

身障者のため、作業をしやすくしたり健康管理に気を使うなどなんらかの配慮をしている事業所47.8%、今後配慮する予定の事業所は13.2%。

事業所側が身障者の採用に当たって重視するのは体力が54.4%、次いで性格、技能。

事業所は22.8%が配置や仕事の質、健康管理面でなんらかの負担を感じている。

身障者採用経路は職安が29.1%、縁故25.3%、学校12.3%。

精神薄弱者の雇用状況も調査したところ、常雇いの精薄者は35,000人（うち女子15,000人）平均給与は月額94,600円。

（毎日、8・25付）

### ★「日本人の栄養所要量」第3次改定★

1日にどのくらいの栄養が必要かを示す「日本人の栄養所要量」について公衆衛生審議会（厚相の諮問機関、山口正義会長）は9月22日、'85年度から5年間使用する第3次改定をまとめ渡部厚相に答申した。

栄養所要量は国民の体位の変化や栄養学の進歩に対応してほぼ5年ごとに見直しが行われている。過去2回（'75年、'79年）の見直しでは、太り過ぎや成人病対策のため熱量摂取量が低く抑え込まれたほか、脂肪、塩分の適正摂取量が定められた。今回は栄養所要量自体はほとんど変わらず、所要量の設定方法が大きく変更されたもの。

改定点は①性別年齢別に加え新たに身長別を設定②職業の種類別だった分類を日常生活の内容別に改定③日常生活に必要な運動量を提示一の3点。一人一人が自分にあてはめて使いやすい表示法に工夫されている。

（朝日、毎日、9・23付）

### ★国の審議会における婦人の参加状況★

内閣審議室は8月24日、「国の審議会における婦人の参加状況調査結果」（6月1日現在）をまとめた。審議会の総数は204で委員数は4642人。このうち婦人委員は242人で5.2%（'75年2.4%、'80年4.1、'83年4.9）だが政府目標の10%にはまだまだ。

婦人委員がいる審議会は112で5.49%（'75年30.8%、'80年46.2、'83年53.7）。今年初めて婦人が登用されたのは農政、企業会計、気象など5審議会。（毎日、8・25付）

### ★婦人議員、都市部ほど多い★

日本婦人有権者同盟（紀平悌子会長）は9月6日「婦人の政策決定参加状況調査」（6月現在）を発表。47都道府県・10政令指定都市と東京都23区26市7町を対象に、公選による知事、区市町・長、各議会議員、公務員における課長以上の管理職などに占める女性の比率をまとめたもの。

議員は、都道府県1.3%、政令指定都市4.8%、東京都8.3%。婦人議員の数と議会を通す委員に占める婦人の数は正比例している。議員の占める割合が13.3%と高い国立市では選管75%、教育委員40%、逆に議員3.6%の狛江市では委員が0。

行政における管理職は、東京都で第1回（'78年）2.3%だったのが今回4.1%。だが内容を見ると、福祉関係、病院、保健所などの職種に半数近くが集中、実態はあまり変わらない。（毎日、9・7付）

### ★「元氣ingJUMP」学校解放宣言 10代のフェスティバル★

9月8日、「学校の管理の中でしらせ続けるのは、よそう。10代のネットワークを作ろう」と、東京・四谷公会堂で午前11時から午後8時までフェスティバル「元氣 ing JUMP」が開かれた。「学校解放新聞」に携わっている中・高生と10代の若者によって企画、10代の若者が中心に集まった。

### ☆家庭科の男女共修をすすめる会集会☆

「男たちも訴える一実現させよう家庭科男  
女共修」10月27日、1時半～於婦選会館

自分や自分の周りの人たちが元気  
でいると、ついつい、ずっとこのま  
ま普通に、元気であるものと思っ  
てしまうものだ。

娘が聞いたこともない病名で入院  
騒ぎをおこしたのは一年前。今はお  
陰様ですっかり元気になったが、青  
天の霹靂(へきれき)のその日、私は必死で思い  
込もうとしていた。病むのも普通の  
内だと。『何か』にとって不都合な  
ものを切り捨てるのが普通であって  
はならない。何もかもひっくりめて  
はばたけたら——と。

### ★Weバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉創刊号いでたちぬ、いま

6月号共に生きる

7月号新しい家庭科とは

8・9月号反戦とは、平和とは

11月号家事労働を問う

12月号家庭・家族

1月号新しい男と女のかかわりを

〈vol.2〉4月号教師は、今こそ声を

6月号はたらくことをめぐって

7月号コミュニケーション

8・9月号老いを考える

10月号今、教科書問題を問う

11月号食べるといふこと

12月号着るといふこと

増刊号学校はよみがえり得るか

1月号「1984年」

2・3月号住むということ

〈vol.3〉4月号PTAって何

5月号いまこそ、家庭科を問う

6月号地域に生きる

7月号少年・少女たち

8・9月号“遊ぶ”ということ

10月号支え合いつつ ひとり立つ

◆泉には読者から寄せられ  
る情報を、どんどん載せて  
いきたいと思っております  
が、何分にも月刊誌のこと  
早めにご連絡を。(青木)

◆九月十四日。東京芸術座  
公演で、八月にお会いした  
藤田健次さん原作「看護婦  
のオヤジががんばる」を見た。  
出勤・登校前の朝の情景。  
テンテコ舞を見ながら満員  
の客席はかえってシーン。  
その客席から小さな女の子  
の声「たいへんだね」緊  
張が一度に解けて思わず笑  
い声があがる。ほんとに「た  
いへんだ、つたね」。しかし、  
まだまだオヤジががんばって  
いる。(中野)

◆どんな言い訳も言いたく  
ない程、購読者数が伸びな  
い。四年目の企画を出し合う  
と同時に、Weの「病い」を見  
つけ出す作業もしている。  
自分自身の状況に気付く  
ことが、生きることの第一  
歩と思うから。  
◆各地で教研集会などが開  
かれる時期。どなたかチラ  
シをまいたり本を売って下  
さいませんか、ご一報をお  
待ちします。(馬場)

◆いのちが病み、社会が病  
み、自然が病む。心が病み  
家庭が病み、人間関係が病  
む。病んではじめて知る人  
生の味—そんな境地を決し  
て生み出さない病原菌に、  
しつかととりつかれてしま  
った私たち。平均寿命だけ  
は伸びるけれど—。丸橋  
氏の提唱される「癒しの思  
想」を、つくり出さねばな  
らぬ所に来ています。  
◆次号のテーマは「つきあ  
いを考える」です。(半田)

### 新しい家庭科—

発行所/(有)ウイ書房

Vol. 3 No. 7 1984年10月20日発行

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

〒530(年間購読料・増刊号含¥6000)

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

編集兼発行人/半田たつ子

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

—Weの取り扱い店一覧— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい（9月19日現在）

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。  
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。